

中屋敷東遺跡・田中田遺跡・大沼下遺跡

北関東自動車道路(伊勢崎PA(仮称))建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 0 7

東日本高速道路株式会社関東支社高崎工事事務所
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

中屋敷東遺跡・田中田遺跡・大沼下遺跡

北関東自動車道路(伊勢崎PA(仮称))建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 0 7

東日本高速道路株式会社関東支社高崎工事事務所
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

群馬県から栃木県を經由して茨城県とを結ぶ北関東自動車道は、北関東地方を横断して内陸部と太平洋岸とを結ぶ交通網の最重要幹線道路として計画され、早期完成を目指して現在も急ピッチで建設工事が進められています。群馬県では、関越自動車道の高崎ジャンクションを起点に、前橋市南部から伊勢崎市、みどり市、太田市と五市域を通過して栃木県に抜けていきます。この県内通過路線のちょうど中間地点にあたる伊勢崎市波志江町で、パーキングエリアを建設することとなり、これに先立つ埋蔵文化財の保護を目的とした発掘調査が実施される運びとなりました。

北関東自動車道の本線部分についての発掘調査はすでに終了しており、多大な成果が報告書として刊行されています。このたびは、その周辺地域の発掘調査ということで、本線部分で判明していた古代集落や古代水田址について、分布する範囲や密度の濃淡などを明確にすることが出来ました。また、水田耕作土から出土した弥生土器は、これまで群馬県南部の低地帯では知られていなかった古いタイプの稀少例として注目されます。

このたび、このような発掘調査の成果をとりまとめ、報告書として刊行する運びとなりました。古代人たちが残してくれた貴重な歴史資料として、本書を多くの方々々に活用していただけたら幸甚です。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行に至るまで、ご協力を賜った東日本高速道路株式会社関東支社、同社高崎工事事務所、群馬県教育委員会文化課、伊勢崎市教育委員会、地元関係者の皆様に心より感謝の意をあらわし序といたします。

平成 19 年 1 月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 高橋 勇夫

例 言

- 1 本書は、北関東自動車道路伊勢崎PA（仮称）建設に伴い事前調査された中屋敷東遺跡・田中田遺跡・大沼下遺跡の発掘調査報告書である。
 - 2 中屋敷東遺跡は伊勢崎市波志江町2668・2429・2441・2448・2563他、田中田遺跡は伊勢崎市波志江町2404・2678、大沼下遺跡は伊勢崎市波志江町2430・2434に所在する。
 - 3 北関東自動車道本線部分における波志江中屋敷東遺跡の発掘調査成果は「波志江中屋敷東遺跡」（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2002）として刊行済みである。本報告で扱う中屋敷東遺跡・田中田遺跡・大沼下遺跡は、波志江中屋敷東遺跡の隣接地点であり、連続する同一遺跡である。すでに登録されている埋蔵文化財地名では、本遺跡1区・2区・4区・5区西半については「中屋敷東遺跡」、3区については「田中田遺跡」、5区東半については「大沼下遺跡」に相当するが、記述上の混乱を避けるため、本書では調査区名をそのまま用いることとする。
 - 4 事業主体 東日本高速道路株式会社関東支社
高崎工事事務所
 - 5 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
 - 6 履行期間 平成15年6月19日～
平成16年3月31日
（調査期間平成15年7月1日～
平成16年3月31日）
 - 7 調査組織
事務担当 小野宇三郎、住谷永市、神保佑史、
萩原利通、右島和夫、真下高幸、
植原恒夫、中東耕志、小山達夫、
竹内 宏、高橋房雄、須田朋子、
吉田有光、森下弘美、田中賢一
事務補助 内山佳子、若田 誠、佐藤美佐子、
本間久美子、北原かおり、吉田茂、
松下次男、狩野真子
- | | |
|--------|--|
| 調査担当 | 飯田陽一、大西雅広、土屋崇志、
坪川雅彦 |
| 8 整理期間 | 平成18年4月1日～
平成19年1月31日 |
| 9 整理組織 | |
| 事務担当 | 高橋勇夫、木村裕紀、津原澤吉茂、
萩原 勉、中東耕志、笠原秀樹、
石井 清、須田朋子、今泉大作、
栗原幸代、斉藤恵利子、柳岡良宏、
佐藤聖行 |
| 事務補助 | 内山佳子、本間久美子、武藤秀典、
北原かおり、若田誠、今井もと子 |
| 整理担当 | 大木神一郎 |
| 整理補助 | 長岡美和子、馬場信子、堀米弘美、
小淵トモ子、山口洋子 |
- 10 報告書作成関係者
本文執筆 第1章-1 中東耕志
第1章-2～第3章 大木神一郎
第4章 古環境研究所
編集作業 大木神一郎
遺構写真撮影 飯田陽一、大西雅広、土屋崇志、
坪川雅彦
遺物写真撮影 佐藤元彦
図版作成 長岡美和子、馬場信子、堀米弘美、
小淵トモ子、山口洋子
 - 11 整理協力者 石器について櫻井美枝（当事業団職員）、縄文土器について原雅信（同職員）から有益な意見をいただいた。記して感謝する。
 - 12 本遺跡の出土遺物と記録資料については群馬県埋蔵文化財センターに保管している。
 - 13 発掘調査及び整理作業を実施するにあたり、群馬県教育委員会、伊勢崎市教育委員会、日本道路公団（現東日本高速道路株式会社）、地元関係者の各位からご指導・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

凡 例

1 挿入中に使用した方位は国家座標(日本測地系)第IX系による座標北を表している。

2 遺構図に記載した標高値、等高線値の数値はmを単位とする。

3 遺構平面図に示した座標値はX軸値・Y軸値とも5桁の数値で示したが、下3桁で示した図もあるので注意されたい。

4 遺構の平面位置の記述にあたっては、座標値の下3桁の数値を記載して示してある。

5 遺構名称は発掘調査時の呼称をそのまま使用し、調査途中及び整理作業段階で不適と思われた遺構名については欠番とした。また呼称については、「[区名-番号-遺構種類]」の順に記載してある。

6 遺構図の縮尺は土坑・ピット1/40、溝平面図1/100・250、溝断面図1/50、水田平面図1/200・1/500を基準としているが、これに限らないので挿入掲載スケールを参考にされたい。遺物図の縮尺は1/3を基準とした。

7 テフラ名称及び本文中で使用する略称は以下の通りである。

浅間A軽石 As-A 浅間山天明3年(1783)

浅間Bテフラ As-B 浅間山天仁元年(1108)

榛名ニッ岳伊香保テフラ Hr-FP 榛名山6世紀中葉

榛名ニッ岳渋川テフラ Hr-FA 榛名山6世紀初頭

浅間C軽石 As-C 浅間山3世紀後半(ただし第4章では3世紀末~4世紀初めの考えをとっている。)

8 挿入に使用した地形図は、国土地理院の地形図1/25000「伊勢崎」である。

9 遺物番号は、本報告記載にあたって、新たに通し番号を付与した。挿入掲載番号と観察表番号及び写真図版の番号は一致する。

10 観察表記載事項は、種類名、出土位置、遺存状況、分量、材質、型式的特徴であり、分量に関す

る単位は観察表に記載してある。

11 本遺跡の発掘調査において、上位面から順に「第1面」、「第2面」、「第3面」と呼称し、記録図面及び記録写真にはその呼称が記載されている。この呼称法は、累重する地層毎に調査面を設定し、各々の面で検出された遺構を順に登録・記録するものである。複数のテフラによって被われ、時期の異なる遺構面が上下に重層することの多い群馬県ならではの調査法といえる。ただし、この調査面は必ずしも同時代性を反映するものではない。また、遺跡内における層序は通常様でないために、広い調査対象地を同一層準毎に調査面を確定することは至難の業である。本遺跡の記録類に使用されている「第*面」は、調査の段階と遺構検出面の深さについての参考データと考え、個別遺構の時期推定には、埋土と地山の層準、出土遺物、遺構間の重複関係を重視して再検討を行った。このため、古墳時代が主体の第2面~第3面検出遺構であっても、古代や中近世に帰属すると認定したものがあ

る。本書の記述では時代別の構成としたため、同一検出面での遺構の一括取り扱いは異なるので注意されたい。

12 遺構の記述にあたっては、遺構の分類に従ったため、必ずしも遺構番号の順番にはなっていない。

目 次

序

例言・凡例

第1章 発掘調査の経緯

- 1 調査に至る経過……………1
- 2 発掘調査の経過……………2
調査日誌抄……………2
- 3 調査の方法と基本層序……………3

第2章 周辺的环境と遺跡分布

- 1 地理的環境……………4
- 2 周辺の遺跡分布……………4

第3章 検出された遺構と遺物

- 1 中世・近世の遺構と遺物……………9
 - (1) 溝……………9
 - (2) 土坑……………12
 - (3) ビット……………29
 - (4) 中・近世の出土遺物……………32
- 2 古墳時代前期～平安時代の遺構……………33
 - (1) As-B直下の水田址……………33
 - (2) 古墳時代1・2期の水田址……………45
 - (3) 古墳時代3期の水田址……………52
 - (4) 耕作溝群……………64
 - (5) 水路……………64
 - (6) 古墳時代以前の土坑……………81
 - (7) ビット……………85
- 3 弥生時代～古代の遺物……………87
- 4 縄文時代の遺構と遺物……………94
 - (1) 集石遺構……………94
 - (2) 遺構外出土遺物……………99

第4章 自然科学分析

- 1 中屋敷東遺跡の土層とテフラ……………100
- 2 中屋敷東遺跡におけるプラント・オパール
分析……………105

第5章 まとめ……………109

写真図版

抄 録

付 図

挿 図 目 次

- 第1図 調査対象区域図
 第2図 基本土層
 第3図 周辺遺跡の分布 (1/25000「伊勢崎」より作成)
 第4図 中・近世の溝 (1)
 第5図 中・近世の溝 (2)
 第6図 中・近世長方形～楕円形土坑
 第7図 中・近世長方形～正方形土坑
 第8図 中・近世長方形土坑
 第9図 中・近世長方形～楕円形土坑
 第10図 中・近世長方形～楕円形土坑
 第11図 中・近世長方形～楕円形土坑
 第12図 中・近世楕円形土坑
 第13図 中・近世円形土坑
 第14図 中・近世不定形土坑
 第15図 中・近世不定形土坑
 第16図 中・近世溝状土坑
 第17図 中・近世溝状土坑
 第18図 中・近世溝状土坑
 第19図 中・近世溝状土坑
 第20図 中・近世ビット列 (5-1区)
 第21図 中・近世のビット (5-1区)
 第22図 中・近世の出土遺物
 第23図 古代 (As-B直下) 水田全体図
 第24図 古代 (As-B直下) 水田1区全体図
 第25図 古代 (As-B直下) 水田1区部分図 (1)
 第26図 古代 (As-B直下) 水田1区部分図 (2)
 第27図 古代 (As-B直下) 水田1区部分図 (3)
 第28図 古代 (As-B直下) 水田1区部分図 (4)
 第29図 古代 (As-B直下) 水田1区断面図
 第30図 古代 (As-B直下) 水田3-1・2区全体図
 第31図 古代 (As-B直下) 水田3-1区部分図
 第32図 古代 (As-B直下) 水田3-2区部分図
 第33図 古代 (As-B直下) 水田3-2区断面図
 第34図 古代 (As-B直下) 水田4区全体図
 第35図 古代 (As-B直下) 水田5-3区全体図
 第36図 古墳時代1・2期水田全体図
 第37図 古墳時代1・2期水田1区全体図
 第38図 古墳時代1・2期水田1区部分図
 第39図 古墳時代1・2期水田1区断面図
 第40図 古墳時代1・2期水田4区全体図
 第41図 古墳時代1・2期水田4区部分図 (1)
 第42図 古墳時代1・2期水田4区部分図 (2)
 第43図 古墳時代1・2期水田畦5-3区部分図
 第44図 古墳時代3期水田全体図
 第45図 古墳時代3期水田痕跡3-1・2区全体図
 第46図 古墳時代3期水田痕跡3-1・2区部分図
 第47図 古墳時代3期水田4区全体図
 第48図 古墳時代3期水田4区部分図 (1)
 第49図 古墳時代3期水田4区部分図 (2)
 第50図 古墳時代3期水田4区部分図 (3)
 第51図 古墳時代3期水田痕跡5-1区部分図
 第52図 古墳時代の耕作溝群
 第53図 古墳時代～古代の溝群 (1～3区) 全体図
 第54図 古墳時代～古代の溝群 (4・5区) 全体図
 第55図 古墳時代～古代の溝 (1)
 第56図 古墳時代～古代の溝 (2)
 第57図 古墳時代～古代の溝 (3)
 第58図 古墳時代～古代の溝 (4)
 第59図 1区7号溝断面図
 第60図 古墳時代～古代の溝 (5)
 第61図 古墳時代～古代の溝 (6)
 第62図 古墳時代～古代の溝 (7)
 第63図 4区1・2・3号溝断面図
 第64図 古墳時代以前の溝 (1)
 第65図 古墳時代以前の溝 (2)
 第66図 古墳時代以前の溝 (3)
 第67図 古墳時代以前の溝 (4)
 第68図 古墳時代以前の長方形土坑 (1)
 第69図 古墳時代以前の長方形土坑 (2)
 第70図 古墳時代以前の円形土坑 (1)
 第71図 古墳時代以前の円形土坑 (2)
 第72図 古墳時代以前の不定形土坑
 第73図 古墳時代以前のビット
 第74図 古墳時代～古代の遺物 (1)
 第75図 古墳時代～古代の遺物 (2)
 第76図 弥生土器 (1)
 第77図 弥生土器 (2)
 第78図 縄文時代の5-3区1号集石遺構
 第79図 集石遺構出土砥石岩片 (1)
 第80図 集石遺構出土砥石岩片 (2)
 第81図 集石遺構出土縄文土器及び石器
 第82図 遺構外出土縄文土器
 第83図 遺構外出土石器
 第84図 3-1区D地点の土層柱状図
 第85図 3-1区A地点の土層柱状図
 第86図 4区A地点の土層柱状図
 第87図 中屋敷東遺跡におけるプラント・オパール分析結果

写真図版目次

- P.L. 1 古墳時代(As-C下)水田面4区 古代(As-B直下)水田面1区
P.L. 2 4区6号溝 5-1区1号溝 5-3区3号溝 5-3区中・近世溝群
P.L. 3 1区1～3・5・7・8～10・23・30・31号土坑
P.L. 4 1区11・12・14・18・19・22・24・25・28・32号土坑
P.L. 5 1区26・27・34・35号土坑 4区3・8・11・15号土坑
P.L. 6 4区38・39・44号土坑 5-1区1～4・19号土坑
P.L. 7 5-1区5・20号土坑 1区4・15・20号土坑 4区10・18・27号土坑
P.L. 8 4区17・19・21・22・24・28・29・31号土坑
P.L. 9 4区1・2・12・13・32～37号土坑 1区13・16・21号土坑
P.L. 10 4区14・30・40号土坑 4区23号土坑土層断面 5-1区ピット列 5-1区38号ピット 5-1区42号ピット
P.L. 11 古代(As-B直下)水田1区全景 古代(As-B直下)水田1区水路全景
P.L. 12 古代(As-B直下)水田1区畦近景 古代(As-B直下)水田1区田面検出状況
P.L. 13 古代(As-B直下)水田3区田面検出状況 古代(As-B直下)水田3区畦近景 古代(As-B直下)水田3区畦近景 古代(As-B直下)水田3区水口近景
P.L. 14 古代(As-B直下)水田4区全景 古代(As-B直下)水田4区田面検出状況 古代(As-B直下)水田5-3区畦検出状況 5-3区南壁土層断面 5-3区南壁土層断面
P.L. 15 古墳時代1・2期水田4区田面検出状況 古墳時代1・2期水田4区畦検出状況 古墳時代1・2期水田4区畦検出状況 4区水田面検出状況
P.L. 16 古墳時代3期(As-C混土下)水田3区田面検出状況 古墳時代3期(As-C混土下)水田3区田面検出状況
P.L. 17 古墳時代3期(As-C混土下)水田4区全景 古墳時代3期(As-C下)水田4区中央部
P.L. 18 古墳時代3期(As-C下)水田4区東半部全景 古墳時代3期(As-C下)水田4区畦区画近景
P.L. 19 古墳時代3期(As-C下)水田4区西半部 古墳時代3期(As-C下)水田4区西半部畦区画全景
P.L. 20 古墳時代3期(As-C下)水田4区畦と水路検出状況 古墳時代3期(As-C下)水田4区畦検出状況 古墳時代3期(As-C下)水田4区水口検出状況 古墳時代3期(As-C下)水田4区畦検出状況 古墳時代3期(As-C下)水田4区畦検出状況
P.L. 21 3区古代～古墳時代の耕作溝群 1区4～6号溝 1区古代～古墳時代の溝群
P.L. 22 1区10～17号溝
P.L. 23 1区7号溝合流地点 1区7号溝東部段差地点 1区7号溝西部段差地点 1区7号溝堰状部分 2区1～3号溝
P.L. 24 2区1～3号溝遠景 2区2号溝土層断面 3区18～21号溝 3区19号溝と20号溝合流地点土層断面 3区23号溝全景 3区24号溝土層断面 3区26号溝 3区26号溝土層断面
P.L. 25 4区2号溝・3号溝全景 4区1号溝・2号溝・3号溝全景
P.L. 26 4区2号溝・3号溝土層断面 4区2号溝遺物出土状況 4区10号溝 4区10号溝土層断面 4区4号溝 4区4号溝土層断面
P.L. 27 4区8号溝 4区8号溝土層断面 5-1区2号溝土層断面 5-1区2号溝 5-1区4号溝 5-1区4号溝土層断面
P.L. 28 5-3区6号溝・7号溝 5-3区5号溝 5-3区5号溝土層断面 5-3区7号溝土層断面
P.L. 29 4区41号土坑 4区43号土坑 5-1区6号土坑 4区5号・6号土坑 4区20号土坑 4区45号土坑 4区42号土坑 4区3号ピット
P.L. 30 4区4号ピット 4区5号ピット 5-1区37号ピット 5-1区39号ピット 5-1区40号ピット 5-1区41号ピット 5-1区45号ピット 5-3区集石遺構検出状況
P.L. 31 中・近世の遺物 古代～古墳時代の遺物
P.L. 32 弥生土器
P.L. 33 縄文土器と石器

表 目 次

表1	周辺遺跡一覧表	6・7
表2	中・近世の土坑一覧表(1)	13
表3	中・近世の土坑一覧表(2)	14
表4	中・近世の土坑一覧表(3)	21
表5	中・近世のピット一覧表	31
表6	中・近世遺物観察表	32
表7	古代(A _s -B直下)水田区画計測表	41
表8	古墳時代1・2期水田区画計測表	49
表9	古墳時代3期水田区画計測表(1)	61
表10	古墳時代3期水田区画計測表(2)	62
表11	古墳時代3期水田区画計測表(3)	63
表12	古墳時代以前の土坑一覧表	85
表13	古墳時代以前のピット一覧表	85・86
表14	古墳時代～古代の遺物観察表	89
表15	弥生土器観察表(1)	90
表16	弥生土器観察表(2)	91
表17	弥生土器観察表(3)	93
表18	石器一覧表	99
表19	テフラ検出分析結果	103
表20	屈折率測定結果	103
表21	プラント・オバール分析結果	107

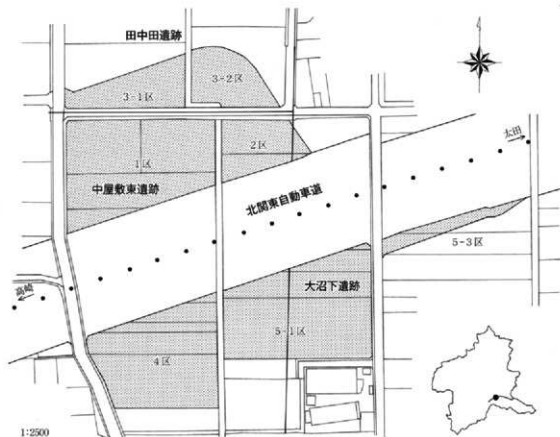
第1章 発掘調査の経緯

1 調査に至る経過

本遺跡は平成15年6月4日付け旧日本道路公団東京建設局長と群馬県教育委員会教育長及び財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長の三者の間で締結された、「北関東自動車道（伊勢崎PA（仮称））建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」に基づいて、同年7月から発掘調査を実施した。調査を実施するにあたり、同年6月19日付けで日本道路公団東京建設局と当事業団の間で、「平成15年度北関東自動車道（伊勢崎PA（仮称））埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結し、同年7月から平成16年3月までの発掘調査計画が決定された。

本事業は北関東自動車道（高崎～伊勢崎）建設に伴う発掘調査の一環として、平成10～11年度に実施された波志江中屋敷東遺跡の調査成果から判断し、対象地約25,000㎡全面に遺跡がおよぶものと推測された。特に、調査実施にあたり懸案事項として協議されたのは、北関東自動車道本線にかかる波志江中屋敷東遺跡では、現水田面から凡そ4メートル以上の深所から縄文土器が検出された点であった。

また、本事業地内にかかる遺跡名称は、県教育委員会と伊勢崎市の間で協議され、中屋敷東遺跡と田中田遺跡、大沼下遺跡に区分された。よって、北関東自動車道関連の本線発掘調査時点では、波志江中屋敷東遺跡と呼称されていた（2002財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団「波志江中屋敷東遺跡」）。



第1図 調査対象区域図

2 発掘調査の経過

発掘調査は、平成15年7月1日から調査の準備を開始し、同年8月1日から現地調査を実施することとなった。調査工程は北側調査区の1区・2区・3区を先行し、南側調査区の4区と5区については、同年11月以降に調査を実施するとの計画が進められた。なお、2～4面の多面調査を実施する必要があるから、各調査区で異なる調査面を同時進行で調査した。

調査担当者は、平成15年8月1日から10月30日まで大西雅広と土屋崇志、平成15年11月1日から平成16年3月31日まで飯田陽一と坪川雅彦である。

調査日誌抄

平成15年

8月1日 大西・土屋の両名で発掘調査開始。
 9月17日 測量用基準杭の設置。
 10月1日 大型重機による1区の表土掘削・排土作業開始。
 10月14日 大型重機による表土掘削終了・浅間B軽石直下水田面の検出作業。
 10月20日 1区水田面の航空測量・空中写真撮影。
 10月21日 1区古墳時代調査面での遺構確認調査開始。2区及び3区表土掘削開始。2区は浅間B軽石直下での遺構確認できず、3区で水田面を検出。
 10月30日 3区浅間B軽石直下水田面の航空測量・空中撮影。
 11月1日 調査担当者が飯田・坪川の両名に変更。
 11月4日 1区古墳時代面、3区浅間B直下水田面の測量開始。大型重機による4区の表土掘削・排土開始。4区で中～近世遺構群の調査開始。
 12月1日 4区で古墳時代面の調査開始。6世紀代の小区圃水田面を検出。5区大型重機による表土掘削・排土作業開始。

12月8日 テフラ・プラントオパール分析資料の採取。
 12月25日 1区古墳時代面、3区の浅間B直下水田面及び古墳時代面の測量終了。
 平成16年
 1月 2区古墳時代面、3区古墳時代前期水田面、4区古墳時代面の調査開始。3区と4区で6世紀代の水田址を検出。
 1月30日 3区の古墳時代前期相当水田址の平面測量終了。
 2月4日 5-3区、小型重機による表土掘削。中～近世の溝群を検出。
 3月17日 4区・5区の古墳時代前期相当水田址の測量終了。
 3月18日 5-3区最終調査面にて縄文時代の集石遺構を検出。
 3月26日 4区及び5区の最終面について、航空写真撮影・測量終了。
 3月29日 現地における発掘調査終了。
 3月31日 現地調査事務所撤収作業終了。

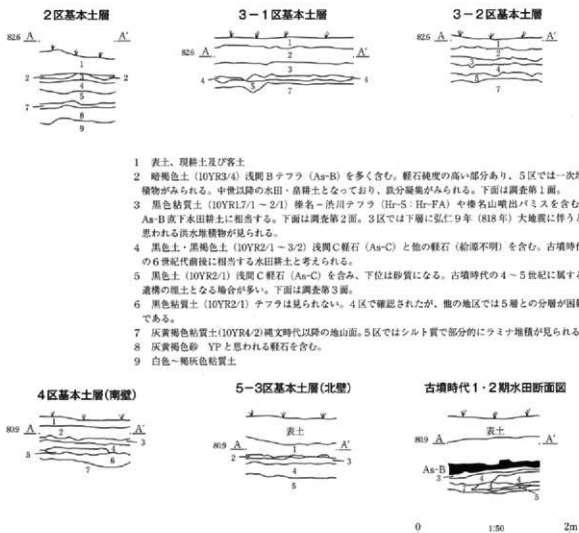
3 調査の方法と基本層序

平面測量にあたっては、日本座標系第9系を用いて、遺跡調査区全体を5m単位の方眼グリッド区分とし、各々のグリッドは、5m単位のX座標値-Y座標値で呼称した。

調査面は最多で4面あり、上位から浅間B軽石直下面ないし浅間B軽石混土層下面(第1面)、黒色粘質土層下面(第2面)、As-C混土層下面(第3面)、灰黄褐色土層上面(第4面)の順で、覆土削除と遺構検出作業を行った。第1面では、As-Bに直接被われた水田面等の検出を主目的とするが、As-B降下以降に掘りこまれた中～近世遺構の検出も含んでいる。第2面では奈良～平安時代の遺構及びAs-B

直下水田の耕作痕等、第3面は古墳時代の6世紀代を前後する遺構、第4面では古墳時代初頭以前の遺構検出を目的とする。遺構番号については、調査面に関係なく各区ごとの通番とした。

基本土層は第2図の通りで、北側に位置する1区～3区では表土から30cm前後、南側の4・5区では表土から60～70cmで地山の粘質土層か砂層に達する。3区では2層下位で弘仁9年(818年)の大地震に伴う洪水堆積物と推測されるローム粒を含む砂質土が見られたが、出土遺物等でその年代的整合性を確認することは出来なかった。



第2図 基本土層

第2章 周辺の環境と遺跡分布

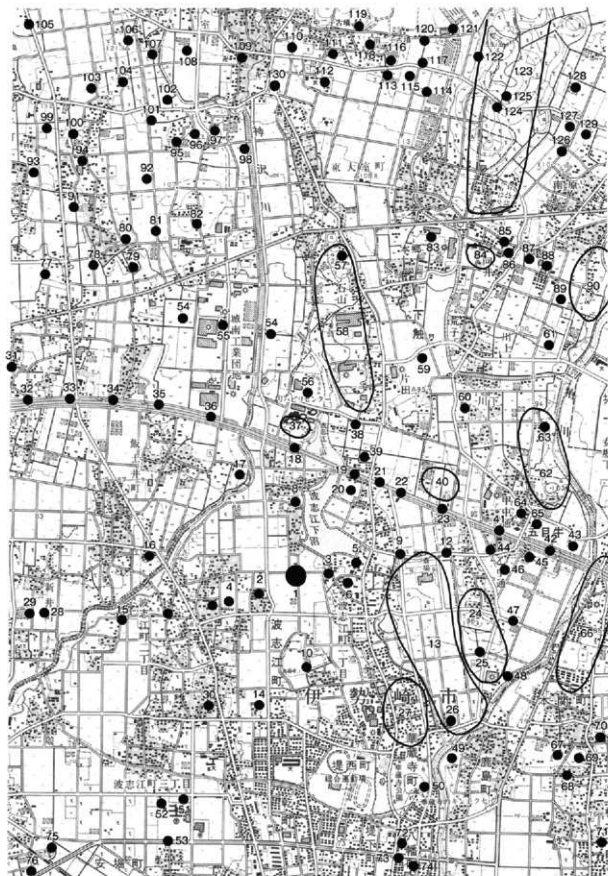
1 地理的環境

中屋敷東遺跡は群馬県南部の中央に位置する伊勢崎市にあり、広大な裾野を広げる赤城山を北方に望む低地帯のなかの微高地と後背湿地が入り組んだ地形に立地する。標高は83.0～81.2mを測り、赤城山裾野南端にあるため、北から南にかけてきわめて緩い傾斜面をなしている。北方1.5km地点にある石山に代表されるような赤城山山体崩壊に伴う「流れ山」が周辺に点在するが、平坦な地形が地勢の大部分を占めている。遺跡の西方約1kmには神沢川、東方約1.8kmには粕川がそれぞれ南流しており、小規模な開析谷が形成されている。本遺跡の東北方には、「波志江沼」を谷頭とした小規模な谷状地形が南側に蛇行して延び、また、遺跡の西側では神沢川の旧流路と想定される幅約300mの低地が延びている。波志江沼は、神沢川と桂川から取水した灌漑用溜池及び養魚場として利用されており、寛政年間に沼地として存在したことが知られる（「伊勢崎風土記」）が、その開池時期についてはよくわかっていない。赤城山南麓の伏流水が湧出し、天然の池であった可能性はあるが、池端まで古墳～平安時代の集落や水田が検出されていることから、人工的な溜池として開かれるまでは、小規模な湧水池だったと考えられる。遺跡の西方約2km強の位置で、南東方向に展開する広瀬川低地帯の左岸に達する。これは古利根川の流路と考えられており、一段低い沖積低地となっている。現在、この地点の広瀬川沖積面標高は76m前後で、本遺跡地とは5m以上の比高があり、また直線距離でも2km離れていることから、古利根川による洪水被害の脅威は直接受けなかったと思われる。

2 周辺の遺跡分布

赤城山麓地域は、みどり市（旧笠懸町）の岩宿遺跡とともに日本旧石器研究の先駆けとなり、その後の発掘調査においても旧石器時代の遺跡が濃密に分

布することが判明している。本遺跡の北方約1.2km地点にある下触牛伏遺跡（56）では、直径50mほどの環状石器群が集落構造解明に有効な資料として注目される。縄文時代には赤城山南麓地形や扇状地の裾野末端付近に数多く分布する湧水付近に集落遺跡が立地し、特に前期以降遺跡数が激増する。隣接する波志江中屋敷遺跡で検出された早期稲荷台式の堅穴住居は、本地域における縄文集落の嚆矢として位置づけられる。縄文晩期から弥生時代中期前半の遺跡はほとんど見られず、弥生中期後半からふたたび集落遺跡の存在が知られる。この時期は短期小規模集落が特徴で、これらの遺跡から出土する土器群は、中部高地型柳描文と異なり群馬県東部から栃木県、さらに埼玉県北部の土器群との関連性が注目される。後期では関東地方北東部に分布する十王台式や二軒屋式土器出土遺跡が点在する。約3kmほど北方の赤城山南麓では、後期末の埴式土器の集落が知られている。これに継続する古墳時代前期の遺跡は赤城山南麓で見られ、本遺跡周辺の低地帯では新たに形成された集落が分布する。また前代と比べた遺跡数の激増から、外來集団の「移住」「入植」が想定されている地域のひとつでもある。波志江中宿遺跡では多数の粘土採掘坑が検出され、S字甕に関わる土器生産遺跡として注目される。低地の調査では5世紀以前に遡る水田址が確認されており、古墳前期以降の本格的な開田が判明している。5世紀には竈導入と同時に新たな集落形成も見られ、豪族居館と想定される荒砥荒子遺跡が注目される。また、お富士山古墳（前方後円、125m）や華藏寺裏山（前方後円、40m）は5世紀代の古墳としてよく知られている。6世紀以降も低地部分で水田址が検出されていることから、農耕集落が存続し、水田経営も継続していたことが知られる。奈良～平安時代になると、牧草にいとまがないほど遺跡数、遺跡規模が増大する。地域開発の順調な発展は、低地のほぼ全域で見られる浅間B軽石直下の水田からも察せられる。白鳳期と考えられる上植木庵寺の創建も、このような地域発展を経済的な背景としたと推測される。



第3図 周辺遺跡の分布 (1/25000「伊勢崎」より作図)

第2章 周辺の環境と遺跡分布

表1 周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	遺跡の概要	文献
1	大沼下遺跡 流志江中屋敷東遺跡 中屋敷東	昭和52年伊勢崎市調査、流志江中屋敷遺跡と同一、古墳時代前期と奈良平安時代の集落。 平10年群像田調査、古墳時代・平安時代の水田、古墳前期の土器・木製品出土。 本報告書による。	12
2	流志江中屋敷遺跡	縄文時代早～後期の遺物包含層、弥生前期集落1棟、古墳時代水田、平安時代集落。	9
3	伊勢山遺跡	旧石器～縄文時代の石器、古墳前期の土器群、近世の墓・溝・土坑。	10
4	流志江中屋敷西遺跡	縄文～弥生時代の土坑、古墳～平安時代の集落と水田、中世の掘立柱建物跡・井戸。	8
5	流志江西岸遺跡	旧石器、古墳前期の集落、中近世の掘立柱建物跡など。	10.11
6	流志江伊勢山古墳	旧3郷村71号墳、横穴式両輪型石室の円墳。	43
7	四原敷遺跡	古墳時代後期の集落・粘土採掘坑、奈良平安時代の集落、近世の屋敷、中近世墓。	7
8	宮貝戸下遺跡	奈良時代の集落跡、中近世の井戸・墓。	66
9	流志江中宿遺跡	旧石器、古墳前期粘土採掘跡、奈良平安時代集落、古墳時代水田、中近世建物跡他。	12
10	流志江梅見山遺跡	縄文早期赤瓦文土器・弥生土器・押形文土器・スタンプ形石器等採取。	8
11	流志江屋敷東遺跡	古墳後期～奈良平安時代の集落、縄文時代の遺構、中近世の掘立柱建物跡。	6
12	五日平新田遺跡	縄文時代早期の集落跡、集石遺構、土坑を検出し、土器・石器多数出土。	13
13	蟹原東古墳群	7世紀前半の古墳が主体、縄文時代の陥穴、方形周溝遺構。	66.75
14	西橋岡遺跡	古墳時代の溝、時期不明の溝。	4
15	流志江中野面遺跡	縄文中期の集落、古墳～奈良平安時代の集落・周溝遺構、As-B下水田、パレススタイル竈。	1.5
16	赤石城跡	赤石氏居城(古伊勢城跡)、漆とビツ列を確認。	70
17	瓦城二之塚遺跡	縄文～後期の集落、古墳前期の集落・墳墓群、古墳時代後期の集落。	67
18	流志江今宮遺跡	古墳、形象埴輪・円形埴輪・太刀・鳥具等出土。奈良時代集落、As-B下水田。	20
19	流志江天神山遺跡	縄文前期の遺物包含層・陥穴、近世の土坑・溝。	19
20	大沼上遺跡	土師器使用の集落跡。	58
21	流志江六反田遺跡	旧石器、縄文時代包含層から弥生土器、平安時代の集落、As-B下水田。	19
22	流志江中峰岸遺跡	平安時代の溝・As-B下水田。	18
23	堀下八幡遺跡	旧石器・縄文早～後期の遺物包含層、語破り式期の集落、平安時代集落。	17
24	地蔵山古墳群	全長60mの地蔵山古墳をはじめ、43基の古墳を発掘調査。	73.74
25	廣手塚古墳	径37m前後、高さ4m前後の円墳、葺石あり。	95
26	間之山遺跡	蟹原東古墳群の一部、古墳前期の集落跡、方形周溝遺構。	66
27	内所山古墳群	箱式石塚の主体部をもつ古墳を検出、築造時期は6世紀中頃から後半と推定。	76
28	新井大田遺跡	古墳時代の溝、奈良平安時代の集落・水田。	3
29	萩原遺跡	縄文時代の陥穴、弥生～奈良平安時代の集落、奈良平安時代の水田、中近世の溝・墓塚。	3
30	流志江館	16世紀の流志江氏・堀井氏の居館。	
31	二之宮幸城神社	神社年代記に館の伝承。	
32	二之宮下東遺跡	縄文陥穴、古墳後期～奈良平安集落、古墳時代洪水層下水田、As-B下水田、中世の館跡・水田・倉。	24
33	二之宮首道遺跡	平安時代の集落、As-B下水田、中世の館、近世の屋敷・大溝。	23
34	飯土舟上遺跡	古墳時代の集落・倉、平安時代の集落・土坑・溝、近世の土坑墓。	18
35	飯土舟中央遺跡	旧石器、縄文遺物包含層、陥穴、古墳後期～平安時代の集落。	22
36	飯土舟二本松遺跡	縄文早～後期遺物包含層、陥穴、古墳前期・奈良平安集落、中近世の方形区画跡。	21
37	宮貝戸古墳群	4基の円墳を発掘調査。	57
38	牛伏第1号墳	径30mの円墳、横穴石室で、袖部形状不明。	58
39	祝堂古墳	「上毛古墳総覧」三郷村第73号墳、横穴式両輪型石室、径30m円墳。	58
40	八幡林古墳群	4基の円墳と4軒の縄文前期の集落を調査。	59
41	五日平南組遺跡(上武道路)	縄文時代前期集落、弥生後期土器群、古墳後期の円墳。	16
42	五日平清水田遺跡(上武道路)	縄文時代集落・集石・配石遺構、古墳～奈良時代の集落、古墳～平安水田9畝。	13
43	五日平清水田遺跡(北関東)	縄文時代包含層・前期集落、古墳時代以降の水田を検出、平安時代の平野畝を確認。	15
44	五日平南組遺跡(北関東)	縄文時代集落、7世紀の大型円墳、前庭部から鳥形平軌出土。	13
45	稲藪山古墳	古墳、古墳時代の倉、古代の水田・倉。	64
46	五日平東遺跡群	縄文早期の土器、縄文前期集落、古墳前期～平安時代集落。	71
47	達磨山古墳	径35m、高さ5mの円墳、葺石あり。	96
48	五日平二子山古墳	地蔵山古墳群中の120m級前方後円墳、現在滅失、「総覧」赤黒14号墳。	97
49	上西原遺跡	古墳～奈良時代の集落・方形周溝遺構。	84
50	華蔵寺裏山古墳	5世紀初頭と推定される墳丘40mの前方後円墳、複合口縁埴輪土器出土。	85
51	中組遺跡	古墳時代前・中期の集落、奈良時代の集落、土坑・井戸。	90
52	中組遺跡	奈良平安時代の集落・掘立柱建物跡。	91
53	中組遺跡	奈良平安時代の集落・方形周溝遺構・溝。	92
54	女塚	中世農具用水道遺構、未完成で放棄されたと考えられる。	54.65
55	二本松遺跡	縄文中期・古墳中期・平安の集落。	56
56	下馳牛伏遺跡	旧石器時代の文化層2面と環状集落、縄文・古墳時代の集落他。	55
57	石山遺跡	旧石器時代末の瓦原器104・掻器4・割片2477出土。	53
58	石山片田古墳群	「上毛古墳総覧」で約70基の古墳が記載、赤黒村59号墳を発掘調査。	52
59	中塚遺跡	古墳時代集落、女塚の一部。	65
60	薄葉遺跡	縄文前期の集落、平安の集落、墨書土器出土。	62
61	川上遺跡	古墳前期～奈良平安の集落、掘立柱建物と多量の瓦から寺院の可能性。	64
62	湖山古墳群(湖山古墳)	全長22mの前方後円墳(湖山古墳)を中核とする6世紀前半～中葉の古墳群。	61.62
63	北邊遺跡(A・B)	縄文早期末～前期の集落、後期の土偶出土。	62

64	寺跡古墳	碑石安山岩割石乱石積の横式無地盤石室。築造時期は6世紀後半。	44
65	五井平削山遺跡	縄文後期の集落。1軒は横式型石室。土偶出土。	60
66	岡山古墳群	上武道路の上植木堂所遺跡で古墳10基を調査。	72
67	新屋敷遺跡	古墳前期・平安時代の集落。墨書土器出土。	82
68	上植木庵寺	白鳳期創建寺院。金堂・講堂・塔・中門・回廊・基礎を検出。瓦・三彩陶片・墨書土器・瓦塔出土。	78.79.80
69	上植木庵寺周辺遺跡	上植木庵寺周辺14地点。古墳前期・奈良平安の集落。中世の土坑墓。	81
70	高山古墳群 高山遺跡	古墳3基。方形特殊遺構。漆を塗布。	98
71	志下遺跡	古墳前期～奈良平安の集落。6世紀代の古墳地。	77
72	八幡町遺跡	古墳後期の集落・溝。	
73	八幡町遺跡(B地区)	古墳時代の集落。平安時代の溝。近世以降の溝。集落跡から石製模造品が出土。	86.87.88
74	八幡町遺跡(D地区)	古墳時代の集落・溝・井戸。	
75	お富土山古墳	墳丘長125mの前方後円墳。後円部に長持型石棺が埋設。土師器と埴輪出土。	93
76	西太田遺跡	弥生中期・古墳中～後期・奈良平安時代の集落。ほかに十玉土器出土。	94
77	茨城上ノ坊遺跡	縄文前期・古墳～奈良平安集落。古墳前期の方形周溝墓。古墳前期北條系土器。中世火葬墓。	25
78	元屋敷遺跡	古墳～平安時代の集落。地割れ跡から噴砂の状況を確認。女棺の一部を調査。	
79	高沼遺跡Ⅱ	平安時代の集落・溝。	
80	高沼遺跡Ⅰ		
81	上野沼遺跡	弥生時代中期末の集落。古墳時代の集落。古墳。	
82	天神遺跡	古墳～平安時代の集落。古墳。内1基は帆立貝形古墳。溝。	27
83	下植木寺遺跡	古墳時代の集落。方形周溝墓。円形周溝墓。	51
84	向井古墳群	桂川の左岸で、下植木遺跡の西側にあたる。横式石室を有する古墳1基が調査されている。	43.44
85	北山遺跡	古墳時代後期の集落。	108
86	下植木向井遺跡Ⅱ地点	縄文前期と中期の包含層。古墳時代集落。	90
87	下植木向井遺跡	縄文早期の集石。古墳後期～奈良平安の集落。樹立柱建物。	49
88	今井志坂南遺跡	縄文前期間山式期の集落。古墳後期の集落。古墳。	48
89	今井南原遺跡	縄文前期・古墳前期～後期～奈良平安の集落。古墳。	47
90	南原古墳群	「上毛古墳総覧」に愛宕山古墳を中心に28基の古墳が記載。8基を調査。	43.44.45
91	鹿嶋集石遺跡	古墳時代中期の溝を伴う方形区画の溝に囲まれた居館・集落。古墳～平安時代の集落。	30
92	西大塚丸山遺跡	古墳時代の集落・古墳。巨石祭壇遺構。平安鍛冶遺構。巨石祭壇遺構から多量の石製模造品。	26.28
93	鹿嶋中屋敷Ⅰ遺跡	古墳時代前期の集落。中世の溝。As-C埋設集落。	112
94	舞台遺跡	5世紀中頃～後半の古墳群。1基は全長42mの帆立貝形古墳。	26
95	福野山遺跡	奈良平安時代の集落。	27
96	鹿田集石遺跡	方形周溝墓。古墳。奈良時代の集落。	
97	鹿田集石遺跡	6世紀後半～7世紀前半の古墳。円形埴輪出土。古墳前期～奈良平安の集落。近世の溝。	34
98	鹿嶋東原遺跡	古墳時代前期～平安時代の集落。	35
99	舞台西遺跡	中世の井戸3基を調査。内耳輪・砥石・石臼・板碑出土。	31
100	鹿子の谷遺跡	東西90m、南北120mの単部堡をもつ。北東、南は自然の崖を数m下に隔らす。	32
101	福野山Ⅱ遺跡	平安時代の集落跡。近世の溝。	26
102	宮土山Ⅰ遺跡	7世紀末円墳(径3m)。古墳～平安時代の集落。近世の塚。	33
103	下塚Ⅱ遺跡	古墳時代中期の集落。中世の溝・井戸。中世の環濠跡の可能性が考えられる。	27.28
104	下塚Ⅰ遺跡	古墳時代の集落・古墳。中世の寺院及び墓地。井戸。溝。	27.28
105	鹿東遺跡	古墳時代前期の前方後方形を含む周溝墓群。平安時代の集落・小鍛冶跡。	36
106	河久山遺跡	前方後方形周溝墓。方形周溝墓。古墳。古墳時代の集落。平安時代の集落。	27
107	宮土山Ⅱ遺跡	平安時代の集落・溝。	27
108	西表遺跡	平安時代As-B下水田は確認できない。遺物散布地。	112
109	大塚城跡	中世の城館跡。本丸と本丸の東に二の丸が並び、いづれも濠で囲まれている。	32
110	鹿嶋上原跡遺跡Ⅱ	縄文集落。古墳後期の集落。	103
111	鹿嶋上原跡遺跡	縄文時代集落。古墳の周溝と古墳時代の集落。平安時代の掘立柱建物等。	39.4
112	大塚小校庭遺跡	古墳時代後期～終末期の集落。	
113	一本木遺跡	浅間山麓の石層の一次堆積を確認。遺構の確認はなく。遺物の出土も少ない。	105
114	鹿嶋上原久保遺跡	縄文集落。配石遺構。古墳前期の方形周溝墓・集落。古墳後期～奈良平安集落・小鍛冶跡。	42
115	互反田遺跡	平安時代の水田。溝状遺構。	105
116	鹿嶋互反田遺跡Ⅱ	古墳～奈良平安時代の集落・溝。	106
117	鹿嶋互反田遺跡	古墳前期～奈良平安の集落。	41
118	前二子古墳	全長95mの前方後円墳。輪郭型横式石室。6世紀前半の築造。	38
119	中二子古墳	全長85mの前方後円墳。規模を有し、一部は二重。	37
120	梅の木遺跡	弥生末～古墳中期の集落。121と同一遺跡。	107
121	梅木遺跡	古墳時代の集落。5～6世紀初めの館跡。奈良平安時代集落・水田。	104
122	二輪堂遺跡	溝・ピットを検出。縄文土器片出土。	108
123	多田山内田向井古墳群	多田山内田陸東南斜面の後期古墳群。「上毛古墳総覧」によると20基以上。9基を調査。	43.44
124	今井平削山遺跡	旧石器。縄文集落。平安時代の火葬墓。中世の土坑墓。彫形銅製刀・精錬鍛冶遺構。	99-102
125	今井長切塚遺跡	縄文集落。奈良平安の集落・塚。	
126	向井遺跡	縄文時代の遺物。古墳～奈良平安時代の集落・掘立柱建物・土坑。	109
127	田内遺跡	縄文時代中期の集落。古墳時代前期～奈良平安時代の集落・土坑・溝。	46
128	多田山東遺跡	縄文前期集落。弥生末期～古墳時代集落。	110
129	柳田遺跡	縄文前・後期の集落。1軒は堀之内式の横式型石室。古墳後期～奈良平安の集落。	46
130	西大塚上原跡遺跡	古墳前期～平安時代の集落	111

参考文献

- 1 伊勢崎市教委77「大沼下遺跡 西橋岡遺跡」
 2 群裡文 02「流志江中層敷遺跡」
 3 群裡文 04「萩原遺跡 新井大田岡遺跡」
 4 群裡文 01「流志江中層敷遺跡(1)」
 5 群裡文 02「流志江中層敷遺跡(2)」
 6 群裡文 03「流志江西側遺跡」
 7 群裡文 05「厚原敷遺跡」
 8 群裡文 05「流志江中層敷西遺跡」
 9 群裡文 04「流志江中層敷遺跡」
 10 群裡文 02「流志江西側遺跡Ⅰ 伊勢山遺跡」
 11 群裡文 04「流志江西側遺跡Ⅱ」
 12 群裡文 01「流志江中層敷遺跡」
 13 群裡文 05「五日牛新田遺跡・五日牛南組Ⅱ遺跡・五日牛清水田Ⅱ遺跡・柳田Ⅱ遺跡」
 14 群裡文 00「県内埋蔵文化財発掘調査一覧表」『年報』19
 15 群裡文 93「五日牛清水田遺跡」
 16 群裡文 92「五日牛南組遺跡」
 17 群裡文 90「嵐下八幡遺跡」
 18 群裡文 95「飯土井上組遺跡 流志江中層敷遺跡」
 19 群裡文 92「書上木山遺跡 流志江天神山遺跡 流志江六反田遺跡」
 20 群裡文 95「流志江今宮遺跡」
 21 群裡文 91「飯土井二本松遺跡 下江田前遺跡」
 22 群裡文 91「飯土井中央遺跡」
 23 群裡文 94「飯土井中央遺跡」
 24 群裡文 94「二之宮宮下東遺跡」
 25 群裡文 95-98「寛政上ノ坊遺跡Ⅰ-Ⅳ」
 26 群馬県教委 91「舞台・西大宮丸山」
 27 群馬県教委 90「下境Ⅰ・天守」
 28 群馬県教委 96「下境Ⅰ・下境Ⅱ遺跡」
 29 群馬県教委 97「西大宮丸山遺跡」
 30 群裡文 00「寛政先子遺跡」
 31 群裡文 83「寛政上ノ坊遺跡 舞台西遺跡 中層敷遺跡 下押切遺跡 寛政二之塚遺跡」
 32 山崎 一 71「群馬県古城址址の研究」上巻
 33 群馬県教委 92「富土山」遺跡Ⅰ号古墳」
 34 前橋埋文探 94「地田築石遺跡」
 35 群裡文 79「寛政東原遺跡」
 36 群馬県教委 85「堤東遺跡」
 37 前橋市教委 95「中二子古墳」
 38 前橋市教委 93「前二子古墳」
 39 群馬県教委 77「寛政上ノ坊遺跡」
 40 群裡文 82「寛政上ノ坊遺跡」
 41 群馬県教委 78「寛政五反田遺跡」
 42 群裡文 82「寛政上川久保遺跡」
 43 尾崎古古雄 96「橋次古墳」の研究」
 44 群馬県 81「佐波郡赤堀村」群馬県史 資料編3 原始古代3」
 45 松村一昭 96「赤堀村大字南原古墳発掘調査報告」『群馬文化286』
 46 赤堀村教委 82「今井柳田遺跡発掘調査概報」
 47 赤堀村教委 81「今井南原遺跡発掘調査概報」
 48 赤堀町教委 90「今井南原遺跡発掘調査概報」
 49 赤堀村教委 81「下船向井遺跡発掘調査概報」
 50 赤堀町教委 89「下船向井遺跡第Ⅱ地点発掘調査」
 51 赤堀町教委 87「下船下寺遺跡及び磯十二所遺跡発掘調査概報」
 52 相沢忠洋 67「群馬県赤堀山遺跡」『考古学ジャーナル』6
 53 赤堀町教委 90「下船田古墳群発掘調査概報」
 54 群裡文 84「女塚」
 55 前橋市教委 83「二本松遺跡」
 56 群裡文 86「下船牛伏遺跡」
 57 伊勢崎市教委 80「宮貝戸古墳群 蟹沼東古墳群」
 58 伊勢崎市教委 82「牛伏第1号墳 祝堂古墳 大沼上遺跡」
 59 赤堀村教委 82「八幡林古墳群及び磯文住居跡調査概報」
 60 赤堀村教委 80「五日牛南組遺跡発掘調査概報」
 61 群馬県 81「御山古墳」『群馬県史 資料編3 原始古代3』
 62 赤堀村教委 83「御山古墳群及び北通・鷹巣遺跡発掘調査概報」
 63 群馬大学 75「下船磯寺岡谷発掘調査資料」
 64 赤堀村教委 80「川上遺跡 女塚遺跡発掘調査概報」
 65 赤堀村教委 86「中層敷遺跡 女塚用水橋遺跡発掘調査概報」
 66 伊勢崎市教委 78「蟹沼東古墳群 宮貝戸下遺跡」
 67 群裡文 85「寛政二之塚遺跡」
 68 群裡文 88「寛政天宮遺跡」
 69 群裡文 86「寛政北原遺跡 今井神社古墳群 寛政青柳遺跡」
 70 群裡文 85「寛政前原遺跡 赤石遺跡」
 71 赤堀村教委 80「五日牛東遺跡群及び赤堀村8号墳発掘調査概報」
 72 群裡文 89「上榎木光仙房遺跡」
 73 赤堀村教委 78「赤堀村地蔵山の古墳Ⅰ」
 74 赤堀村教委 79「赤堀村地蔵山の古墳Ⅱ」
 75 伊勢崎市教委 79・88「蟹沼東古墳群」
 76 伊勢崎市 78「右所山古墳」『伊勢崎市史』通史編Ⅰ 原始古代
 77 伊勢崎市教委 79「志下遺跡」
 78 伊勢崎市 87「上榎木庵寺発掘調査概報Ⅰ」
 79 伊勢崎市教委 85-88「上榎木庵寺 跡E9-62年度発掘調査概報 92・94・上榎木庵寺 平成2～5年度発掘調査概報」
 80 伊勢崎市教委 86「上榎木庵寺発掘調査概報Ⅱ」
 81 伊勢崎市教委 95「上榎木庵寺辺り遺跡」
 82 伊勢崎市 87「伊勢崎市史 通史編Ⅰ」
 83 群裡文 83「年報」2
 84 伊勢崎市教委 85「上西側遺跡」
 85 松地一寿 87「草壁寺裏山古墳」『伊勢崎市史』通史編Ⅰ 原始古代
 86 伊勢崎市教委 99「八幡町遺跡発掘調査報告書」
 87 伊勢崎市教委 89「八幡町遺跡B地区」
 88 伊勢崎市教委 90「八幡町遺跡D地区」
 89 伊勢崎市 87「磯文文化のはじまり」『伊勢崎市史』通史編Ⅰ 原始古代
 90 群裡文 01「中層敷遺跡」
 91 群馬県教委 85「中層敷遺跡」
 92 伊勢崎市教委 82「中層敷遺跡」
 93 伊勢崎市教委 90「お富土山古墳 範圍確認調査報告書」
 94 伊勢崎市教委 83「西大田遺跡」
 95 群馬県 81「巖子塚古墳」『群馬県史 資料編3』
 96 群馬県 81「津島山古墳」『群馬県史 資料編3』
 97 赤堀村教委 77「赤堀村地蔵山の古墳Ⅰ」
 98 伊勢崎市教委 77「高山遺跡 天ヶ巻遺跡 天野沼遺跡 下書上遺跡」
 99 群裡文 04「今井三輪堂遺跡 旧石器時代編」
 100 群裡文 04「多田山古墳群 今井三輪堂遺跡・今井見切塚遺跡」古墳時代編
 101 群裡文 05「今井三輪堂遺跡 今井見切塚遺跡」歴史時代編
 102 群裡文 05「今井三輪堂遺跡 今井見切塚遺跡」縄文時代編
 103 群裡文 82「寛政上ノ坊遺跡Ⅱ」
 104 前橋市文化財調査室 86「榎木遺跡」
 105 群馬県教委 76「二之宮遺跡群緊急発掘調査概報」
 106 群裡文 05「寛政五反田遺跡Ⅱ」
 107 前橋市教委 82「富田遺跡群 西大宮遺跡群」
 108 前橋市教委 83「西大宮遺跡群」
 109 赤堀町教委 90「平成2年度埋蔵文化財調査概報」
 110 赤堀町教委 82「多田山遺跡群緊急発掘調査概報」
 111 群裡文 06「西大宮上ノ坊遺跡」
 112 群馬県教委 03「中層敷Ⅰ遺跡・明神山遺跡・伊勢山遺跡・中島遺跡・西裏遺跡」

第3章 検出された遺構と遺物

概要

本遺跡から検出された遺構は以下の通りである。水田3面（As-B下面、古墳時代後期、古墳時代前期）、溝45条、土坑100基、縄文時代集石遺構、耕作溝群、ピット53基。

本章では、これらを判明した時期毎に分別し、記載することとした。名称は、発掘調査時のものを踏襲することとしたが、水田面の名称と水田区画の番号については、混乱を避けるため整理作業の段階で改称している。

1 中世・近世の遺構と遺物

表土を削除した調査最上面で確認され、1108年（天仁元年）降下の浅間山火山灰As-Bを混入する埋土が堆積する遺構を対象とした。調査面は同じでも、As-B一次堆積物に直接被われた水田面や溝は古代の遺構として扱い、これとは峻別した。

(1) 溝

4区で2条、5区で4条が検出された。

4区5号溝（第4図）

4区の北端で東西方向に走り、検出された長さは9m弱を測る。西端で34号土坑に切られ、断面は逆台形状で、幅0.62m、深さ21cmを測る。底面の状況はほぼ一定レベルであるが、部分的な凹凸も見られる。埋土の特徴はAs-B主体の砂質土で、流水の形跡は不明である。遺物出土は古墳時代土師器片1点である。南側に隣接して平行する長方形土坑も同質の人為的埋土が堆積することから、同時存在した可能性が考えられる。また、東側に約4m離れた延長線上に6号溝が検出された。

4区6号溝（第4図 PL.2）

東西方向に走り、検出された長さは5.5m弱を測る。断面は逆台形状で、幅0.9m、深さ16cmを測る。底面の状況は小規模な凹凸はあるが標高はほぼ均一

で4区5号溝とはほぼ同一。埋土の特徴はブロック状のAs-B混土で、人為的に埋められた可能性が高い。流水の形跡はない。4区5号溝の延長線上にあり、規模・形状・埋土の共通性から、本来同一の溝ないしは一連の土坑列であったと考えられよう。

5-1区1号溝（第4図 PL.2）

5区西端で南北方向に走って検出された。長さは約13m。断面は逆台形状ないしは葉研堀状で、幅0.82m、深さ21cmを測る。底面の状況は小規模な穴があくが、全体的に北から南に傾斜する。埋土の特徴はAs-BからAs-Aまでを含む砂質土で、流水の形跡がある。北関東道本線部分で検出された13号溝の連続部分と考えられる。遺物出土は鉄滓1点（25g）、古墳～平安時代の土師器片25点、近世軟質陶器片6点などである。出土遺物から近世～近代に機能していたと考えられる。

5-3区2号溝（第5図 PL.2）

南北方向に走り、検出された長さは7.5mを測る。断面は逆台形状で、2条重複の可能性もある。幅0.75m、深さ19cmを測る。底面の状況は北から南へ10cmの比高で傾斜する。埋土はAs-B混土が堆積する。西側微高地と東側低地を囲する水路と考えられる。出土遺物はない。

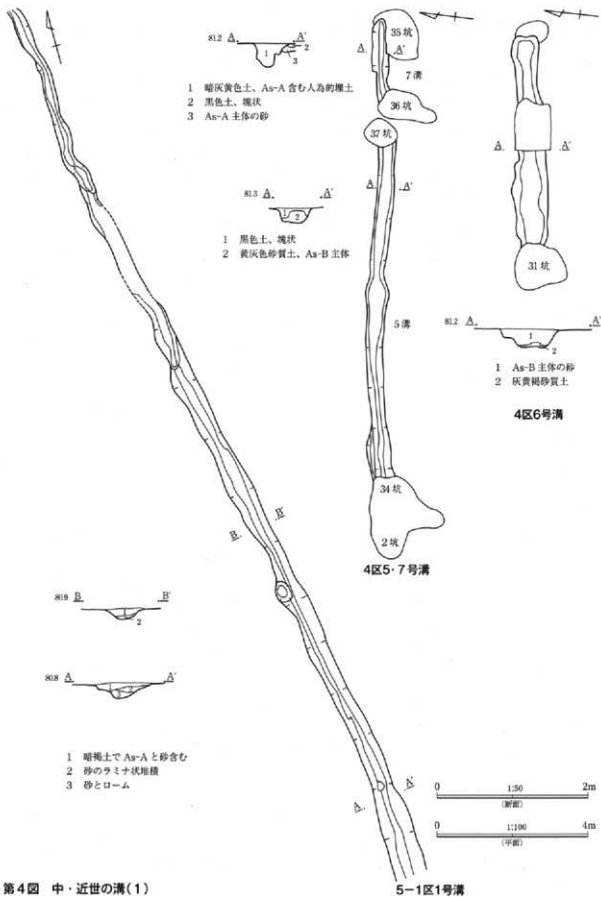
5-3区3号溝（第5図 PL.2）

南北方向に走り、検出された長さは6.7mを測る。北端部ではテラス状の中段部が見られることから、掘り直された可能性が高い。断面は逆台形状で、幅2.25m、深さ63cmを測る。底面は南から北へ比高40cmで傾斜する。出土遺物は古墳～古代の土師器・須恵器片10点、近世瓦2点、近世軟質陶器5点である。

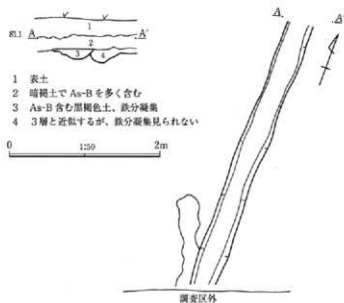
5-3区4号溝（第5図）

東西方向に走り、検出された長さは12mを測る。東半部では掘り直したと思われる底面部分のみ検出された。西端部は20cm以上深く掘った土坑状部分が残る。断面は逆台形状で、幅1.2m、深さ26cmを測る。出土遺物は近世の軟質陶器と砥石1点ずつである。

第3章 検出された遺構と遺物



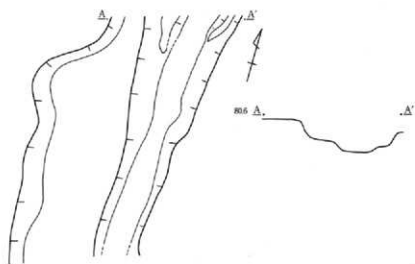
第4図 中・近世の溝(1)



5-3区2号溝



5-3区4号溝



5-3区3号溝



第5図 中・近世の溝(2)

(2) 土坑

本節で扱う中・近世に属する土坑は、1区・4区東半・5区西半に分布しており、2区・3区と5区東半では確認されなかった。土坑が検出された地点の地形は低地部分に相当し、後述するように古代以前には水田として利用されていた。土坑の確認されなかった調査区中央地点は南北に延びる細長い微高地であり、近代以降の土地改良事業によって表土を削平されたため、比較的表表面から浅い位置にある中・近世の土坑が滅失したものと考えられる。

検出された土坑の多くは長方形・正方形・楕円形と主軸の判明する平面形であり、これによって土坑群の配置関係がある程度判明する。

1区では中央付近を東西方向に主軸をそろえて、約15m幅のなかで直列する配置傾向が窺える。1区西端と東端では10基前後が南北方向に散在するようである。この土坑分布によって囲まれた空間部分は一辺60~70mの方形区画ととらえることも可能である。1区と4区に挟まれた北関東道本線部分では、L字形に屈曲する13号溝が検出されており、これによって囲まれた方形空間の外側に、走向を同じくして土坑群が分布する配置関係にある。おそらくこの土坑の見られない方形空間は水田ないしは畝区画として維持されたと考えられる。調査区南側の4区ではやはり本線部分の13号溝の延長と思われる5区1号溝に直交する方向で長方形ないし溝状土坑が直列配置している。1号溝は北方向からやや西に傾く走向であり、土坑群の主軸方向も多くはこれに従って南北あるいは東西方向から若干傾く。本線部分13号溝及び5区1号溝の走向は、微高地西縁の地形及び低地の傾斜面に沿っているものと考えられる。溝によって大きく区画された周縁部分にこれら土坑群が配置すると考えられよう。以下、分類した平面形毎に記述することとし、各土坑の個別データについては表で扱う。

長方形土坑 (第6~12図 PL. 3~7)

1区の1・19・26・34、4区11号土坑が代表例である。長辺、短辺ともに整った直線状で、底面は

平坦。断面形は箱形である。規模は、幅1~1.5m、長さ2~3mのものが多い。1区25号土坑と4区11号土坑は大型で、幅2m、長さ3.5mに及ぶ。深さは50cmを越え、70cm前後のものが多い。壁は直立かやや外傾する。埋土は人為的堆積の可能性の高いAs-B混土である。人骨等の特殊な遺物が出土しないこと、規模が大きいことから、多くは農地に伴う貯蔵穴の可能性が高い。

楕円形土坑 (第6~12図 PL. 3~7)

1区2・27号土坑、4区44号土坑などを代表例とする。4区3号土坑(第9図)のように長方形と区分しがたいものもみられるが、各辺が湾曲する形状は楕円形に含めた。幅1m前後、長さ1.5~2mのものが多い。深さは50cm以下の浅いものがほとんどで、1区27号土坑のみ1m以上と深く性格の違いが推測される。また、5区で検出された1~4・9・18~20号土坑の8基はいずれも楕円形で相対的に小規模であることから、微高地上に分布することもあわせて、墓の可能性もある。

正方形土坑 (第7・8図 PL. 3・4・6)

1区10号土坑を代表例とし、5例を数える。長方形土坑の小規模な例とも考えられるが、1区10号土坑以外は底面が平坦でない。1区9号土坑では灰が堆積する。廃棄穴とも考えられようか。

円形土坑 (第13図 PL. 7)

10基が該当する。1区20号土坑や4区10号・27号土坑は上端直径が1mを越え、底面が平坦で深さも40cmを越える。これ以外は直径60cm前後か、深さ20cm以下の浅いものである。井戸の可能性のあるものはない。

不定形土坑 (第14・15図 PL. 7・8)

1区15号土坑のような大型土坑から4区17号土坑のような長軸50cm前後の小規模なものまで規模も一定しない。底面に凹凸があるものは規模の大小にかかわらず人為的でない穴も含まれるだろう。

溝状土坑 (第16~19図 PL. 9・10)

長方形土坑と同形状だが、短辺に比べ長辺が著しく長い。4区2号土坑は長さ8mに達する。4区

1 中世・近世の遺構と遺物

14・30号土坑は幅1.5m前後、他は幅1m以下である。4区12号と13号土坑は主軸を重ねて重複する。掘り直しと考えられよう。底面は平坦で、深さも50

cmを超えるものが多いことから、農地に伴う貯蔵穴と考えられる。4区1号土坑は両端が浅く立ち上がることから、本来溝であったと考えられる。

表2 中・近世の土坑一覧表(1)

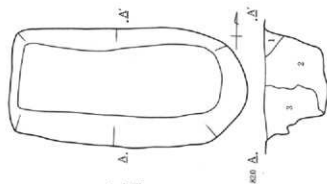
●単位: 幅・深さはcm、長さはm

区	遺構No	グリッド	X軸	Y軸	平面形	幅	長さ	深さ	走向・主軸方向	備考
1	1号土坑	125	-595		長方形	126	2.9	67	N-89°-W	
1	2号土坑	130	-590・595		楕円形	121	1.75	51	N-77°-W	
1	3号土坑	135	-590・595		—	—	0.59	28	—	30・31坑と重複
1	4号土坑	140	-595		円形	70	0.82	26	N-78°-E	
1	5号土坑	150	-595		楕円形	128	1.82	62	N-35°-W	
1	6号土坑	160	-595		不定形	92	1.52	6	N-48°-E	
1	7号土坑	155	-515・520		—	—	1.18	46	—	23坑と重複
1	8号土坑	125	-580		長方形	113	2.17	55	E-W	
1	9号土坑	135	-585		正方形	83	0.84	28	N-58°-E	
1	10号土坑	135	-585		正方形	144	1.68	58	N-83°-E	
1	11号土坑	125	-580		長方形	148	1.95	62	N-76°-E	
1	12号土坑	125	-570		長方形	128	2.94	75	N-89°-E	
1	13号土坑	135	-575		溝状	103	5.4	74	N-5°-E	36坑と重複
1	14号土坑	135	-570		正方形	111	1.27	27	E-W	
1	15号土坑	135	-570		不定形	112	1.96	22	N-82°-E	
1	16号土坑	140	-565		溝状	86	2.8	62	N-88°-E	
1	17号土坑	140	-570		溝状	83	3.25	40	N-88°-E	
1	18号土坑	140	-555		長方形	145	2.31	46	N-2°-E	32坑と重複
1	19号土坑	140・145	-550・555		長方形	120	3.18	38	E-W	
1	20号土坑	145	-545・550		円形	160	1.67	43	N-83°-E	
1	21号土坑	135・140	-555		溝状	66	2.21	20	N-87°-E	
1	22号土坑	145・150	-550		正方形	166	1.68	70	N-84°-E	
1	23号土坑	155	-515・520		楕円形	114	1.82	44	N-88°-E	7坑と重複
1	24号土坑	155	-505		楕円形	93	1.37	42	N-75°-E	28坑と重複
1	25号土坑	165	-510		長方形	196	3.28	82	N-89°-W	
1	26号土坑	175	-505・510		長方形	156	2.87	68	N-87°-W	
1	27号土坑	170	-525		楕円形	109	1.95	90	N-88°-E	
1	28号土坑	155	-505		—	63	0.68	15	—	24坑と重複
1	29号土坑	160	-505		円形	52	0.92	14	N-84°-E	
1	30号土坑	135	-590・595		—	112	1.44	26	N-89°-W	3・31坑と重複
1	31号土坑	135	-590・595		長方形	96	1.1	39	N-89°-W	3・30坑と重複

表3 中・近世の土坑一覧表(2)

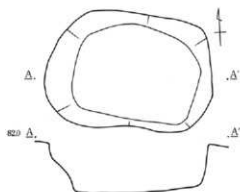
●単位: 幅・深さはcm、長さはm

区	遺構No	グリッド X軸 Y軸	平面形	幅	長さ	深さ	走向・主軸方向	備 考
1	32号土坑	140 - 555	—	—	1.04	33	—	18坑と重複
1	34号土坑	140・145 - 530	長方形	107	2.06	56	N - 88° - E	
1	35号土坑	140 - 540	長方形	123	1.94	78	N - S	
1	36号土坑	130・135 - 575	—	—	0.52	23	—	13坑と重複
1	37号土坑	140 - 535	円形	84	1.09	16	N - 89° - W	
1	38号土坑	140 - 535	円形	60	0.88	9	N - 30° - E	
4	1号土坑	000 - 500・505	溝状	84	7.96	30	N - 85° - E	
4	2号土坑	000・005 - 505 - 515	溝状	124	7.96	54	N - 89° - W	
4	3号土坑	010 - 505	(長方形)	102	1.47	56	N - 11° - W	
4	4号土坑	025 - 555	楕円形	55	0.73	8	N - 16° - W	
4	8号土坑	995・000 - 535	楕円形	85	2.1	15	N - S	
4	10号土坑	030 - 525	円形	128	1.28	70	N - 85° - E	
4	11号土坑	030・035 - 510・515	長方形	185	3.58	50	N - 85° - E	
4	12号土坑	035 - 520・525	溝状	180	7.72	52	N - 89° - E	13坑と重複
4	13号土坑	035 - 515・520	溝状	164	(5.1)	47	N - 81° - E	12坑と重複
4	14号土坑	040・045 - 510・515	溝状	153	4.84	54	E - W	
4	15号土坑	045 - 510	楕円形	100	1.73	46	N - 85° - E	
4	16号土坑	040 - 515	不定形	50	1.04	20	N - 20° - W	
4	17号土坑	035 - 515	不定形	39	0.58	12	N - 28° - W	
4	18号土坑	050 - 510	円形	59	0.61	24	N - 8° - W	
4	19号土坑	035 - 505	不定形	22	0.48	10	N - 35° - E	
4	21号土坑	030 - 505	不定形	38	0.53	13	N - 35° - E	
4	22号土坑	040 - 505	不定形	40	0.92	11	N - 1° - W	
4	23号土坑	050 - 525	—	74	0.87	50	N - 67° - E	30坑と重複
4	24号土坑	025 - 510	不定形	103	1.16	28	N - 12° - W	
4	25号土坑	040 - 525	不定形	28	0.45	11	N - 25° - W	
4	26号土坑	030 - 530	不定形	65	0.74	15	N - 71° - E	
4	27号土坑	035 - 525	円形	95	1.1	48	N - 85° - W	
4	28号土坑	025 - 505・510	不定形	169	2.13	52	N - 76° - E	
4	29号土坑	050 - 525	不定形	56	1	7	N - 5° - W	
4	30号土坑	050 - 525	溝状	132	5.08	47	N - 83° - W	23坑と重複
4	31号土坑	050 - 520	不定形	120	1.37	42	N - 12° - W	
4	32号土坑	050 - 535	不定形	75	1	29	N - 53° - E	
4	33号土坑	045・050 - 530・535	不定形	56	1.72	36	N - 5° - E	34坑と重複
4	34号土坑	050 - 530	不定形	85	(1.1)	28	N - 45° - E	33坑と重複
4	35号土坑	050 - 520	不定形	92	1.4	8	N - 62° - E	

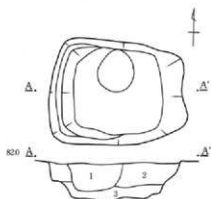


- 1 不明
- 2 不明
- 3 不明

1区1号土坑

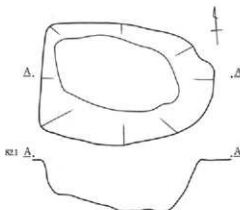


1区2号土坑

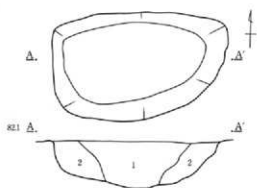


- 1 3号土坑埋土
- 2 30号土坑埋土
- 3 31号土坑埋土

1区3・30・31号土坑

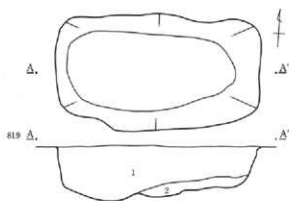


1区5号土坑



- 1 7号土坑埋土
- 2 23号土坑埋土，砂質土含む

1区7・23号土坑



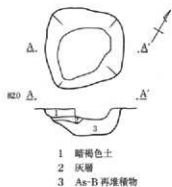
- 1 黒褐色土
- 2 砂質土

1区8号土坑

0 1:40 1m

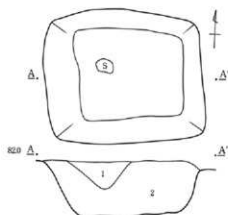
第6図 中・近世長方形～楕円形土坑

第3章 検出された遺構と遺物



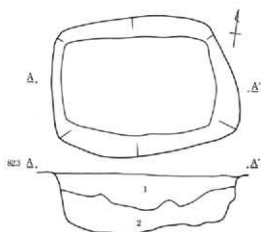
1区9号土坑

- 1 黒褐色土
- 2 灰層
- 3 As-B再堆積物



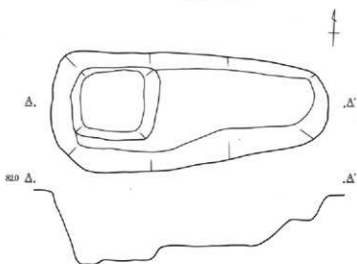
- 1 黒褐色土
- 2 灰黑色粘質土

1区10号土坑

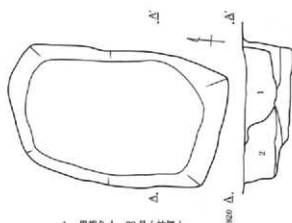


- 1 黒褐色土
- 2 灰黑色粘質土

1区11号土坑

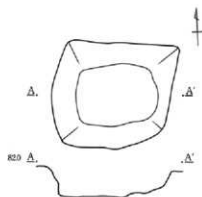


1区12号土坑



- 1 黒褐色土、32号土坑埋土
- 2 灰黑色粘質土、18号土坑埋土

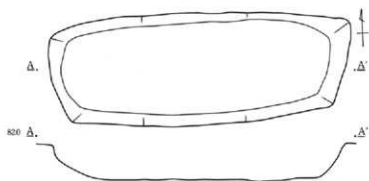
1区18・32号土坑



1区14号土坑



第7図 中・近世長方形～正方形土坑

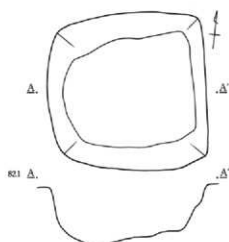


1区19号土坑



1区24・28号土坑

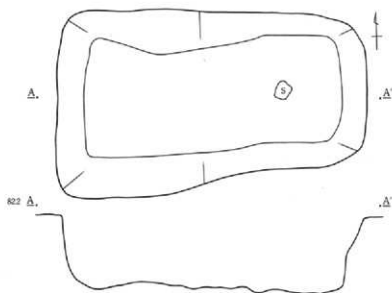
- 1 28号土坑埋土
- 2 黒褐色土、24号土坑埋土
- 3 灰黄褐色土



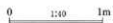
1区22号土坑



1区26号土坑



1区25号土坑

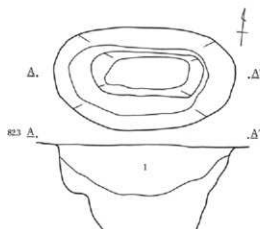


第8図 中・近世長方形土坑

第3章 検出された遺構と遺物

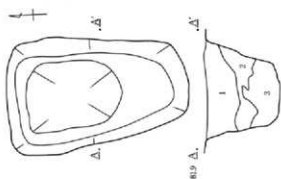


1区34号土坑



1 暗褐色土

1区27号土坑

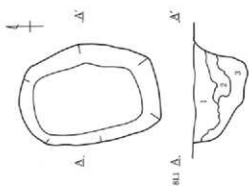


- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土にシルト粒含む
- 3 地山流れ込み

1区35号土坑

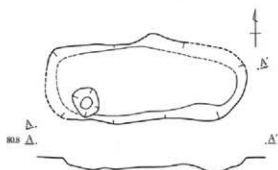


4区4号土坑



- 1 暗灰褐色土 As-B 多く混入、塊状堆積
- 2 As-B 見られず、黄褐色土塊なし
- 3 黒色土粒混入

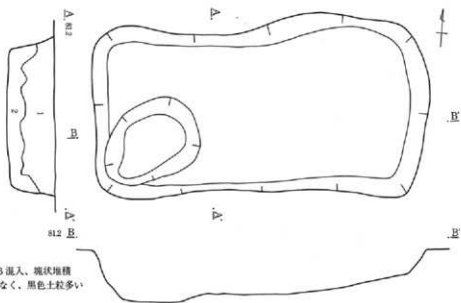
4区3号土坑



4区8号土坑

0 1:100 1m

第9図 中・近世長方形～楕円形土坑



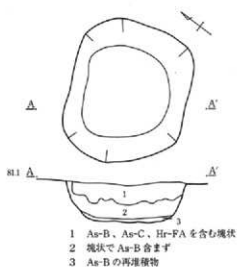
4区11号土坑



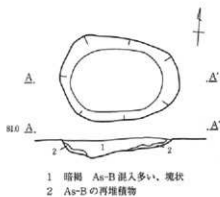
4区15号土坑



4区38号土坑



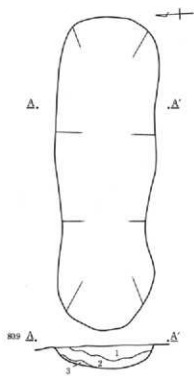
4区39号土坑



4区44号土坑

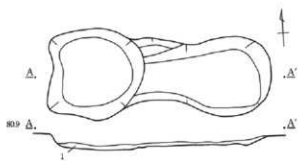
0 1:40 1m

第10図 中・近世長方形～楕円形土坑



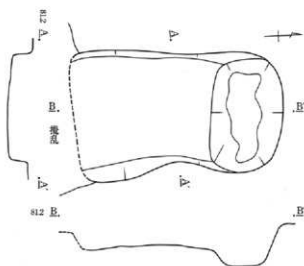
- 1 塊状埋積
- 2 黒色土にAs-B塊含む
- 3 As-B再堆積物

5-1区1号土坑

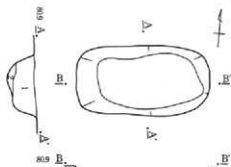


- 1 As-B再堆積物

5-1区2号土坑

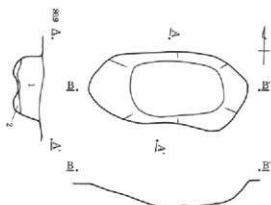


5-1区3号土坑



- 1 黒～灰褐色 塊状でAs-B塊含む
- 2 As-B再堆積物

5-1区4号土坑

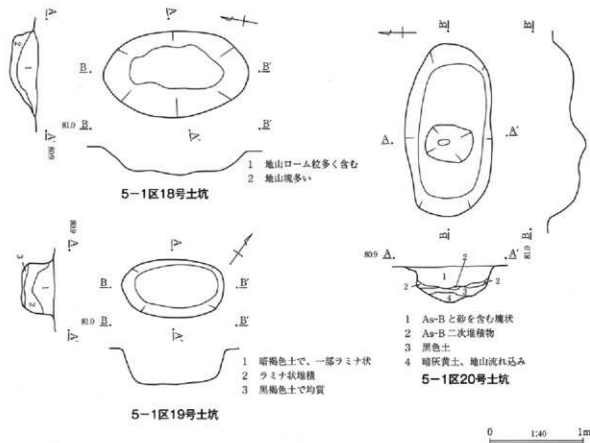


- 1 As-B 含む塊状
- 2 As-B と砂

5-1区9号土坑



第11図 中・近世長方形～楕円形土坑

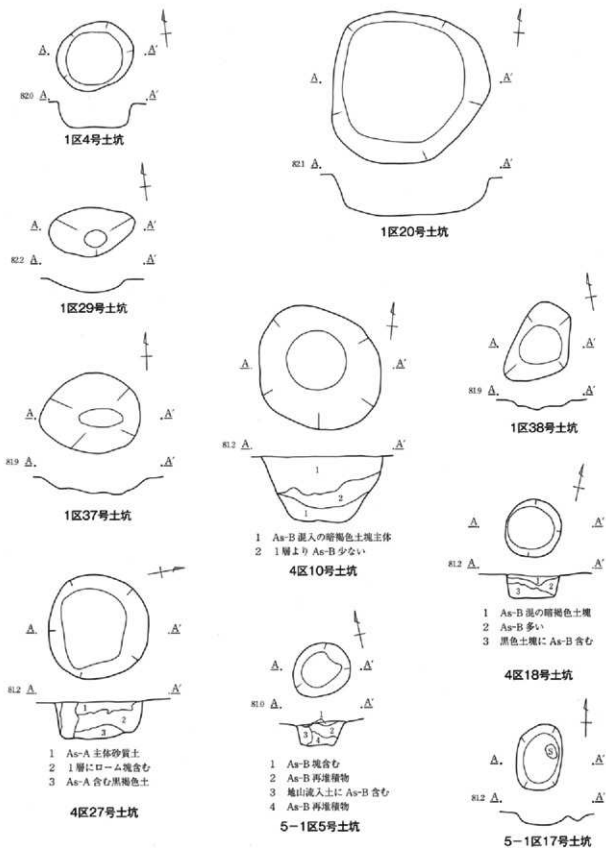


第12図 中・近世楕円形土坑

表4 中・近世の土坑一覽表(3)

*単位: 幅・深きはcm、長きはm

区	遺構No.	グリッド	X軸	Y軸	平面形	幅	長さ	深さ	走向・主軸方向	備考
4	36号土坑	050	-	520	不定形	77	1.54	30	N-8°-E	
4	37号土坑	050	-	520・525	不定形	73	0.83	42	N-1°-W	
4	38号土坑	045・050	-	540	(長方形)	140	1.86	32	E-W	
4	39号土坑	050	-	530	正方形	126	1.5	40	N-63°-E	
4	40号土坑	050・055	-	510	溝状	63	1.78	28	N-71°-E	
4	44号土坑	055	-	510	楕円形	91	1.26	18	N-85°-E	
5-1	1号土坑	055	-	460・465	楕円形	106	3.3	23	N-85°-W	
5-1	2号土坑	030・035	-	465	楕円形	96	2.28	6	N-87°-W	
5-1	3号土坑	070	-	470	(長方形)	135	(2.25)	20	N-1°-E	
5-1	4号土坑	030・035	-	470	楕円形	74	1.42	29	N-86°-E	
5-1	5号土坑	025	-	470	円形	54	0.63	26	N-59°-E	
5-1	9号土坑	040	-	470	楕円形	77	1.67	30	E-W	
5-1	17号土坑	075	-	420	円形	47	0.69	13	N-6°-E	
5-1	18号土坑	045	-	465	楕円形	91	1.52	26	N-10°-W	
5-1	19号土坑	040	-	475	楕円形	61	1.05	36	N-56°-E	
5-1	20号土坑	060	-	490	楕円形	91	1.8	38	N-1°-W	



第13図 中・近世円形土坑



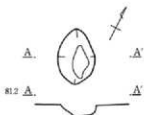
1区6号土坑



1区15号土坑



1 As-B 再堆積物
2 As-B と黒色土の混土
4区16号土坑

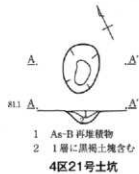


4区17号土坑



4区19号土坑

- 1 As-B 再堆積物
2 黒褐色土に As-B 塊含む

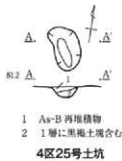


4区21号土坑

- 1 As-B 再堆積物
2 1層に黒褐色土塊含む



4区22号土坑



4区25号土坑

- 1 As-B 再堆積物
2 1層に黒褐色土塊含む

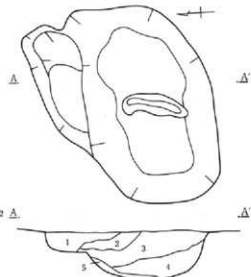


4区24号土坑

- 1 As-B 再堆積物に黒色土含む
2 As-B 再堆積物
3 ブロック状で、As-B 含む



4区26号土坑



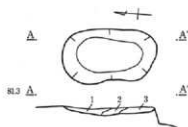
4区28号土坑

- 1 ローム粒含む As-B 再堆積物
2 1層に黒色土塊含む
3 黒色土塊と As-B 混泥土
4 3層に一部フミナ状堆積物
5 As-B 再堆積物

0 1:40 1m

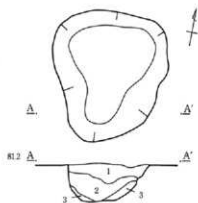
第14図 中・近世不定形土坑

第3章 検出された遺構と遺物



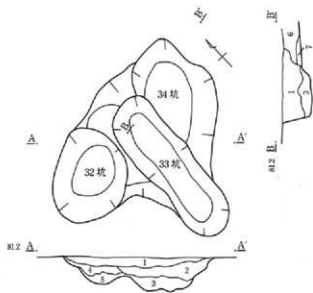
- 1 As-B 再堆積物
- 2 黒褐色土に As-B 含む
- 3 2層土の塊状堆積

4区29号土坑



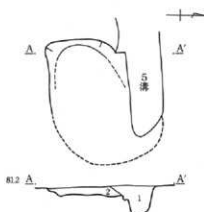
- 1 As-B に灰黄褐色土粒含む
- 2 黒色土にローム粒含む
- 3 褐色土主体、ブロック状

4区31号土坑



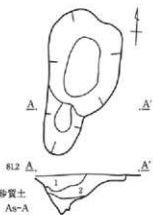
- 1 灰黄褐色土に As-B 多く含む
- 2 ローム塊含む
- 3 As-B 再堆積物
- 4 2層に近似
- 5 砂質、As-B とローム粒含む
- 6 黒褐色土に As-B 多く含む
- 7 As-B 少なく粘性帯びる

4区32・33・34号土坑



- 1 暗灰黄土主体で As-A 含む
- 2 As-A 主体の砂質土

4区35号土坑



- 1 As-B 主体の砂質土
- 2 黒褐 As-B As-A

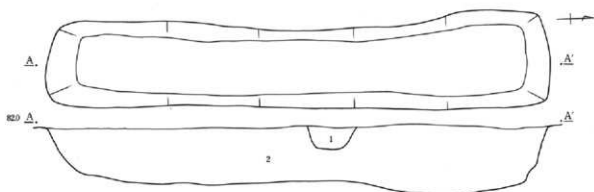
4区36号土坑



4区37号土坑

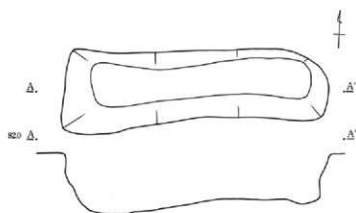
0 1:40 1m

第15図 中・近世不定形土坑

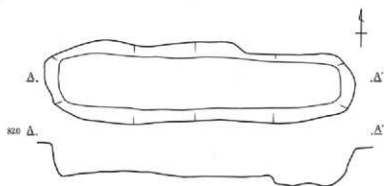


1区13-36号土坑

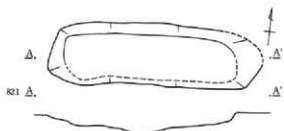
1 黒褐色土、36号土坑埋土
2 黒色土、礎状



1区16号土坑



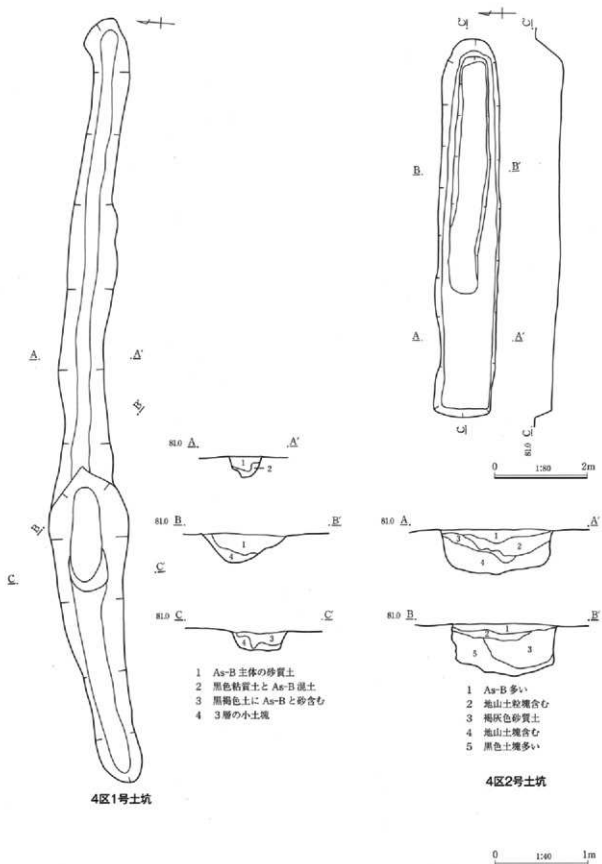
1区17号土坑



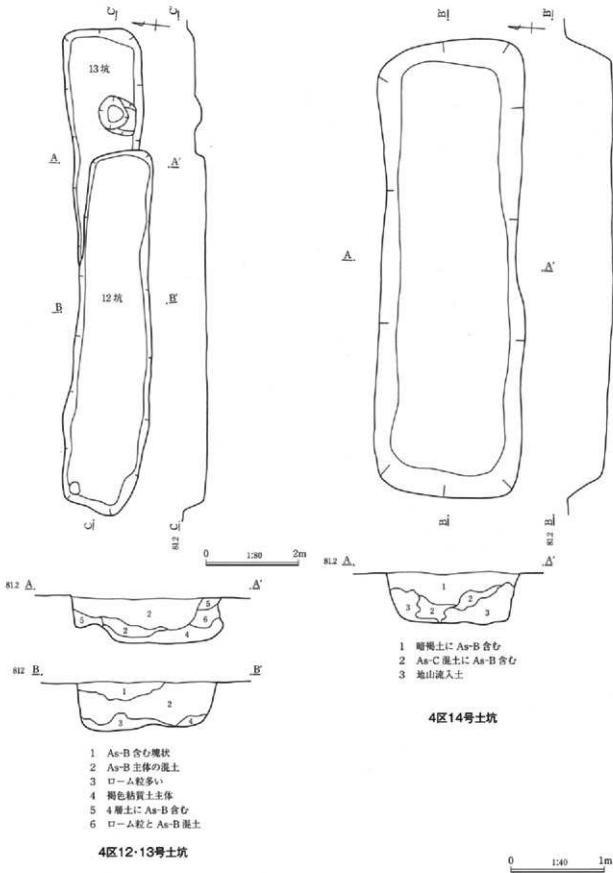
1区21号土坑

0 1:40 1m

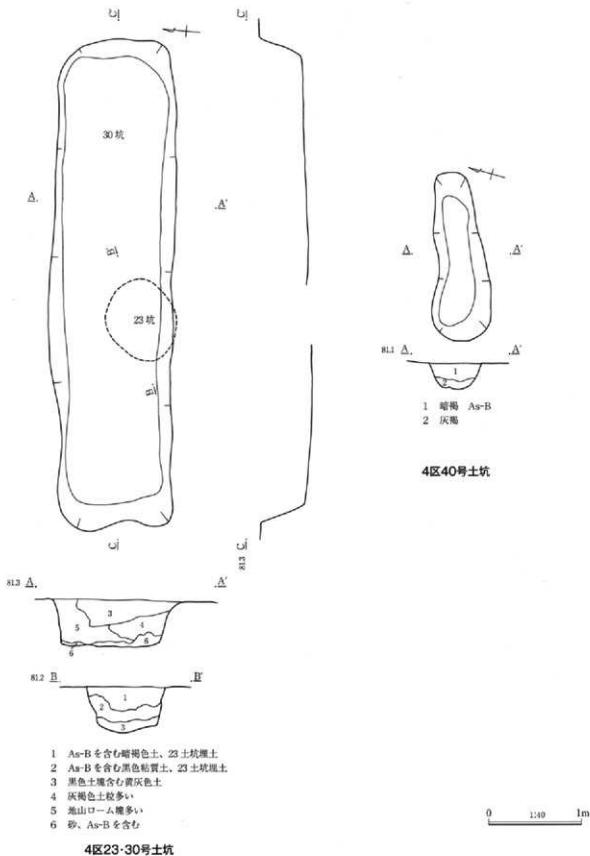
第16図 中・近世溝状土坑



第17図 中・近世溝状土坑



第18図 中・近世溝状土坑

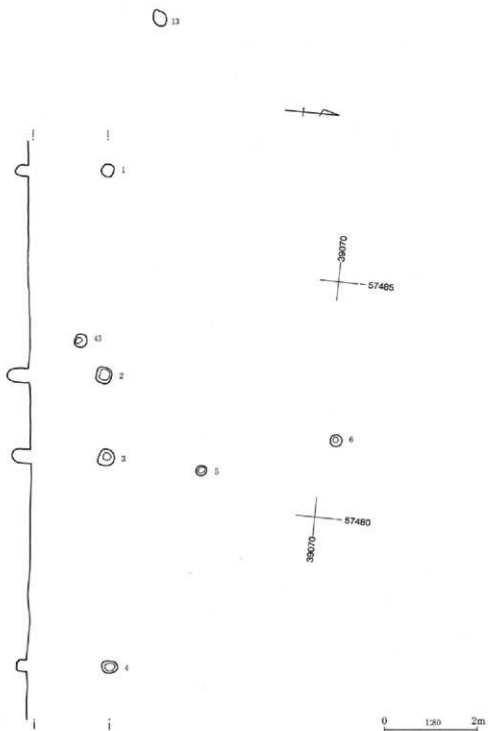


第19図 中・近世溝状土坑

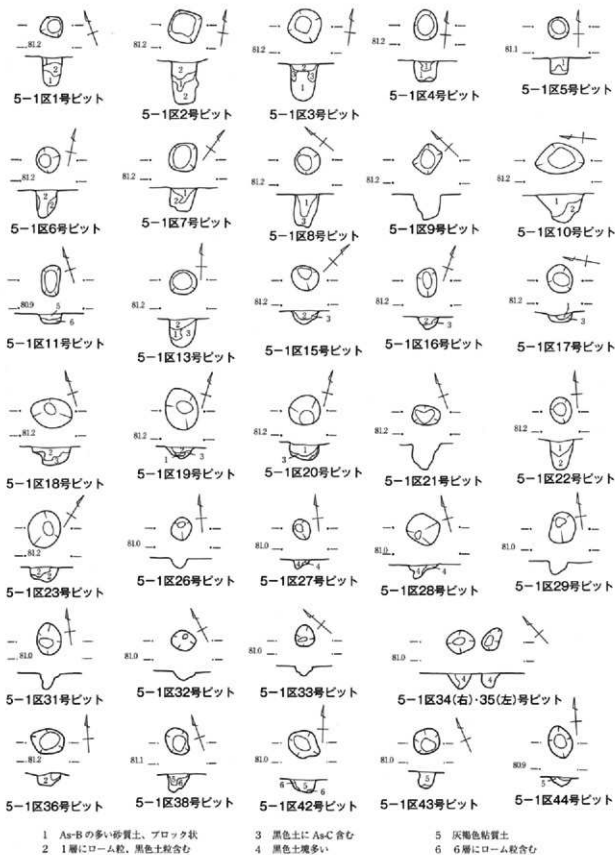
(3) ビット

ビットの呼称で遺構として取り扱ったのは、形状が人為的で、規模も径50cm以下のものである。微高地部分にあたる5-1区でP1~P4の4基からなる東西走向の長さ10.4mのビット列が検出された。As-B

降下以後に属するが、遺物がなく時期限定はできない。他に位置的関連性をみせない単独ビット35基が5-1区で検出された。規模は径18~50cm、深さ10~40cmの範囲に収まる。平面は隅丸方形か不整形円で、埋土はAs-B混土。出土遺物はない。



第20図 中・近世ビット列 (5-1区)

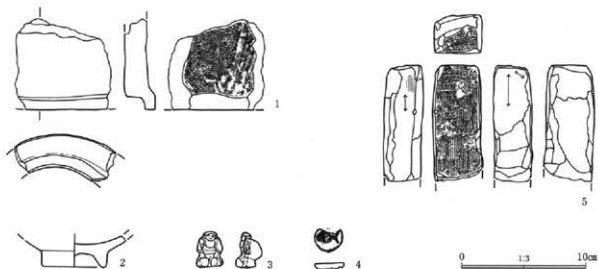


第21図 中・近世のピット (5-1区)

0 1:40 1m

表5 中・近世のビット一覧表

区	遺構No	グリッド	X軸 Y軸	平面形	径 (cm)	深さ (cm)	走向・主軸方向	備 考
5-1	1号ビット	060	- 485	円形	22	28	N-60°-W	
5-1	2号ビット	065	- 480	正方形	32	43	N-13°-E	
5-1	3号ビット	065	- 480	円形	34	38	N-16°-E	
5-1	4号ビット	065	- 475	楕円形	31	22	N-9°-W	
5-1	5号ビット	065	- 480	円形	22	18	N-3°-E	
5-1	6号ビット	070	- 480	円形	25	29	N-25°-W	
5-1	7号ビット	065	- 470	楕円形	29	24	N-34°-W	
5-1	8号ビット	065	- 470	円形	27	35	N-63°-E	
5-1	9号ビット	065	- 465	長方形	29	26	N-88°-E	
5-1	10号ビット	065	- 470	楕円形	48	30	N-24°-W	
5-1	11号ビット	030	- 470	長方形	32	10	N-19°-E	
5-1	13号ビット	065	- 490	円形	26	30	N-55°-W	
5-1	15号ビット	070	- 460	楕円形	29	14	N-48°-E	
5-1	16号ビット	070	- 460	楕円形	28	13	N-21°-W	
5-1	17号ビット	070	- 460	楕円形	30	9	N-79°-E	
5-1	18号ビット	075	- 460	楕円形	44	20	N-62°-W	
5-1	19号ビット	075	- 460	楕円形	42	12	N-17°-W	
5-1	20号ビット	075	- 460	円形	32	16	N-67°-E	
5-1	21号ビット	075	- 460	楕円形	30	28	N-68°-W	
5-1	22号ビット	070	- 465	楕円形	26	30	N-19°-W	
5-1	23号ビット	060	- 455	円形	38	15	N-17°-W	
5-1	26号ビット	030	- 415	円形	23	10	N-3°-W	
5-1	27号ビット	030	- 415	楕円形	22	9	N-17°-W	
5-1	28号ビット	030	- 415	円形	32	14	N-44°-W	
5-1	29号ビット	030	- 420	長方形	30	13	N-8°-E	
5-1	31号ビット	030	- 420	楕円形	33	16	N-5°-E	
5-1	32号ビット	035	- 420	楕円形	28	9	N-62°-W	
5-1	33号ビット	035	- 420	楕円形	24	10	N-34°-E	
5-1	34号ビット	035	- 420	楕円形	26	15	N-77°-E	
5-1	35号ビット	035	- 420	不定形	30	16	N-48°-W	
5-1	36号ビット	060	- 470	楕円形	36	14	N-77°-W	
5-1	38号ビット	070	- 465	楕円形	38	19	N-18°-W	
5-1	42号ビット	060	- 480	不定形	35	6	N-56°-W	
5-1	43号ビット	060	- 480	円形	28	18	N-40°-W	
5-1	44号ビット	060	- 485	楕円形	35	8	N-17°-W	



第22図 中・近世の出土遺物

(4) 中・近世の出土遺物

中・近世に属する遺物を第22図に示した。九瓦(1)、陶器碗(2)、大黒土人形(3)、泥面子(4)が1区と4区から出土している。1区は微高地の西側低地にあたり、12世紀初頭の段階で水田化されていたが、As-Bを多く含む雑拌された耕作土が厚く堆積すること、近代まで続く南北に走る水路が確認されていること、東西南北方向に主軸をそえた長方形土坑群が分布することから、中世以降は水田および畠として利用されたと考えられる。他に建物跡、井戸構等の遺構が全く見られないことから、図示した遺物は、特定の遺構に伴わない遺棄品と考えられよう。 砥石(5)は5-3区で出土したもので

である。5-3区は、微高地東側の低地際にあたり、中世以降3条の水路(2-4号溝)が認められる。この砥石は溝に伴わなかったが、柵目による整形が残っていることから近世の所産であり、また石材から群馬県南牧村砥石産と判明している。これもまた、農作業等に使用されたものが遺棄されたものであろう。

図示した以外の中・近世出土遺物は、瓦29点(1286g)、陶磁器類642点(7545g)である。中世と考えられるのは、青磁・常滑系焼締め陶器・播り鉢・内耳土器である。近世では、肥前系磁器・瀬戸美濃系陶磁器・在地系軟質陶器類が主体である。大型品が見られず、近世溝等に伴う廃棄品の可能性が高い。

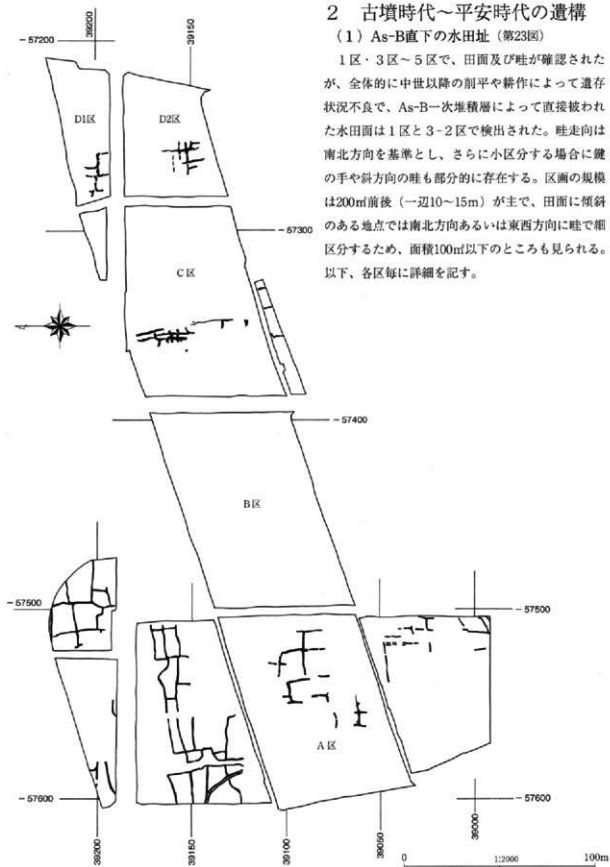
表6 中・近世遺物観察表

検出番号 図版番号	種類	出土位置	部位 残存	計測値 (cm)	①胎土 ②色調	成・整形技法の特徴	備考
第22図-1 Pl.31	九瓦	1区	玉縁破片	口・底 高 -	①白岩片・黒色炭の 粗砂多い空焼灰色	外面にナゲと削り、内面にナゲ痕を残す。	
第22図-2 Pl.31	陶器 碗	1区	底部	口・高 5.2	①灰白色でやや粗か い灰白～淡橙	薄い透明釉に細かい貫入。張付は無釉。	京焼か
第22図-3 Pl.31	土製品 (大黒)	1区	完形	高 2.7	①きめ細かく、雑 物なし②橙	型つくり。	掘り物大黒天人 形、串穴あり
第22図-4	土製品 泥団子	4区	1/3欠	径 2.2 厚 0.4	①緻密、砂含まず ②赤橙	型つくり、魚形。	素焼
第22図-5 Pl.31	砥石 (砥沢石)	5-3区	下端部欠	長10.1×幅 3.9×厚3.0	①砥沢石(凝灰岩)	幅の狭い両側面を使用。表裏面には整形痕 (はつりと柵目)を残す。	粗く、気孔や白 色炭物が目立つ

2 古墳時代～平安時代の遺構

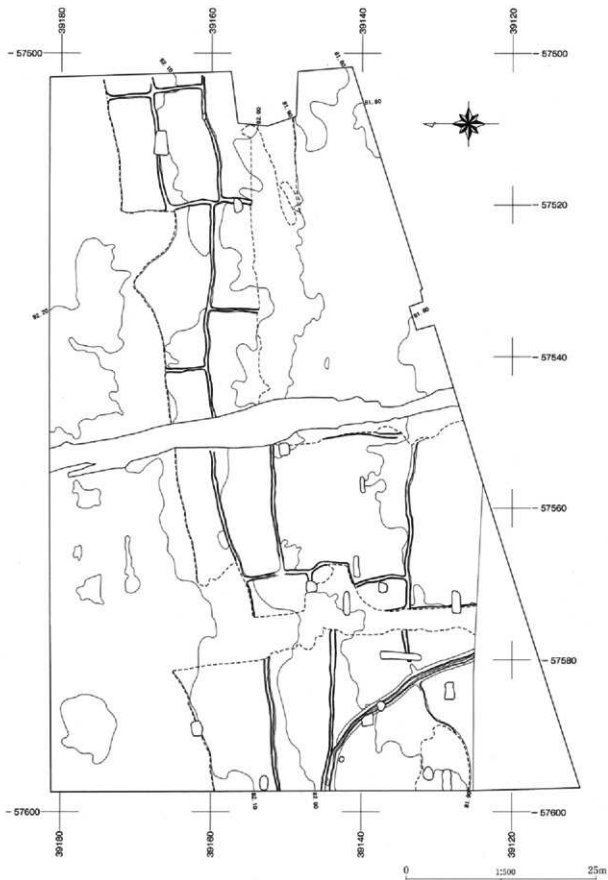
(1) As-B直下の水田址(第23図)

1区・3区～5区で、田面及び畦が確認されたが、全体的に中世以降の削平や耕作によって遺存状況不良で、As-B一次堆積層によって直接被われた水田面は1区と3-2区で検出された。畦走向は南北方向を基準とし、さらに小区分する場合に畦の手や斜方向の畦も部分的に存在する。区画の規模は200m前後(一辺10～15m)が主で、田面に傾斜のある地点では南北方向あるいは東西方向に畦で細区分するため、面積100㎡以下のところも見られる。以下、各区毎に詳細を記す。

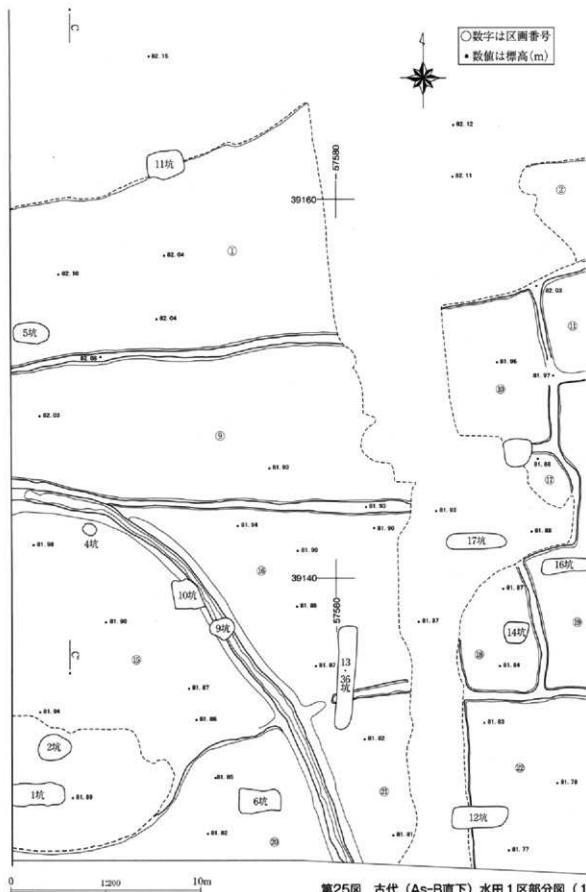


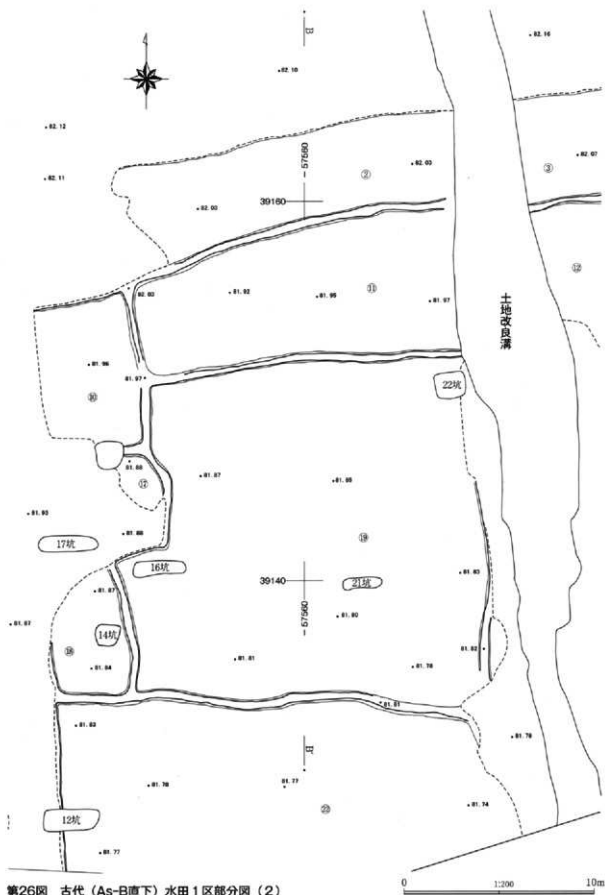
第23図 古代(As-B直下)水田全体図

第3章 検出された遺構と遺物

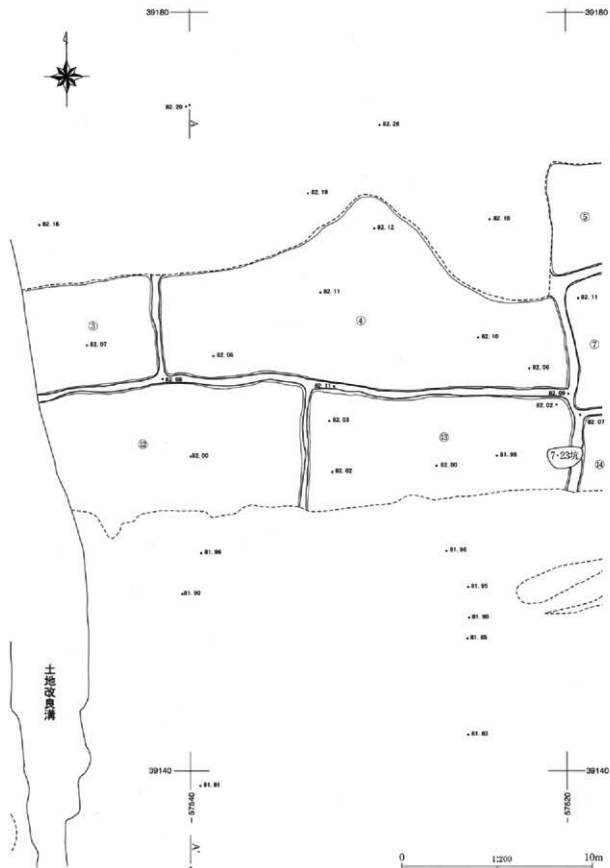


第24図 古代 (As-B直下) 水田1区全体図

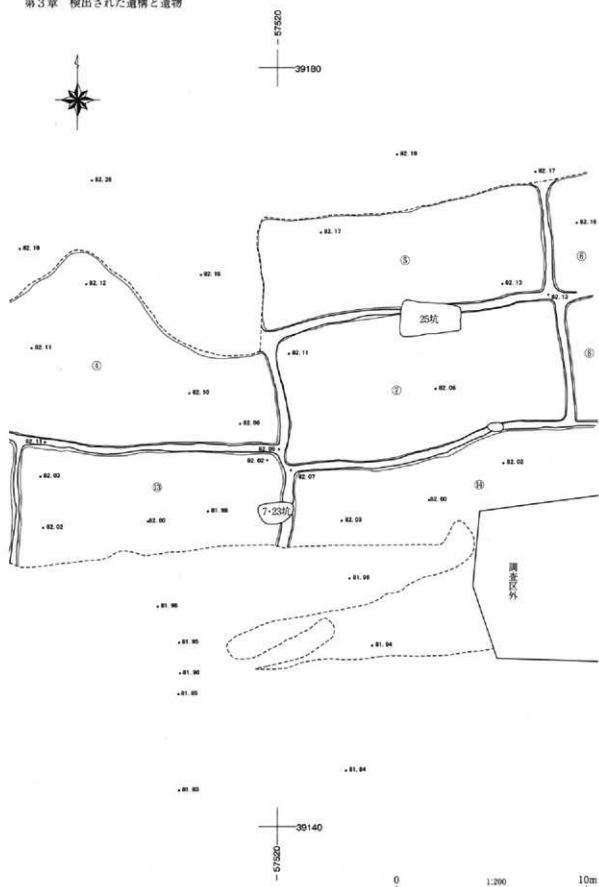




第26図 古代 (As-B直下) 水田1区部分図 (2)



第27図 古代 (As-B直下) 水田1区部分図 (3)



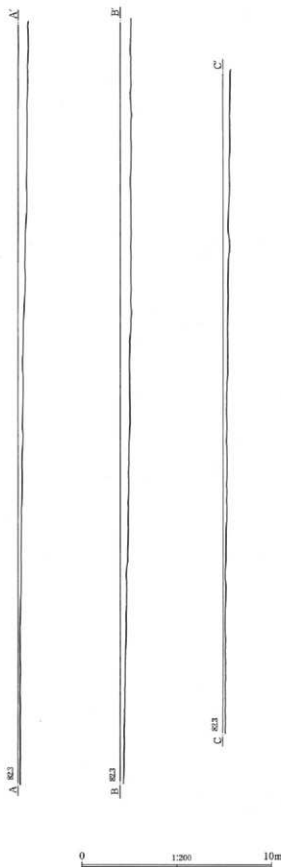
第28図 古代 (As-B直下) 水田1区部分図 (4)

1区のAs-B直下水田(第24～29図 PL.11・12)

北から南へ約7%の傾斜面をもつため、東西方向にくらべ南北方向が狭い長方形区画が主である。北側15～20m部分では東西帯状に標高が高く、中世以降の耕作(As-B混土層として確認)によって田面が削平されている。これは、As-B堆積の残る田面部分とAs-B直下水田耕土ないしは地山層との違いで認識でき、この境界は東西方向の区画線及び南北方向に延びる帯として確認できた(第24図破線部)。前者は畦の遺存した中央部分よりも一段標高の高い水田区画の存在、後者は全体を大きく区画する大畦の可能性を示す。大畦と推測される遺構は1区のこの部分のみで、幅約3mを測る。各々の区画を形成する畦は幅50～80cm、高さは5cm以下と低い。畦上面は後世削平の影響も考えられるが、As-Bに直接被われた部分でも低いことから、As-B降下時(推定1108年-天仁元年)における畦の隆起高は、検出状態と大差なかったろう。

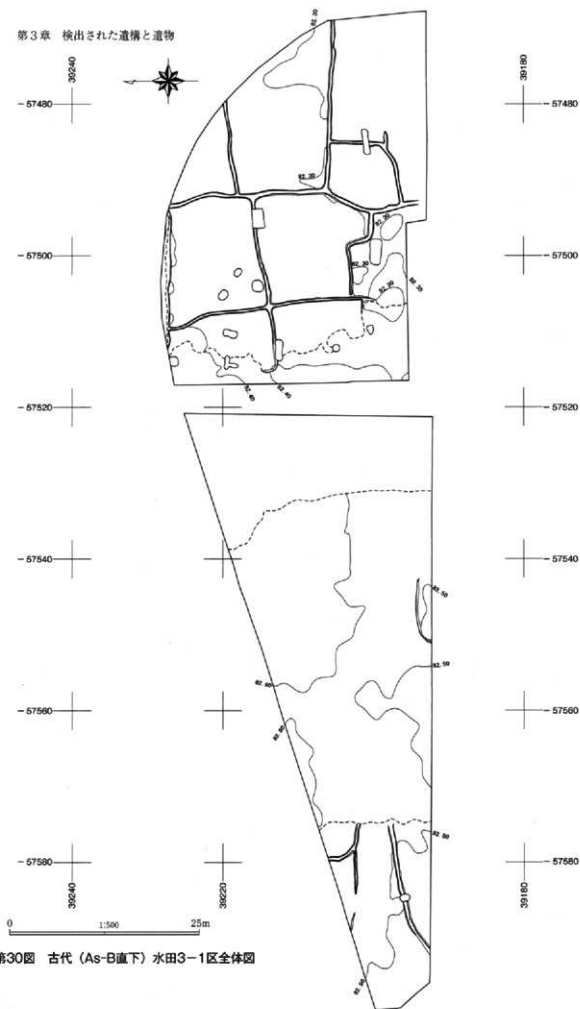
田面の状況は耕作時及び以後の影響による荒れが著しい。小さな凹凸にAs-B一次堆積物及びAs-B混土が堆積する状態で確認され、その中にはウマやヒトの足跡らしき凹みも認められるが、不明瞭で走向等もとらえられない。田面標高は、北部での最高位82.17m、南部での最低位81.74mを測る。前述したように北側から南側へ緩く傾斜する地形面にあわせ、各区画の中央標高で10cm前後の比高がある。一区画内の田面比高も最大10cm前後で、このことから、本来畦高が10cm以上のものであったと推測される。水口は南西部の区画間で1カ所見られたのみである。田面レベルと水口の位置から、配水は北→南、西→東に行われたと推測される。

水路は南西部で西から南東方向へ弓なりに湾曲した溝が検出された。東西畦の南側の沿った走向から、南東方向へ分岐して、やがて調査区外南部で南北畦に沿うものと思われる。幅は50cm、深さ10cm以下で両側に畦状の盛り土を行って溝としている。田面全体を灌漑する水路ではなく、西側区画から南東区画へ強制的に配水することを目的としたのだろう。

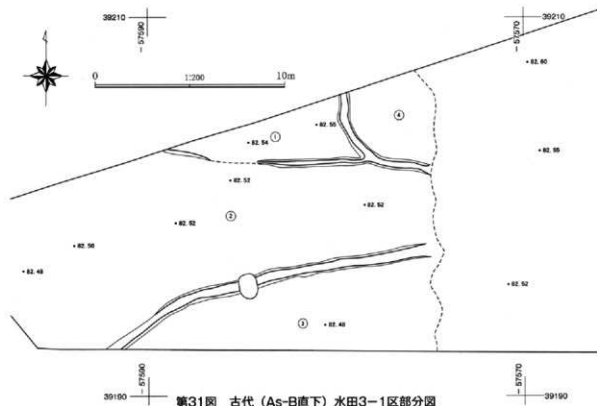


第29図 古代(As-B直下)水田1区断面図

第3章 検出された遺構と遺物



第30図 古代 (As-B直下) 水田3-1区全体図

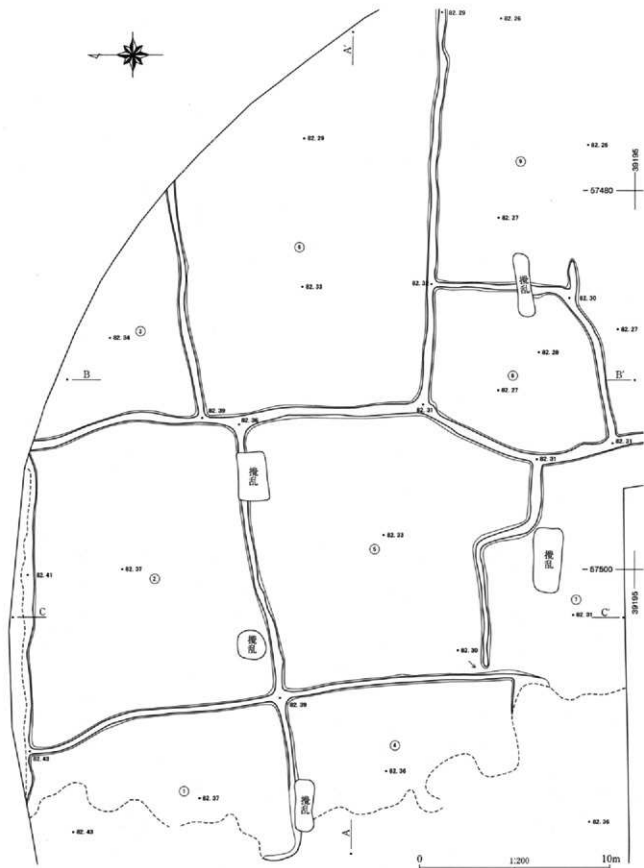


第31図 古代 (As-B直下) 水田3-1区部分図

表7 古代 (As-B直下) 水田区画計測表

面積は陸下海抜で調査された範囲、田面比高は同一区画内の最大値、畦比高は最大値と最小値を示す。

調査区	区画番号	面積 (㎡)	規模 (m)	田面中央標高	田面比高 (cm)	畦比高 (cm)
1区	1	—	—×1.2	82.04	10	3~4
1区	2	—	—×4.6	82.04	8	1~3
1区	3	—	—×5.5	82.07	2	1~3
1区	4	137.2	21.5×10.2	82.11	7	2~4
1区	5	81.2	15.2×5.7	82.16	5	1~3
1区	6	—	—×6.1	—	—	1
1区	7	101.2	15.1×7.6	82.06	5	1~3
1区	8	—	—×6.5	—	—	2
1区	9	—	—×8.4	81.98	12	1~4
1区	10	30.6	8.0×5.4	81.96	10	2
1区	11	—	—×7.5	81.95	7	2~7
1区	12	—	—×—	82.00	6	3~6
1区	13	—	—×—	82.02	5	5~6
1区	14	—	—×—	82.02	6	2~3
1区	15	—	—×18.0	81.92	12	1~2
1区	16	—	—×10.3	81.88	8	1~3
1区	17	—	—×—	81.88	—	1~2
1区	18	—	4.1×—	81.84	4	1
1区	19	(37.8)	—×18.2	81.83	14	2~5
1区	20	—	—×—	81.82	7	3
1区	21	—	—×—	81.81	2	2~3
1区	22	—	—×—	81.77	9	4
1区	23	—	—×—	81.83	3	—
3-2区	1	—	13.7×8.3	82.37	6	1
3-2区	2	196.2	15.3×13.0	82.37	8	3~5
3-2区	3	—	—×—	82.34	4	3~4
3-2区	4	—	—×12.0	82.34	8	3~4
3-2区	5	177.8	15.0×15.0	82.33	5	1~6
3-2区	6	—	—×13.6	82.32	7	2~4
3-2区	7	—	—×—	82.29	5	2~6
3-2区	8	64.9	9.2×8.4	82.28	3	2~6
3-2区	9	—	—×—	82.26	8	3~7

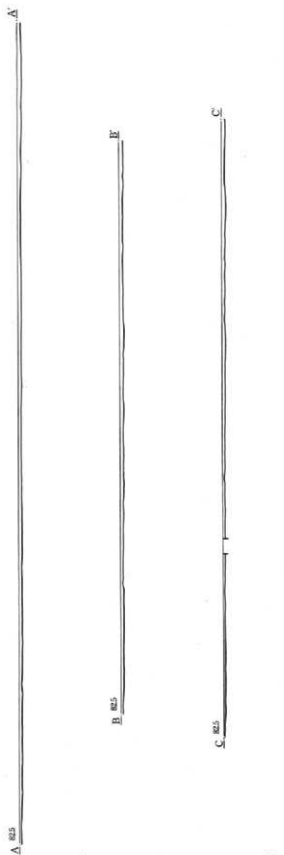


第32図 古代 (As-B直下) 水田3-2区部分図

3区のAs-B直下水田 (第30～33図 PL.13)

調査区北端に当たる3区では、西側の3-1区と東側の3-2区に調査区が分かれる。3-1区は標高8260mのやや高い地形で、水田面そのものは後世の削平や耕作によって失われている。ただし、西側の一部では標高8250m前後とやや低いため、畦下半部が確認された。これによれば、区画は東西方向に細長い形状で、地形にあわせたものか湾曲した畦走向で葦盤目状の区画にはなっていない。遺存状況良好な第2区画内での田面標高は8248m～8252mで、隣接する北側の第1区画とは2cm、南側第3区画とは4cmの比高がある。3-1区の大部分を占める標高の高い畦未検出地区では、南端でわずかにL字状に屈曲する区画隅部と思われる痕跡が認められた(第30図)ので、この地点でも本来水田区画が存在したと想定できる。

3-2区は3-1区の微高地部分の東側にあたり、調査区のはほぼ全体で水田面と畦区画が検出された。地形は北西から南東に緩く傾斜しており、標高8240m～8225mを測る。畦走向はほぼ東西南北を示し、各区画の規模や平面形が比較的均一化されている地点である。検出された区画9カ所のうち、西端の第1・4区画は西側微高地に遮られてやや南北に長い小規模な形状を示す。第2区画と第6区画は直線的な畦で区画された整った長方形を呈し、面積226㎡を越える大きさをもつ。第5区画と第7区画間の畦は鍵の手状に屈曲しており、その西端には北→南と配水するための水口が設けられている。第8区画は第9区画の北西隅を9.2×8.4mの規模で小さく区切った区画で、さらにその南東隅から東方向に延びる畦状の高まりが検出されたことから、第9区画は幅9mほどの細分区画に分割されていた可能性が考えられる。水田面の標高は、8237m～8226mで、隣接田面との比高は1～4cmと小さい。第1・2区画の北畦は、調査区外であるが、幅1m以上で標高8240mの等高線が畦上に沿って走ることから、大規模な区画を構成する大畦の可能性が指摘できる。

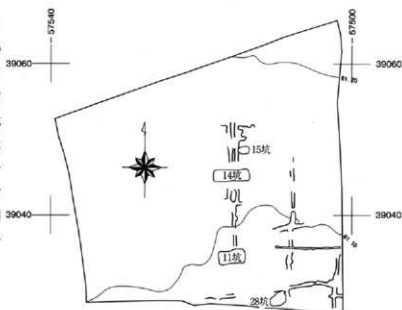


第33図 古代(As-B直下)水田3-2区断面図

第3章 検出された遺構と遺物

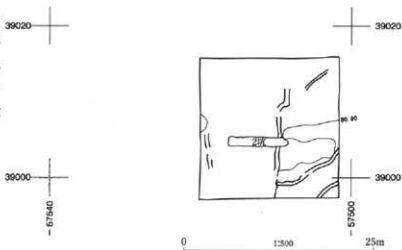
4区のAs-B直下水田(第34図 PL.14)

田面そのものは後世の削平・耕作のため検出されず、畦基部のみが検出された。これによれば、畦走向は東西南北で、東西畦間の距離は7~9m、南北間距離は7~10mを測る。南北畦走向は平行で整っているが、東西畦は南側の一部で斜走向のものが見られる。田面ではないが、畦基部検出面での標高は北側81.20m、南側80.90mで、約3%の傾斜面となっている。

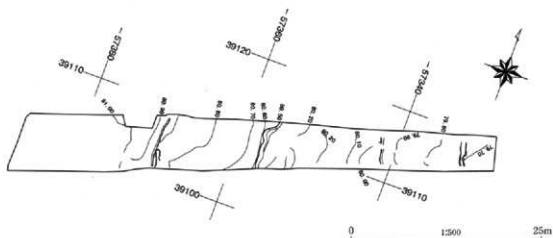


5-3区のAs-B直下水田(第35図)

ここでも南北走向の畦基部3条が検出されたのみである。畦間距離は10・12・15mを測る。北側隣接地は北関東自動車道本線調査部分にあたり、そこでは南北に細長いきわめて小規模な区画が検出されているが(第23図参照)、本調査区で検出された畦区画とは連続しない。



第34図 古代(As-B直下)水田4区全体図



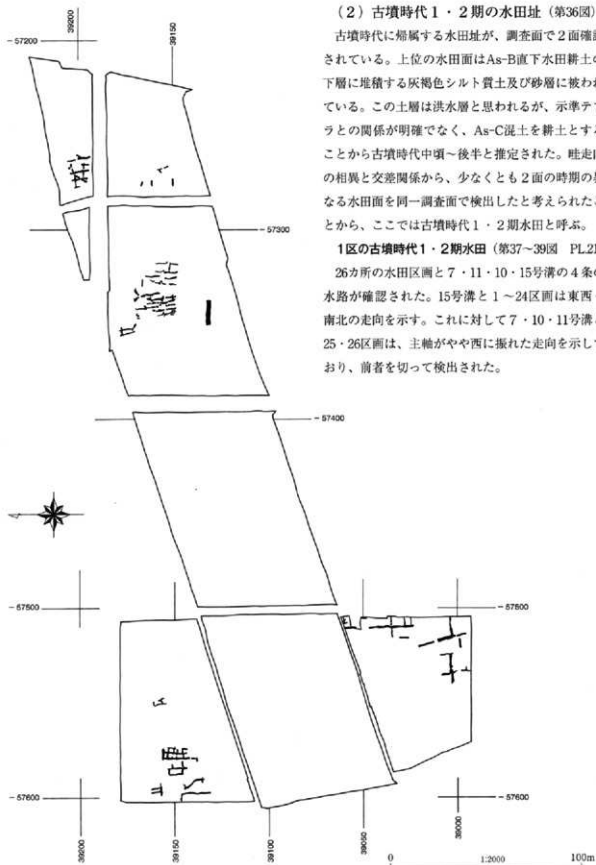
第35図 古代(As-B直下)水田5-3区全体図

(2) 古墳時代1・2期の水田址 (第36図)

古墳時代に帰属する水田址が、調査面で2面確認されている。上位の水田面はAs-B直下水田耕土の下層に堆積する灰褐色シルト質土及び砂層に被われている。この土層は洪水層と思われるが、示準テフラとの関係が明確でなく、As-C混土を耕土とすることから古墳時代中頃～後半と推定された。畦走向の相異と交差関係から、少なくとも2面の時期の異なる水田面を同一調査面で検出したと考えられたことから、ここでは古墳時代1・2期水田と呼ぶ。

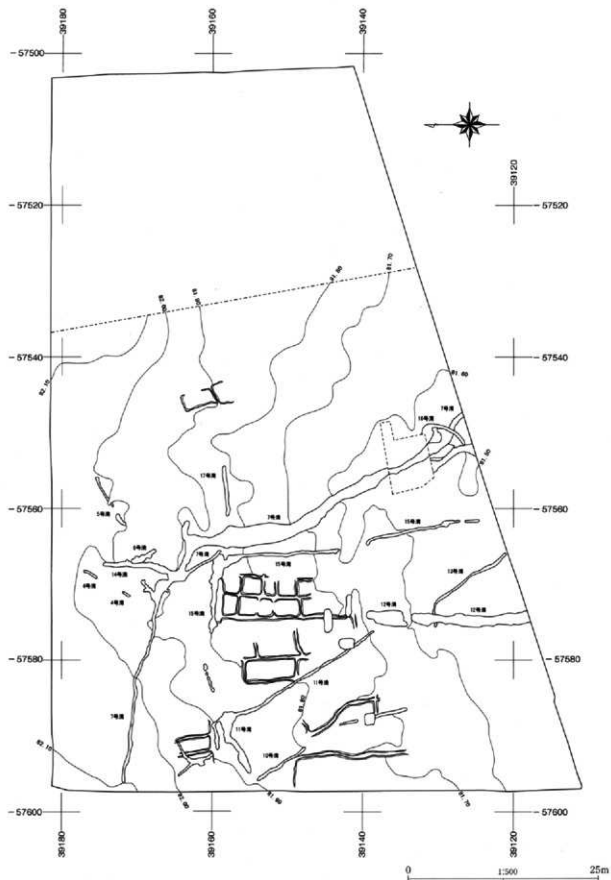
1区の水田時代1・2期水田 (第37～39図 PL21)

26カ所の水田区画と7・11・10・15号溝の4条の水路が確認された。15号溝と1～24区画は東西～南北の走向を示す。これに対して7・10・11号溝と25・26区画は、主軸がやや西に振れた走向を示しており、前者を切って検出された。

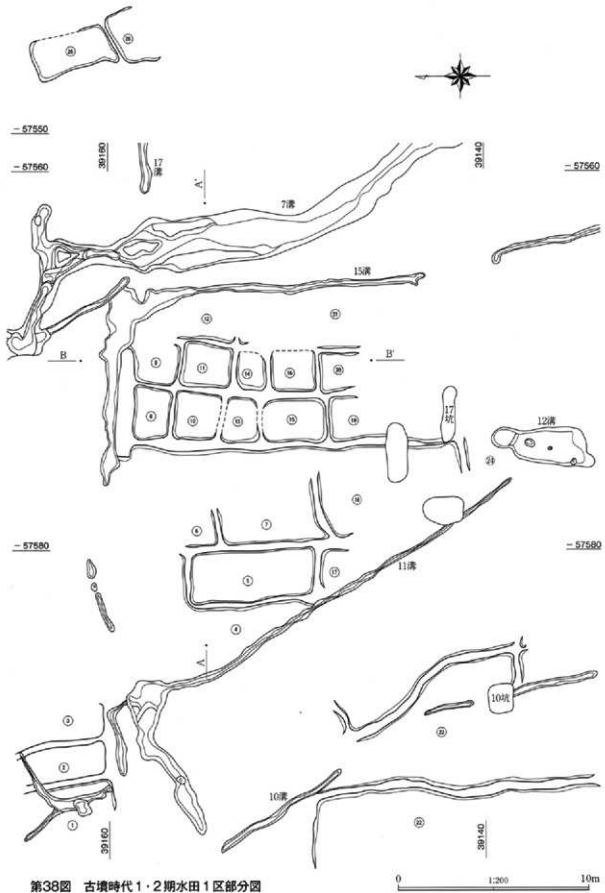


第36図 古墳時代1・2期水田全体図

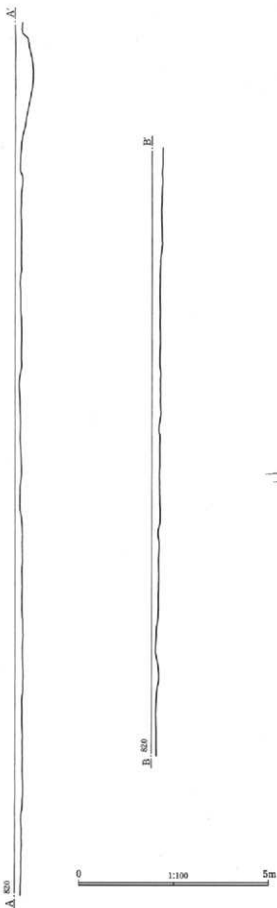
第3章 検出された遺構と遺物



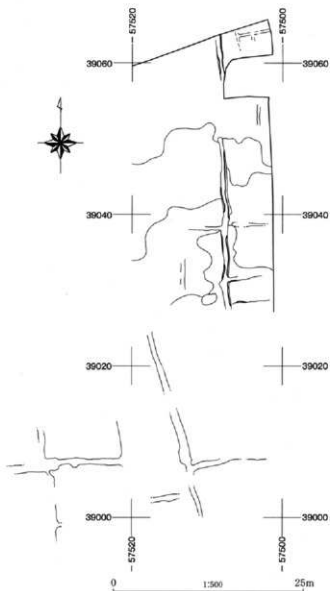
第37図 古墳時代1・2期水田1区全体図



第38図 古墳時代1・2期水田1区部分図



第39図 古墳時代1・2期水田1区断面図



第40図 古墳時代1・2期水田4区全体図

水田区画のうち、8～21区画は整った方眼区画を形成しており、最小5mに満たない極小区画である。同一の畦走向ながら、4～7・17・18区画は南北方向に細長い区画を形成していて、面積も15m²を超える。極小区画を形成する畦は幅50cm、高さ10cm以下を測る。1～3区画の南側畦と8・9区画の北側畦は、幅1m前後と広く東西延長線上に乗ることから、本来同一の大畦（X座標39160にほぼ一致）であったと想定される。15号溝は、この大畦の北側に沿って東西に走り、12区画の東側で

表B 古墳時代1・2期水田区画計測表

距離は地下埋設で調査された範囲、田面比高は同一区画内の最大値、畦比高は最大値と最小値を示す。

調査区	区画番号	面積 (㎡)	規模 (m)	田面中央標高	田面比高 (cm)	畦比高 (cm)
1区	1	—	—×—	81.90	—	3
1区	2	—	—×1.8	81.91	3	0～3
1区	3	—	—×—	81.93	4	2～3
1区	4	—	—×—	81.81	3	2
1区	5	15.8	6.6×2.75	81.82	4	2～4
1区	6	—	—×—	81.79	—	2～3
1区	7	—	5.15×—	81.79	3	2～7
1区	8	5.8	3.0×2.0	81.84	4	1～4
1区	9	—	2.4×—	81.81	2	3～5
1区	10	—	2.5×(2.4)	81.81	2	1～4
1区	11	6.2	2.6×2.4	81.79	0	5～7
1区	12	—	—×—	81.78	3	2～3
1区	13	4.4	2.4×2.0	81.83	2	0～2
1区	14	—	—×1.6	81.77	1	4～8
1区	15	(8.2)	3.5×2.3	81.79	3	2～5
1区	16	—	2.4×—	81.79	12	1
1区	17	—	—×—	81.77	2	4～5
1区	18	—	7.7×4.4	81.75	6	2～5
1区	19	—	—×2.4	81.73	6	4～5
1区	20	—	—×2.1	81.75	9	3～5
1区	21	—	—×—	81.70	—	3
1区	22	—	—×—	81.77	14	3
1区	23	—	—×—	81.73	6	1～3
1区	24	—	—×—	81.70	—	4
1区	25	(8.4)	4.2×2.0	81.94	5	1～2
1区	26	—	3.2×—	81.86	3	3～4

南方向に屈曲してそのまま南下する。この15号溝東西部の東延長上で、7号溝の東側に17号溝が検出されており、これも東西大畦に沿った水路と捉えられよう。他に大畦が確認できなかったことから、全体を大きく区切る区画規模は不明だが、調査区内での検出状況から一辺40mを越えると想定される。

区画内での田面中央標高は、81.70(最南端24区画)～81.94m(北東端25区画)で、全体に北→南に約1%で緩傾斜する田面を区画している。畦の遺存状況が不良なため水口は確認できなかった。

7・10・11号溝は、北西→南東へ灌漑する小規模な水路と考えられるが、25・26区画がこれと平行する走向をもつこと以外に、これに伴う水田区画は明確でない。1区西側で検出された23区画の東側畦は南北方向でなく西側に傾いて蛇行するが、10号溝に切られることから、これより古い段階、すなわち1～21区画と同時期のものと考えられる。

4区古墳時代1・2期水田(第40～42図 PL15)

北半部で南北方向に走る畦とこれに直交して東西方向に区切る畦基部が確認された。これは田面を水平にスライスすることで、耕土部分との土質の違いで確認できた。南半部では、この南北畦とやや走向を異にし、西に傾く畦とこれを基線にした方眼区画が検出された。これも畦の遺存状況が不良で、本来の隆起部分は検出されなかった。北半部では2～5区画に見るように、一辺2m以下の極小区画で構成されたらしい。これに対し、南半部の14～22区画は一辺6～10mと大きい。先後関係は確認できなかったが、この両者は時期の前後する水田区画と考えてよいだろう。特に後者の場合、As-B直下水田の畦基底部であった可能性も考え得る。



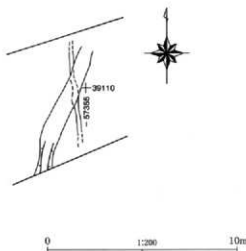
第42図 古墳時代1・2期水田4区部分図(2)

5区の水田時代1・2期水田(第43図)

5-3区は本線部分C区の南側隣接部で、幅6mの調査範囲の一部から畦状の高まりが検出された。北東方向にやや蛇行して延びる高さ5cm以下の畦状遺構で、幅は80cm前後を測る。後世削平が及んでいて本来の形状は残っていない。畦の基部に近い。

この畦状遺構の下位からは、ほぼ南北方向に延びる高さ3cm以下の段が認められた。西側が高いことから、西→東に傾斜する面に設けられた畦の東縁辺部を検出したものとみられる。

上記2条の畦状遺構は、As-C混土の上で検出されたことから、古墳時代1・2期に帰属すると考えられる。



第43図 古墳時代1・2期水田畦5-3区部分図

(3)古墳時代3期の水田址 (第44図 PL16~20)

3区と5区で、As-C混土を耕土とする水田区画、4区ではAs-Cに被われた水田面が検出された。

3区で検出された1~11区画は、As-C混土である耕土と地山の黒色粘質土を基調とする畦基底との相異で確認された。区画規模は一辺5m以下で、やや東西方向に長い長方形区画である。検出面での標高82.30~82.10mの西→東の緩傾斜面に形成され、本来の田面標高はこれより10cmほど高かったと思われる。5区では3区と同様の畦基底検出による水田区画(1~18区画)が検出された。ほぼ東西-南北の走向で、区画の一辺は2~2.5mと極小区画である。以上3区と5区で検出された水田区画は、As-Cを鋤込んだ耕土による水田で、古墳時代1・2期水田面の下層で検出されたことから、時期は4~5世紀代のなかで理解されよう。

4区は、他の調査地区よりもやや低い窪地であったため、As-C(3世紀後半の降下)の一次堆積が見られた。As-Cの腐厚は薄くブロック状の部分も見られたが、おむね畦の遺存状況は良好であった。東半を北西から南東に流下して平行する2・3号溝をはさんで西側の畦の走向はN-38~40°-W、東側ではほぼ南北方向を指す。この平行溝は、幅1.2~2.0mの大畦の側溝であり、この大畦は古墳時代1・2期水田で検出された4区南半部の16・17区画と14・15区画を分ける南北畦に相当することが整理作業段階で判明した。東半と西半で水田区画方向が異なることから、その中間部には大畦等の大区画施設が存在したと推測されるが、確認できなかった。この部分は北西から南東方向にかけての帯状に、As-C堆積が不明瞭であったため、本水田区画に伴う施設は見られないが、他の田面よりもやや高くなっていたため、後世の耕作等により削平されて想定される区画施設が消失してしまった可能性が高い。その区画施設は古墳時代1・2期水田段階まで継承され、先述した2条平行溝を伴う畦となったと考えてよいだろう。

各水田区画の田面中央標高は82.33~80.72mで、

隣接する区画間士の比高は最大値でも5cmである。また畦の高さは、最大8cmを測るが、ほとんどは0~5cmで、湛水可能な本来の畦高を示していない。畦上位が後世の耕作等で失われた可能性と、As-C堆積時には畦づくりを行っていなかった可能性が指摘できよう。

各区画の面積は、最大でも14m²、最小では2m²を測る。畦走向によれば、北半部中央の北東-南西方向の横畦(15~37区画と38~48区画の間)が幅約1mと広く、断絶も見られないことから、水田を大きく南北に区画する基軸となる畦であったことが推測される。また4区南半部では、63・68・71区画と62・67区画の中間に、N-45°-Wの走向で延びる平行する2条の畦にはさまれた幅1mの浅い溝が見られる(第49図)。これを縦区画の基軸のひとつと考えてよいだろう。溝は深さが5cm以下で、他の田面とはほぼ同一標高を示し、特に深い形状を示さないが、北西→南東の緩傾斜面に直交する走向であることから、水田区画内での配水を効果的に行うための簡易水路としての機能を果たしたものであろう。そして南東端が収束しており、隣接田面への水口も認められないことから、この溝からの灌漑は、畦越えの掛け流しであった可能性が高い。

畦の走向は、縦方向(北西-南東)の平行線で構成され、その間隔は2.5~3.0mでほぼ整っている。これに対し、横畦方向は段違いの部分が多く、畦間距離も2.5~4.0mでばらつきが大きい。また、水口も主にこの横畦の中央部分か片側に偏って見られる。以上の畦区画の在り方から、配水は縦畦に沿って、北西→南東方向に流れたことが明らかである。

4区北東部で検出された南北走向の水田区画も、畦間距離2.5mの平行畦で構成され、段違いになる東西畦で区画を分割する構造をとる。

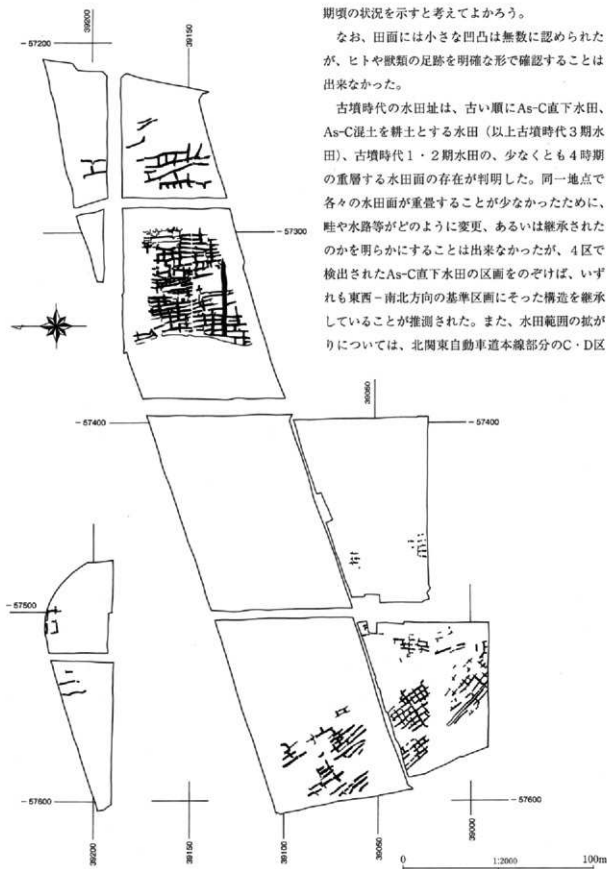
以上に検出されたAs-C直下水田区画は、古墳時代前期に遡るものである。近年における古墳時代層年代観からすると、As-C降下年代は従来の4世紀半ば・4世紀初頭説をさらに遡る3世紀後半代と考えられるので、検出された水田面は3世紀第3四半

2 古墳時代前期～平安時代の遺構

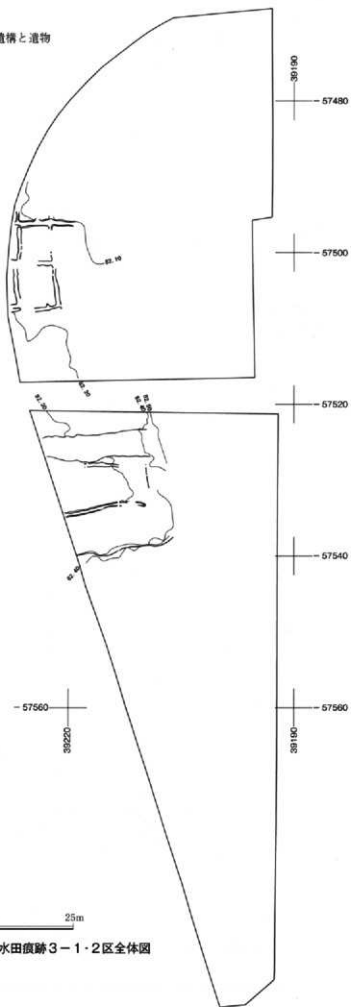
期頃の状況を示すと考えてよからう。

なお、田面には小さな凹凸は無数に認められたが、ヒトや獣類の足跡を明確な形で確認することは出来なかった。

古墳時代の水田址は、古い順にAs-C直下水田、As-C混土を耕土とする水田（以上古墳時代3期水田）、古墳時代1・2期水田の、少なくとも4時期の重層する水田面の存在が判明した。同一地点で各々の水田面が重層することが少なかったために、畦や水路等がどのように変更、あるいは継承されたのかを明らかにすることは出来なかったが、4区で検出されたAs-C直下水田の区画をのぞけば、いずれも東西-南北方向の基準区画にそった構造を継承していることが推測された。また、水田範囲の拡がりについては、北関東自動車道本線部分のC・D区

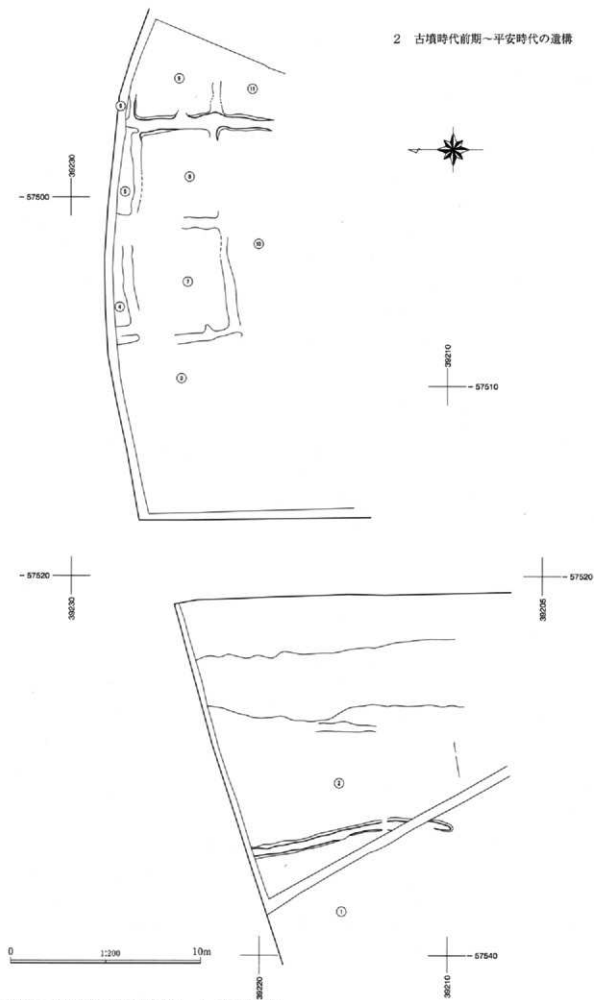


第44図 古墳時代3期水田全体図

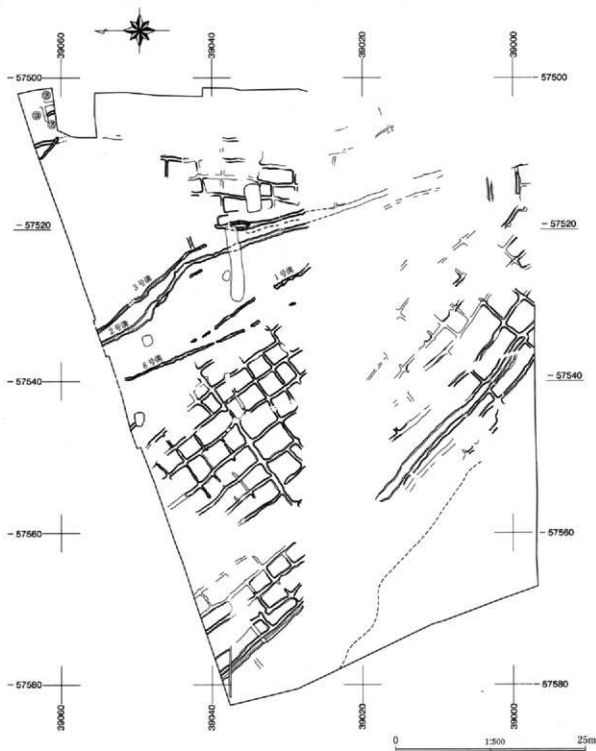


第45図 古墳時代3期水田痕跡3-1・2区全体図

2 古墳時代前期～平安時代の遺構



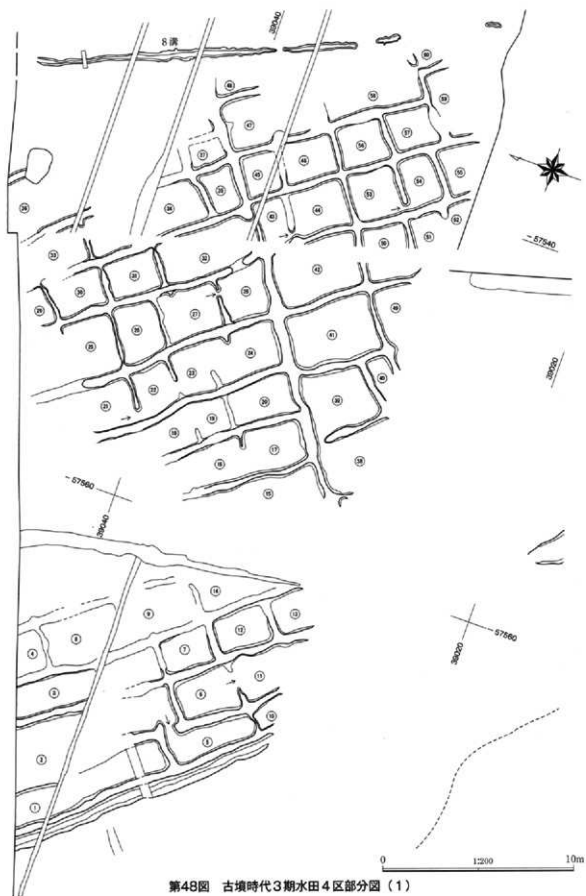
第46図 古墳時代3期水田痕跡3-1・2区部分図



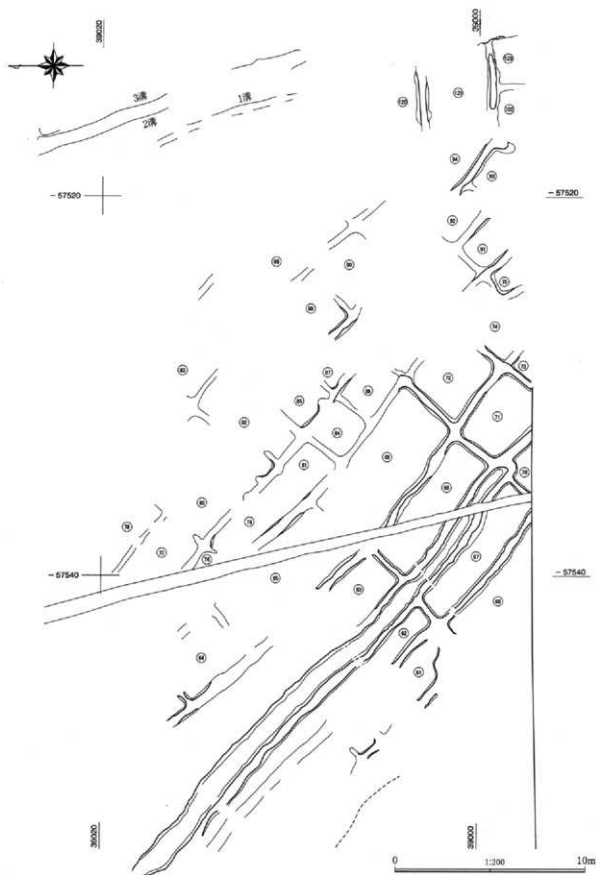
第47図 古墳時代3期水田4区全体図

で検出されている水田区画を含めて、本道跡中央付近にあたる2区～5区北半（本線部分A区東半～B区～C区西端）の微高地部分を居住域として利用し、それを囲む低地部分はほぼ全域が水田化されたと考

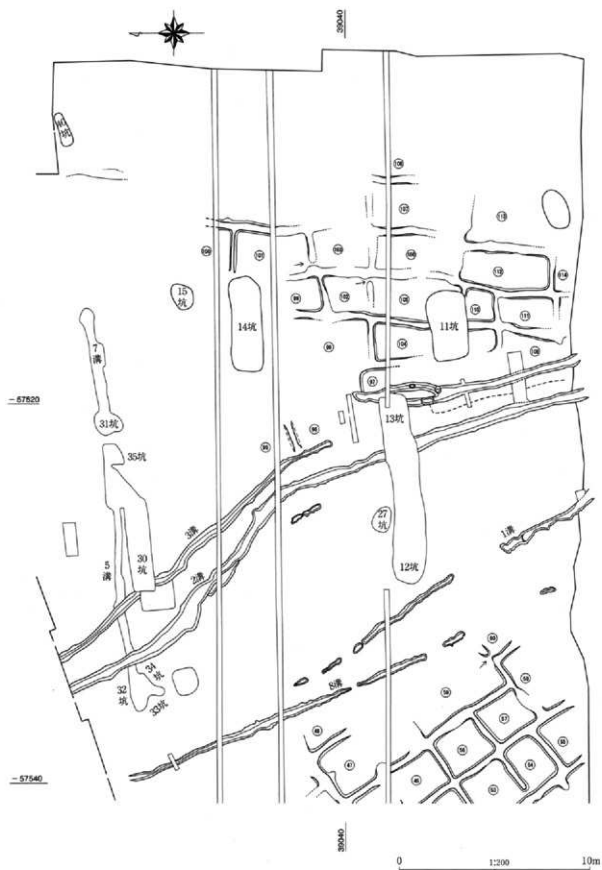
えられよう。なお、4区南西部分の第47図破線部以西は、As-Cの堆積が認められなかった場所で、水田区画の有無については確認できなかった。



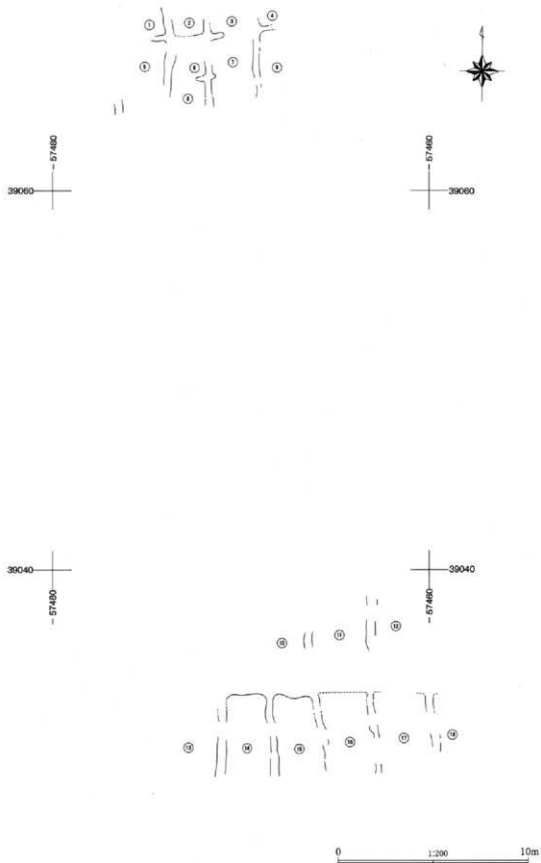
第48図 古墳時代3期水田4区部分図(1)



第49図 古墳時代3期水田4区部分図(2)



第50図 古墳時代3期水田4区部分図(3)



第51図 古墳時代3期水田遺跡5-1区部分図

表9 古墳時代3期水田区画計測表(1)

面積は地下埋蔵で調査された範囲、田面比高は同一区画内の最大値、畦比高は最大値と最小値を示す。

調査区	区画番号	面積 (m ²)	規模 (m)	田面中央標高	田面比高 (cm)	畦比高 (cm)
3-1区	1	—	—× 6.2	82.33	14	1~4
3-1区	2	—	—× 5.8	82.28	13	1~5
3-2区	3	—	—×—	82.21	10	1
3-2区	4	—	—×—	—	5	0~2
3-2区	5	—	—×—	—	3	0
3-2区	6	—	—×—	—	—	2
3-2区	7	(26.65)	5.6× 4.8	82.17	5	0
3-2区	8	—	4.7× (4.3)	82.15	6	0~2
3-2区	9	—	—× 4.1	82.09	3	1~3
3-2区	10	—	—×—	82.08	5	1~2
3-2区	11	—	—×—	82.14	1	2~4
4区	1	—	—× 1.8	81.00	3	2~5
4区	2	—	—× 1.9	81.02	4	0~4
4区	3	—	—× 1.75	81.06	0	1~4
4区	4	—	—× 2.6	81.11	1	1
4区	5	(7.4)	4.6× 1.6	81.01	0	5
4区	6	(8.2)	3.3× 2.5	81.03	1	4
4区	7	4.4	2.1× 1.9	81.06	—	1
4区	8	(9.9)	4.1× 2.6	81.085	2	2
4区	9	—	—× 2.4	81.09	1	1
4区	10	—	—× 1.2	81.00	3	2
4区	11	—	—× 2.6	81.02	3	1~2
4区	12	6.5	3.0× 2.2	81.02	1	2~3
4区	13	—	—× 2.2	80.98	2	3
4区	14	—	—×—	81.05	—	0
4区	15	—	—×—	81.05	5	0
4区	16	—	—× 2.2	81.05	5	0~1
4区	17	(6.9)	3.3× 2.4	80.98	2	0
4区	18	—	—× 2.0	81.05	2	0
4区	19	(3.35)	2.0× 1.7	81.00	—	0
4区	20	6.7	3.5× 2.2	80.97	—	1
4区	21	—	—× 2.5	81.02	3	1~3
4区	22	(5.6)	2.5× 2.2	—	5	1~2
4区	23	(7.2)	3.0× 2.65	80.96	1	2
4区	24	(6.0)	2.6× 2.5	80.98	—	0
4区	25	—	3.2× 2.7	81.04	1	2
4区	26	7.5	3.2× 2.4	81.02	1	1~2
4区	27	6.15	3.1× 2.1	80.99	1	1~3
4区	28	5.7	2.8× 2.5	80.98	—	1
4区	29	—	—× 2.1	81.08	—	—
4区	30	(6.3)	3.1× 2.1	81.04	1	2
4区	31	4.95	2.8× 2.1	81.04	3	1~3
4区	32	(11.4)	5.4× 2.4	80.98	2	1
4区	33	—	—×—	81.05	2	0~3
4区	34	—	—× 2.4	81.01	3	0~2
4区	35	6.0	2.5× 2.4	80.99	—	0
4区	36	—	—× 2.9	81.07	1	1~4
4区	37	2.0	1.9× 1.2	80.97	—	3
4区	38	—	—× 3.0	80.94	2	5
4区	39	10.2	3.6× 3.5	80.96	1	0~4
4区	40	—	—× 1.3	80.92	—	2
4区	41	17.9	4.7× 3.8	80.96	3	0~4
4区	42	(12.7)	4.6× 3.0	—	2	1~6
4区	43	—	—× 1.5	80.94	2	0~2

第3章 検出された遺構と遺物

表 10 古墳時代3期水田区画計測表(2)

面積は地下埋藏で調査された範囲、田面比高は同一区画内の最大値、畦比高は最大値と最小値を示す。

調査区	区画番号	面積 (㎡)	規模 (m)	田面中央標高	田面比高 (cm)	畦比高 (cm)
4区	44	7.25	3.0 × 2.5	8094	1	4~6
4区	45	(4.35)	2.2 × 1.9	8093	—	6
4区	46	(6.35)	2.9 × 2.2	8093	1	3
4区	47	—	— × 2.7	8094	3	3~8
4区	48	—	— × —	8096	3	4
4区	49	—	— × —	8093	1	2
4区	50	(7.1)	2.85 × 2.5	8093	1	0~5
4区	51	—	— × —	8092	1	2
4区	52	—	— × —	8090	6	2
4区	53	6.85	2.6 × 2.6	8094	0	3
4区	54	5.15	2.7 × 1.95	8092	1	3
4区	55	—	2.7 × —	8088	2	2
4区	56	6.05	2.8 × 2.3	8092	0	3
4区	57	5.4	2.4 × 2.3	8093	1	2~4
4区	58	—	5.25 × —	8096	5	3
4区	59	—	— × 3.7	8094	1	4
4区	60	—	— × —	8091	—	2
4区	61	—	— × 2.0	8087	1	1
4区	62	—	— × 1.3	8081	4	5
4区	63	—	— × 2.5	8087	2	2
4区	64	—	— × 2.7	8087	—	0
4区	65	—	— × 3.5	8085	3	1~5
4区	66	—	— × —	8085	4	0
4区	67	15.35	7.8 × 2.0	8081	4	2
4区	68	(18.3)	7.4 × 2.5	8083	2	1~4
4区	69	—	7.8 × 3.5	8085	1	1~3
4区	70	—	— × —	—	—	0
4区	71	—	4.3 × 3.1	8083	1	2
4区	72	(11.25)	3.6 × 3.3	8077	4	2~4
4区	73	—	— × —	—	—	1
4区	74	—	— × —	8077	4	1~2
4区	75	—	— × 1.5	8073	2	1~2
4区	76	—	— × —	—	—	0.5
4区	77	—	— × 2.5	8084	5	1
4区	78	—	— × —	8088	4	2
4区	79	—	(5.4) × 1.9	8082	7	0~2
4区	80	—	— × —	8082	4.5	1~4
4区	81	—	2.1 × 2.0	8077	3	0~2
4区	82	—	5.2 × 2.5	8077	5	1
4区	83	—	— × —	8079	4	1~3
4区	84	(5.2)	2.3 × —	8077	3	1~2
4区	85	—	2.4 × —	8076	3	0~3
4区	86	—	(2.7) × 2.2	8076	6	1
4区	87	—	— × —	8076	4	2~3
4区	88	—	3.2 × —	8077	1	0~2
4区	89	—	— × —	8080	5	0~1
4区	90	—	— × —	8077	1	0~2
4区	91	—	— × 1.9	8071	3	4
4区	92	—	(2.4) × 1.4	8073	2	2
4区	93	—	— × —	8072	1	3
4区	94	—	— × —	8073	3	3
4区	95	—	— × —	8093	—	2
4区	96	—	— × —	8090	—	3
4区	97	—	— × —	8094	7	5

表 11 古墳時代3期水田区画計測表(3)

面積は地下埋蔵で調査された範囲、田面比高は同一区画内の最大値、畦比高は最大値と最小値を示す。

調査区	区画番号	面積 (㎡)	規模 (m)	田面中央埋高	田面比高 (cm)	畦比高 (cm)
4区	96	—	—×—	80.94	2	0~1
4区	99	—	—×1.9	80.92	1	1
4区	100	—	—×—	80.97	—	—
4区	101	(8.1)	4.0×2.1	80.94	1	3
4区	102	(4.8)	2.5×2.0	80.91	1	2
4区	103	—	(2.8)×2.0	80.93	2	0
4区	104	(13.1)	6.5×2.0	80.88	2	1~6
4区	105	—	4.7×2.2	80.88	2	1~3
4区	106	—	—×1.8	80.88	2	1
4区	107	—	—×2.4	80.92	0	1
4区	108	—	—×—	80.90	—	2
4区	109	—	—×—	80.88	—	0
4区	110	—	1.8×1.5	80.86	—	1
4区	111	(4.05)	2.9×1.7	80.86	—	2
4区	112	(9.45)	4.8×2.1	80.87	0	1
4区	113	—	—×—	80.87	0	1
4区	114	—	—×—	80.86	—	1
4区	115	—	7.0×—	—	7	2~3
4区	116	—	—×6.5	80.80	5	0~4
4区	117	—	—×2.8	80.82	4	2~3
4区	118	—	—×—	80.74	4	1
4区	119	—	—×—	—	11	0.5~3
4区	120	—	—×—	80.80	—	1
4区	121	—	—×3.4	80.76	1	3~5
4区	122	—	—×—	80.75	1	5
4区	123	—	—×—	80.72	2	4
4区	124	—	—×—	81.03	4	0
4区	125	—	—×—	—	3	0
4区	126	—	—×—	81.04	—	0
5-1区	1	—	—×—	81.10	1	1
5-1区	2	—	—×1.7	81.09	3	1
5-1区	3	—	—×—	81.11	0	1
5-1区	4	—	—×—	81.10	—	1
5-1区	5	—	—×—	81.10	3	2
5-1区	6	—	—×1.8	—	2	1
5-1区	7	—	—×2.2	81.08	4	1~2
5-1区	8	—	—×1.9	—	2	1
5-1区	9	—	—×—	81.10	2	0
5-1区	10	—	—×—	80.86	1	1
5-1区	11	—	—×2.9	80.87	2	0~1
5-1区	12	—	—×—	80.87	1	0
5-1区	13	—	—×—	—	2	2
5-1区	14	—	—×2.4	80.86	3	1
5-1区	15	—	—×2.5	80.83	4	1
5-1区	16	—	—×2.4	80.84	3	0
5-1区	17	—	—×2.7	80.87	2	1
5-1区	18	—	—×—	—	—	2

(4) 耕作溝群 (第52図 PL.21)

3-1区北端部の調査対象地内で最も標高の高い微高地部で、畝に関連すると思われる平行する耕作溝6条が検出された。検出面の標高は、8253~8240mで、Hr-FA相当の黒色粘質土層の上層で検出され、2cmほどの深さを測る。埋土はHr-FA粒を含む砂質土。溝間距離は0.9~1.0mで、走向はN-70°-Eを測る。溝底の標高は8240m前後で凹凸が多く、耕作具痕は認められなかった。

耕作溝群の西側には、約70cmの間隔をあけて、3区26号溝が直交方向に走る。26号溝はN-30°-Wで直線的に伸び、最大幅1.2m、深さ26cmの規模で、断面形は浅い菜研堀形である。埋土は砂質シルト質土で、洪水堆積物によって埋没した可能性が高い。26号溝は耕地の区画溝兼灌漑水路と考えられる。ただし、底面標高は8227~8220mでほぼ平坦であり、水流があったとしても北西→南東へきわめて緩い流れであったと想定される。排水機能が主だったのかもしれない。

耕作溝群と耕地区画の26号溝との間、幅70cm前後の空隙部分は、本来畦状の高まりが存在したと想定されるが、その痕跡は確認できなかった。

26号溝を境に、東側にあたる3-2区では、古墳時代3期水田(3世紀後半~5世紀代)と12世紀初頭の姿を示すAs-B直下水田は検出されたが、6世紀代からの古墳時代1・2期水田に相当する遺構は全く検出されなかった(付図2参照)。本線部分で検出された居住域はさらに東側の隣接地にあつていことから、遺構の検出されなかった3-2区は主に畝地として利用されていたと考えられよう。また26号溝の西側では、23・24・25号溝のように東西-南北に直交する溝群が見られることから、当時は水田区画が存在した可能性を考えたい。古墳時代の5世紀代まで水田化されていた地点が、洪水等の要因で埋没したため一部を6世紀代以降は畝として利用されることとなり、再び全域が水田化されるのは、古代のAs-B直下水田の閑態時(8世紀代か)まで下る、との土地利用変遷が想定される。

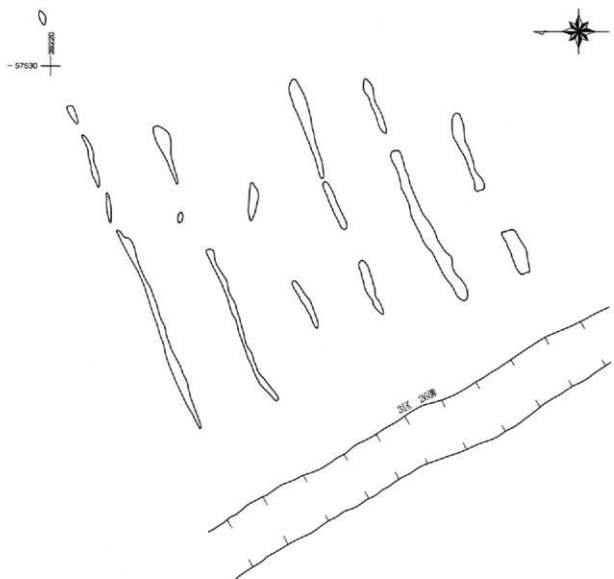
(5) 水路 (第53~67図 PL.21~28)

古墳時代を含め古代以前の溝を一括して扱う。

1区7号溝(第58図)は、東側微高地縁辺に沿っており、古墳時代1・2・3期水田のいずれかを灌漑した水路の可能性が高い。走向はN-80°-Wで西から東流し、南東方向に大きく屈曲してN-10~30°-Wに蛇行して流下する。この屈曲部では北方から流下した溝と合流し、再び南東方向へ分岐して延びる部分が3mほどの長さで検出されている。埋土は砂質土が堆積し、上位をAs-C混土が被う。10・11・13号溝は西側で7号溝とはほぼ平行して走り、7号溝-11号溝は約20m、10号溝-11号溝間は約7mの間隔を測る。また11号溝東西部の東側延長上には5号溝が検出された(第55・56図)。この位置関係から、1区では7号溝が主水路であり、5・10・11・13号溝がこれから分岐し、各水田区画を廻る小水路と考えられる。このうち、11号溝(第56図)は、南西-北東方向(N-70°-E)に9mほど延び、ほぼ直角方向に屈曲して南流する。この屈曲部の東には3mの間隔を開けて延長線上に長さ4m弱の小規模な溝が検出されており、間隔部分に畦が存在し、南下する11号溝は畦の西側に沿った水路と考えられよう。また11号溝の南西-北東走向部の西端では、約1mの間隔を開けて10号溝の北端が位置し、ここから平行して南流する(第53図)。この位置関係から、この1m間隔部にも溝に沿った畦の存在を想定してよいだろう。

これらに対して、1区12・15・17号溝は東西-南北に走向を取り、方眼状の区画を構成する。15号溝東西走向部分-17号溝と13号溝東西走向部分の間隔は約30mを測り(第53図)、水田を東西方向に区画するひとつの規模を示しているが、本来はさらにこの区画内部をさらなる極小区画に区切ったと想定される。これらは前述の古墳時代1・2期水田区画に伴う幅80~50cmの小規模な灌漑水路と思われる。

2区で検出された1~3号溝は、調査区でも微高地部分を流下する水路と思われる(第53図)。2号溝は主幹水路と想定され、N-70°-Wの走向で南



57540
31220

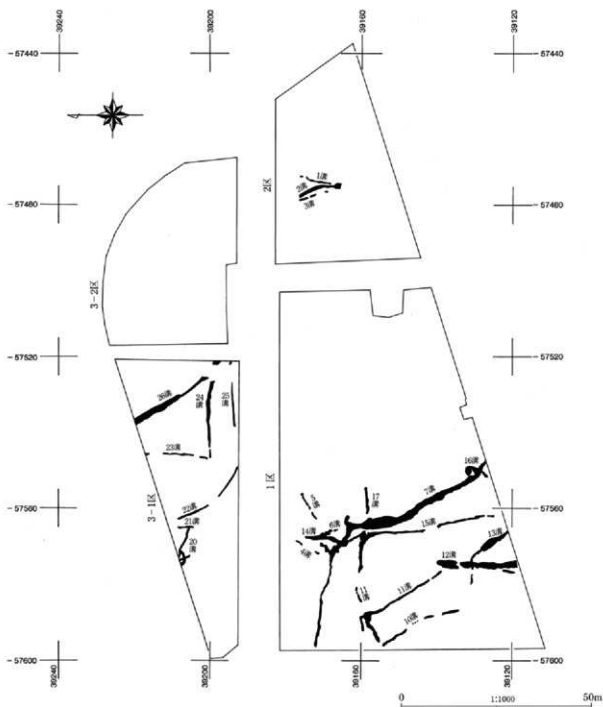
0 1.50 2m

第52図 古墳時代の耕作溝群

第3章 検出された遺構と遺物

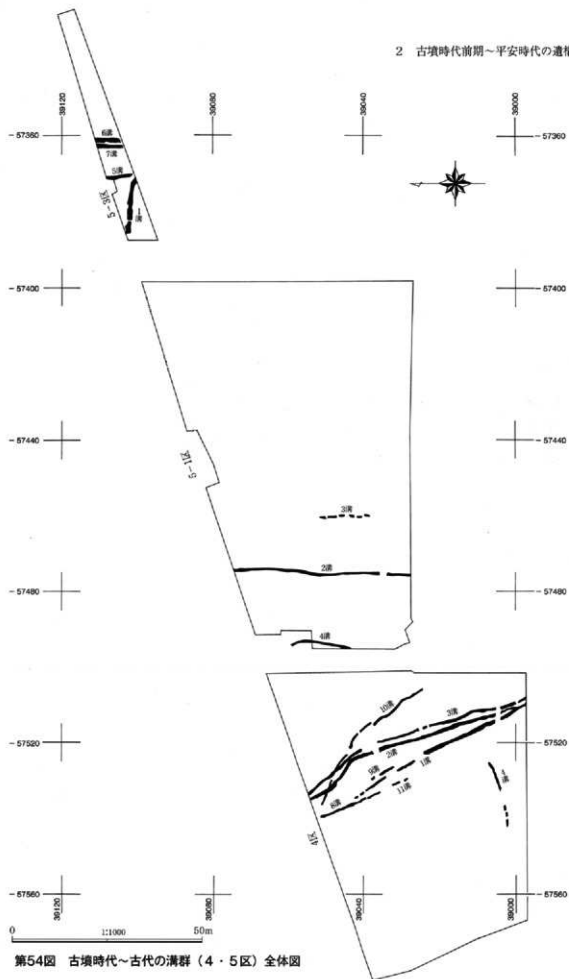
流し、途中で真南に走向を変える。底面の中央部分で小規模な堤状高まりがみられることから、本来は掘り直された2条の溝であったらしい。3号溝は2号溝の西側に2m離れて平行し、1号溝は北東から流下して2号溝南端で合流すると推測される。周辺では水田区画が検出されていないため、水田灌溉と

の関係は不明といわざるをえない。南側本線調査区では、集落居住域の西側を画すような位置関係で数条の溝が検出されている（付図2）ことから、2区1～3号溝もこれらと共通する性格をもった可能性がある。

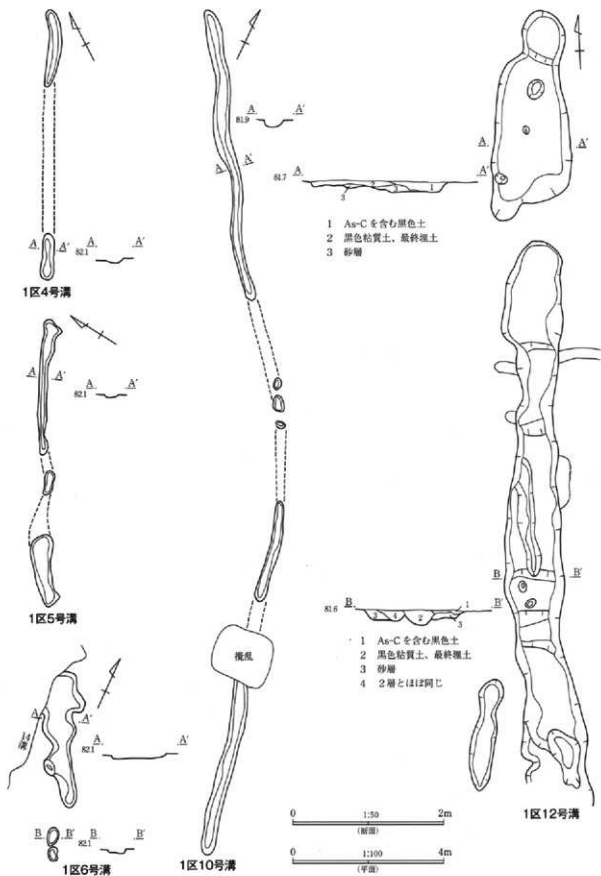


第53図 古墳時代～古代の溝群（1～3区）全体図

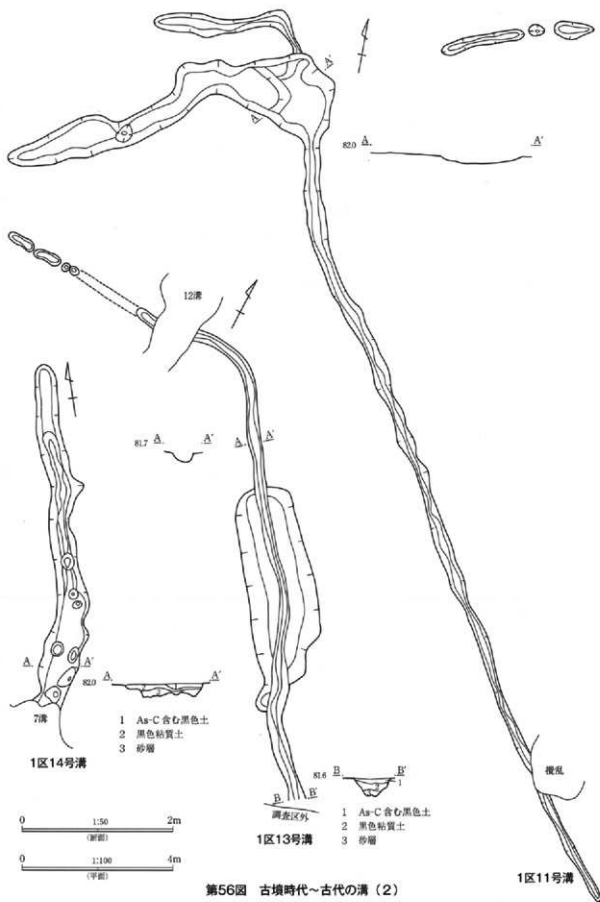
2 古墳時代前期～平安時代の遺構



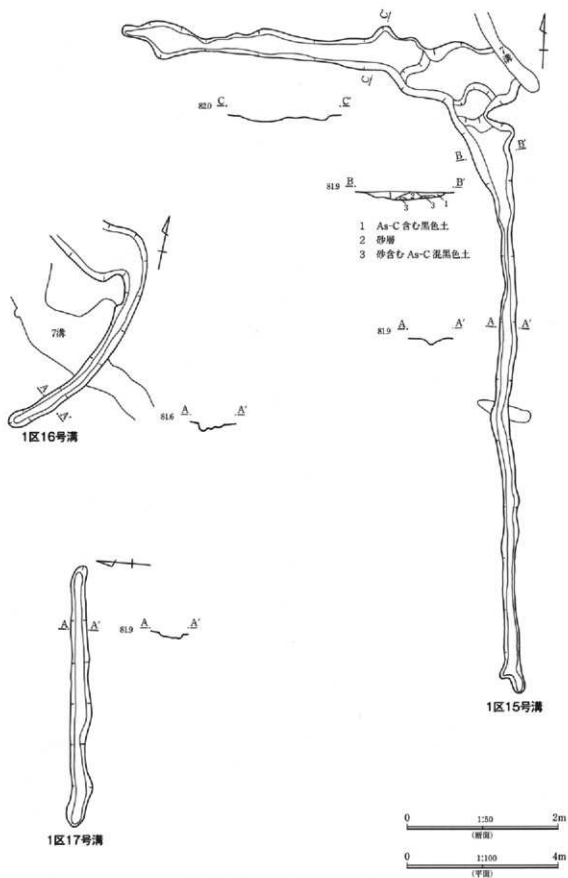
第54図 古墳時代～古代の溝群（4・5区）全体図



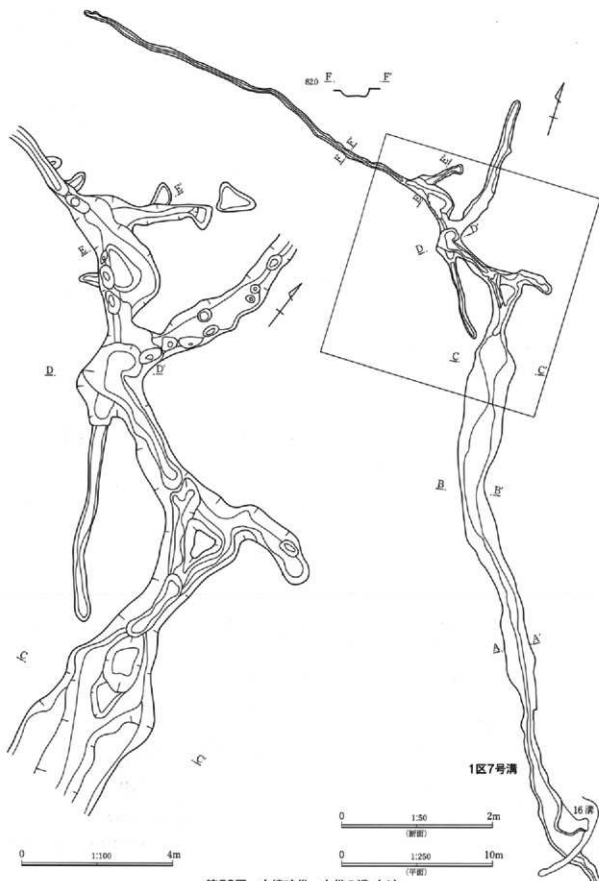
第55図 古墳時代～古代の溝 (1)



第56図 古墳時代～古代の溝(2)

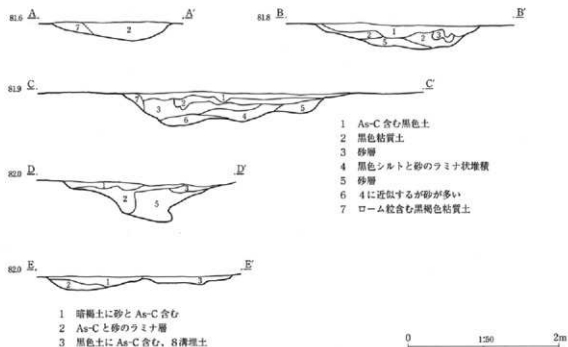


第57図 古墳時代～古代の溝 (3)



第58図 古墳時代～古代の溝（4）

第3章 検出された遺構と遺物



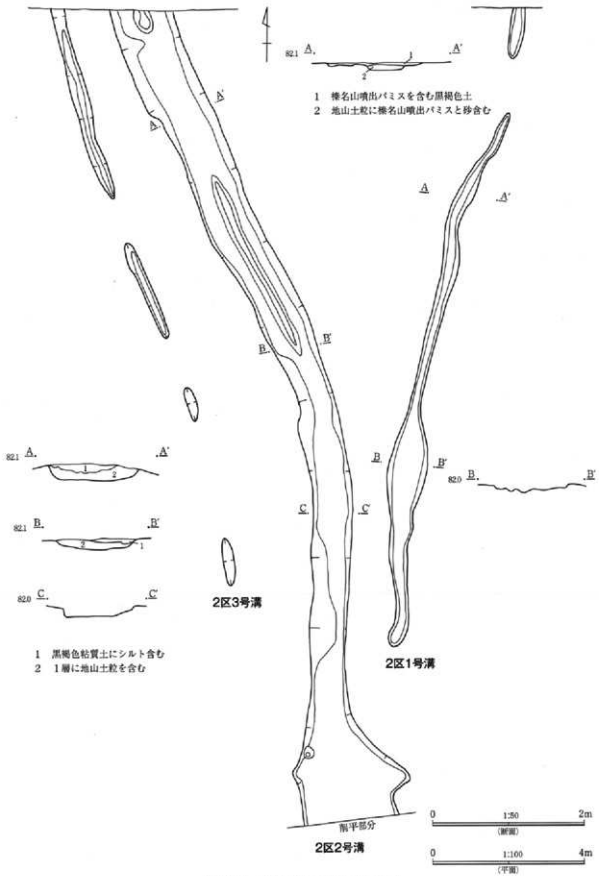
第59図 1区7号溝断面図

3-1区では、先述した耕地区画溝と推定された26号溝（第52・62図）と、西側約25m離れてこれに平行する22号溝（第61図）、東西南北の方眼状に走る21・23～25号溝（第61・62図）が見られる。

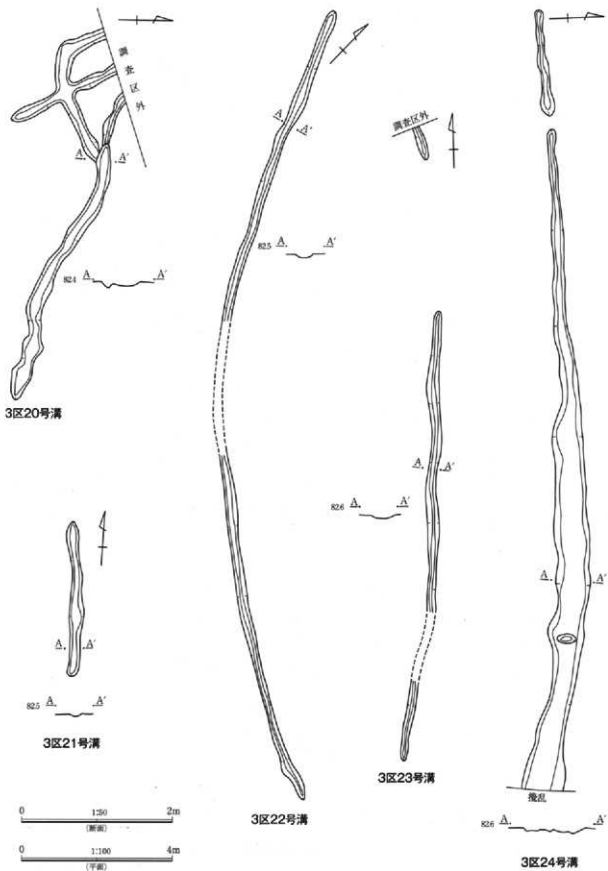
3区20号溝は、北調査区外から延びて湾曲し、同様に南東方向に蛇行して延びる溝と合流する部分と、直線的に南南東方向に走る短い溝で構成される（第61図）が、本来2～3条の異なる溝と考えられる。短いながら南北に走る約3m部分については、東側に18m離れて23号溝が平行するので、これらとともに方眼区画を構成したものでしょう。3区23号溝は、ほぼ南北走向に延び、南端に50cmほどの間隙をあけて、そこから24号溝が東方に約20m延びる。東端では3区26号溝と斜交する位置関係にあるが、交差するの終結するのにかについては、後世擾乱によって確認できなかった。また24号溝と平行して南側には、6m離れて3区25号溝が東西走向で検出されている。これらは、東西南北の方眼区画を基準とした古墳時代1～3期水田のいずれかに伴う灌漑水路と考えられよう。前述したように、この地点での水田遺存状況は不良であり、水田区画と水路群と

の間違はつかみえなかったが、ここで検出された方眼区画溝群には当然のことながら、畦を伴うものであったと想定される。

4区では、北西から南東方向に併走する1～3・8～11号溝が、主に古墳時代3期水田に伴う水路群と考えられる。この水路群の検出部分で同期古墳水田区画が検出できなかったのは、この理由による。特に4区2・3号溝は前述のように、幅1～2mの間隔で平行することから、中央に畦が存在し、その両側溝であったと考えられる。また、10号溝はこれらとはやや走向を異にし、古墳時代3期水田区画を一部切っており、4区2・3号溝とも重複関係にあることから、これ以降の新しい段階の水路と考えべきだろう。4区1号溝はN-35°-Wではほぼ直線的に延び、幅50～80cmを測る。調査区南外へそのまま延長する。調査区南壁では、1～3号溝の土層断面が確認されている（第63図）。そこでは、3号溝がAs-C混土層を切り、一方の1号溝は上位にAs-C混土層が被っている状況がうかがえる。このことから、1号溝は3号溝及びこれと平行する2号溝よりも古い段階に帰属するといえよう。また、4区8号

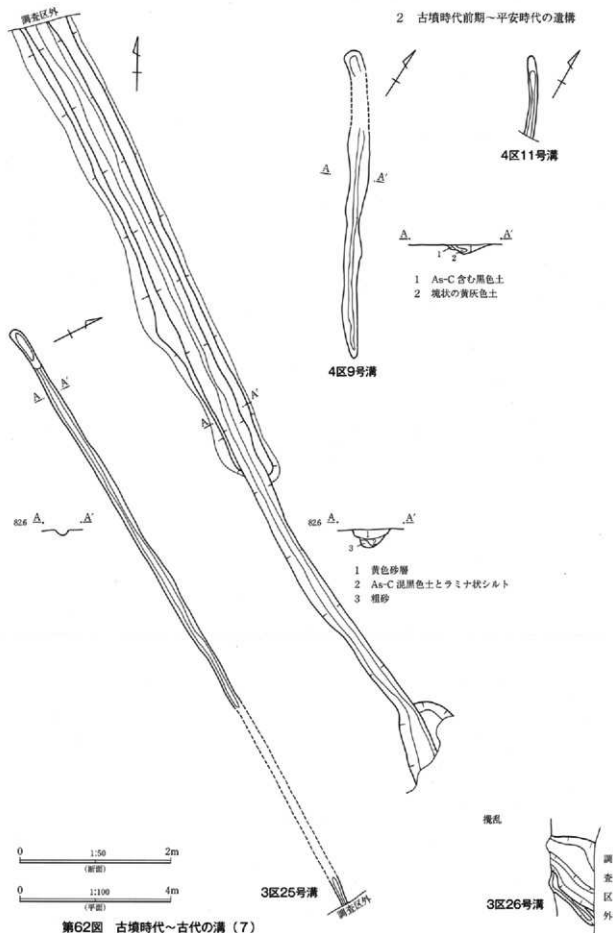


第60図 古墳時代～古代の溝 (5)



第61図 古墳時代～古代の溝 (6)

2 古墳時代前期～平安時代の遺構



第62図 古墳時代～古代の溝 (7)

第3章 検出された遺構と遺物

溝は、1号溝の西側にやや走向をずらして北西-南東に走る。これも1号溝と同様の灌漑水路と考えるとよいだろう。

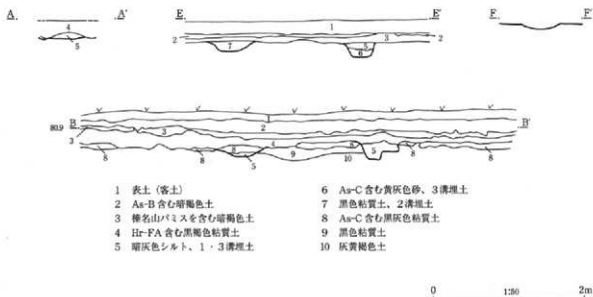
以上の4区で検出された北西-南東に延びる溝群は、いずれも古墳時代水田区画に伴う水路であり、これに平行する畦を伴って、順次その位置をずらした結果と考えられよう。

4区4号溝（第65図 PL26）は、古墳時代3期水田区画の低位から検出されたもので、走向はN-70°-E、幅40cm前後を測る。As-C混土が埋土上位を被って堆積しており、As-C直下水田面では検出されなかったこと、検出された水田区画とは全く異なる走向をしめすことから、古墳時代前期遺構群よりも古いということがいえる。周辺における樽式土器の存在から、可能性としては弥生時代後期段階の水田に伴う水路が考え得るが、本遺跡を含め周辺遺跡からは、未だ弥生時代相当の水田址が検出されていないため、ここではその可否を問わないでおく。

5-1区で検出された2-4号溝は、いずれも南北走向の平行溝で、2号溝を中心にして各々18m、15mの間隔を開ける。ただし、4号溝は西側に大きく湾曲する走向をとるようであり、2・3号溝とは

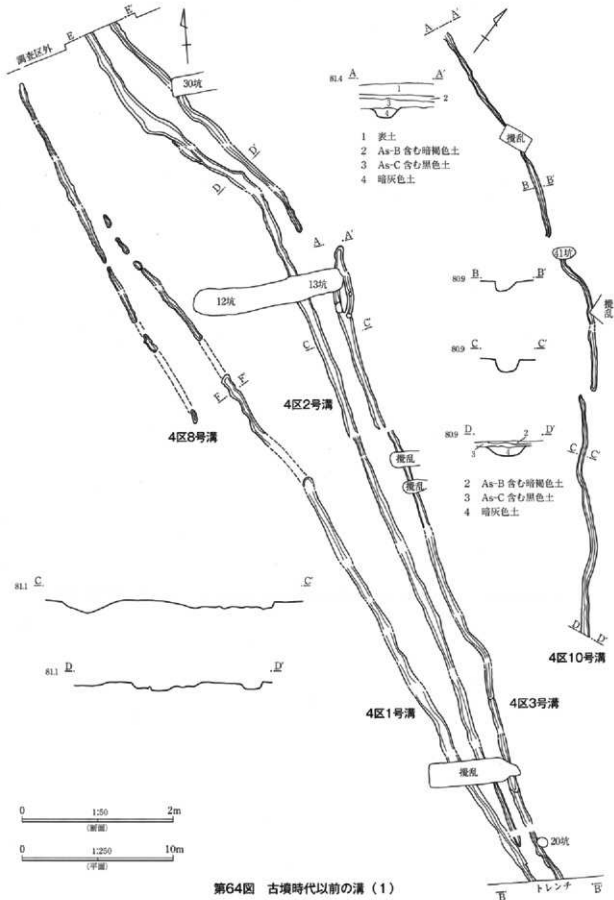
性格の異なることも推測される。この地点では、4-5世紀代と思われるAs-C混土を耕土とする水田畦畔基底が検出されており（第44図）、その水田区画はほぼ東西南北方向の茶盤目状小区画となっているため、2-4号溝はこれに伴う水路とも考えられたが、4号溝の走向が異なること、2号溝の埋土の上位に間層をはさんでAs-C混土が堆積することから、この水田区画に伴うとの即断はできない。特に、2号溝については、3区田面を被っていたAs-Cの堆積も認められないことから、これよりさらに古い段階に帰属する可能性が高い。4区4号溝と同様に弥生時代に遡るものであろう。

5-3区では、1号溝・5-7号溝の4条が検出された。1号溝は東西走向で微高地縁辺の傾斜変換点付近に位置する。幅80cm、深さ50cmの規模でAs-C混土が堆積する。5号溝は南北走向で幅1m、深さ50cmを測りAs-C混土を埋土とする。6・7号溝は南北走向の平行溝で、幅1.2m前後、深さ25-30cmを測る。As-C混土から間層をはさんで50cmほど下位で検出された。時期は確定できないが、地山土粒やシルトが堆積し、弥生時代以前に遡るのはまちがいない。

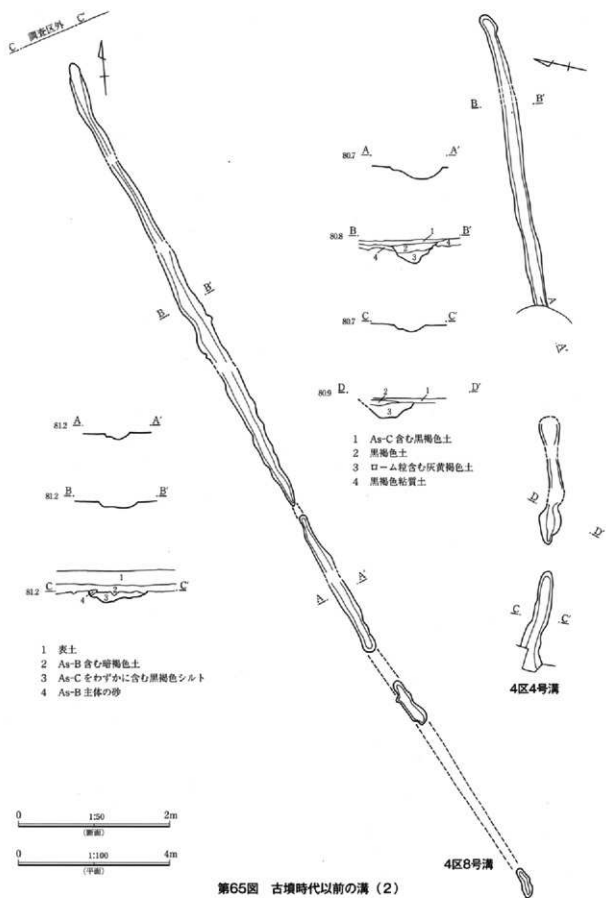


- | | |
|-----------------|-------------------|
| 1 表土(客土) | 6 As-C含む黄灰色砂、3溝埋土 |
| 2 As-B含む暗褐色土 | 7 黒色粘質土、2溝埋土 |
| 3 棒名山バミスを含む暗褐色土 | 8 As-C含む黒灰色粘質土 |
| 4 Hr-FA含む黒褐色粘質土 | 9 黒色粘質土 |
| 5 暗灰色シルト、1・3溝埋土 | 10 灰黄褐色土 |

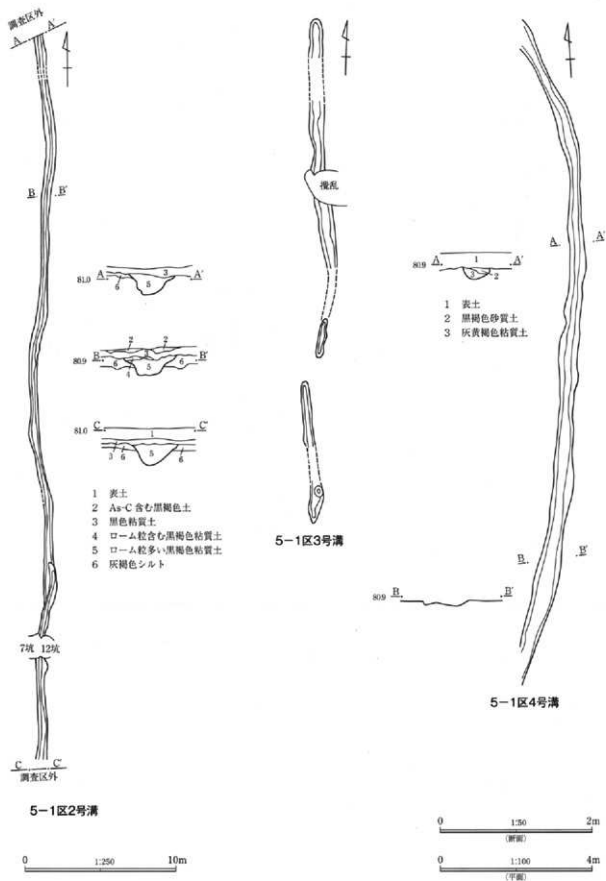
第63図 4区1・2・3号溝断面図



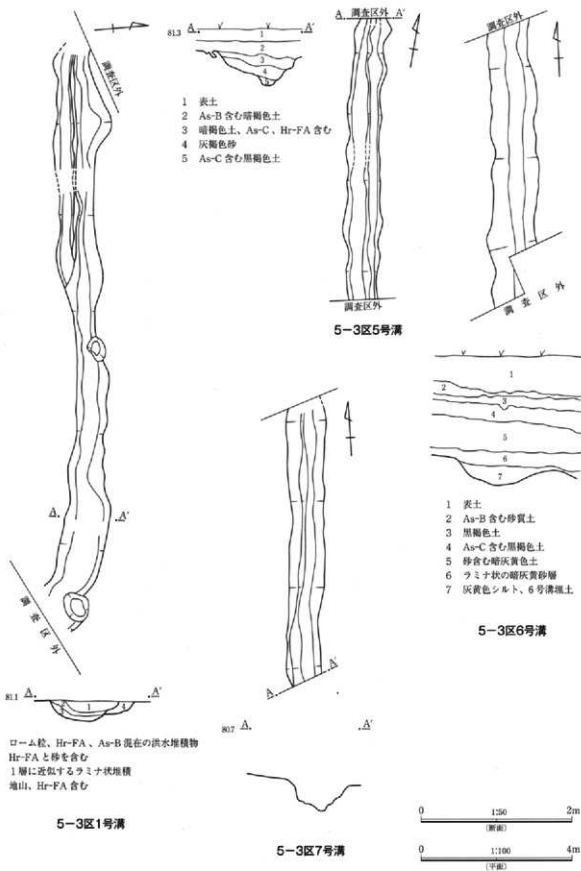
第64図 古墳時代以前の溝 (1)



第65図 古墳時代以前の溝 (2)



第66図 古墳時代以前の溝 (3)

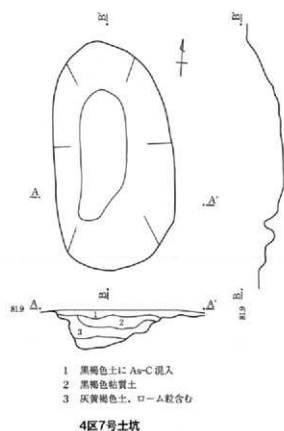


第67図 古墳時代以前の溝 (4)

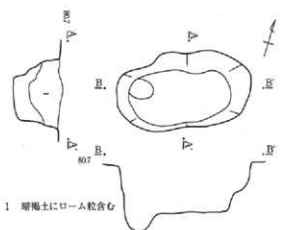
(6)古墳時代以前の土坑 (第68～72図 PL.29)

ここでは、調査面でAs-C混土、すなわち古墳時代前期～中頃(4～5世紀代)の耕土を削除して検出された土坑を扱う。埋土もAs-C混土がそれ以前の堆積土によって埋没している。このことから、個々で扱う土坑は、5世紀代を下限とする、それ以前に属する土坑である。土坑の平面形態によって、長方形ないし楕円形土坑、円形土坑、不定形土坑の三種に分類した。

土坑群は、4区と5区の微高地縁辺部に分布しているが、長方形土坑に主軸を東西南北方向にそろえる共通性はうかがえるが、それ以上の相互関連性は明瞭でない。埋土にAs-C混土が堆積するのは5-1区14号土坑のみで、他はAs-Cより下層の黒色粘質土以下の土層が堆積する。出土遺物、関連遺構、付帯施設等が見られないため、ほとんどが性格不明であるが、5-1区12号土坑は古墳時代前期の小規模な井戸の可能性がある。



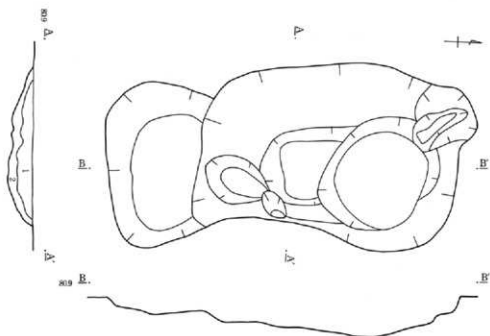
4区41号土坑



4区43号土坑

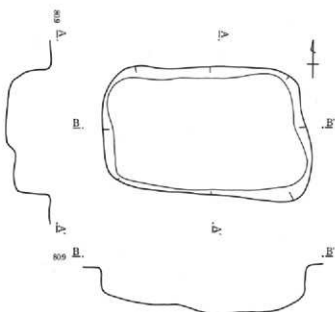
0 1:40 1m

第68図 古墳時代以前の長方形土坑(1)

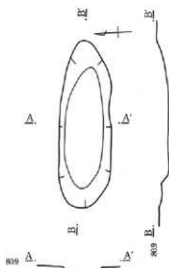


- 1 暗灰色土にローム粒含む
- 2 灰褐色土

5-1区6号土坑



5-1区7号土坑



5-1区11号土坑

0 1:40 1m

第69図 古墳時代以前の長方形土坑 (2)



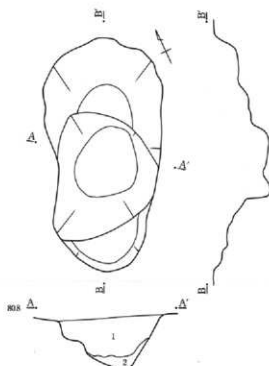
- 1 黒褐色土にAs-C混入
- 2 黒褐色粘質土
- 3 黒色砂質土
- 4 灰黄褐色粘質土
- 5 黒色土、硬質
- 6 灰黄褐色土

4区5-6号土坑



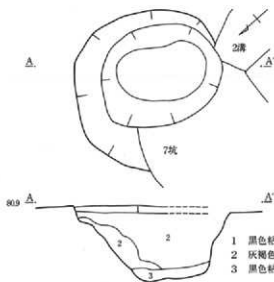
- 1 黒褐色土にAs-Cを含む
- 2 黒褐色粘質土

4区20号土坑



- 1 暗褐色粘質土、ロームを含む
- 2 灰暗褐色粘質土、ラミナ状

4区45号土坑



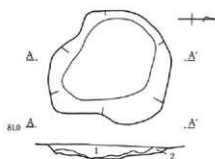
- 1 黒色粘質土
- 2 灰褐色砂質土、ロームを含む
- 3 黒色粘質土

5-1区12号土坑

0 1:40 1m

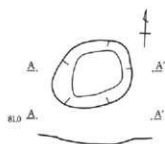
第70図 古墳時代以前の円形土坑(1)

第3章 検出された遺構と遺物



- 1 黒色粘質土
- 2 灰黄褐色シルト質土

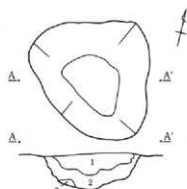
5-1区13号土坑



5-1区15号土坑

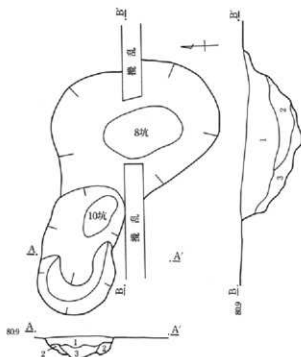
0 1:40 1m

第71図 古墳時代以前の円形土坑 (2)



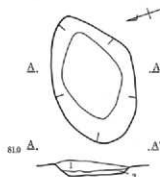
- 1 暗褐色粘質土
- 2 暗褐色粘質土に黒色土粒含む
- 3 灰黄褐色シルト質土

4区42号土坑



- 1 暗褐色粘質土にローム粒含む
- 2 灰黄褐色シルト質土
- 3 地山の土塊流れ込み

5-1区8・10号土坑



- 1 黒褐色土にAs-Cらしきバミス含む
- 2 灰黄褐色シルト質土

5-1区14号土坑

0 1:40 1m

第72図 古墳時代以前の不定形土坑

表 12 古墳時代以前の土坑一覧表

*単位: 幅・深さはcm、長さはm

区	遺構No	グリッド	X軸	Y軸	平面形	幅	長さ	深さ	走向・主軸方向	備 考
4	5号土坑	025	-	575	長方形	95	1.02	26	N-25°-W	6坑と重複
4	6号土坑	025・030	-	575	楕円形	97	(1.42)	32	N-10°-W	5坑と重複
4	7号土坑	030	-	575	楕円形	125	2.4	40	N-8°-W	
4	20号土坑	995	-	595	円形	75	0.86	26	N-31°-W	
4	41号土坑	045	-	520	楕円形	79	1.5	48	N-46°-E	
4	42号土坑	040	-	530	不定形	124	1.45	36	N-59°-W	
4	43号土坑	030	-	530	楕円形	80	1.4	52	N-66°-E	
4	45号土坑	025	-	525	楕円形	124	2.44	56	N-25°-E	
5-1	6号土坑	035・040	-	445	長方形	193	3.94	30	N-1°-W	
5-1	7号土坑	030・035	-	475	長方形	140	2.22	47	E-W	12坑・2溝と重複
5-1	8号土坑	045	-	450・455	不定形	(147)	1.79	58	N-2°-E	10坑と重複
5-1	10号土坑	045	-	455	不定形	80	1.38	23	N-75°-W	8坑と重複
5-1	11号土坑	045	-	455	楕円形	55	1.78	9	N-84°-W	
5-1	12号土坑	030・035	-	470・475	円形	114	1.48	88	N-25°-E	7坑・2溝と重複
5-1	13号土坑	050	-	480	円形	128	1.33	14	N-37°-W	
5-1	14号土坑	045	-	460	不定形	86	1.4	15	E-W	
5-1	15号土坑	050	-	465・470	円形	74	0.9	10	N-55°-E	

(7) ビット (第73図 PL.29・30)

土坑と同様に、As-C混土の低位調査面で検出された古墳時代前期以前の小規模土坑を「ビット」と分類して18基を扱う。各々の詳細については表13を参照されたい。

この時期のビットは、土坑同様に4区と5区の微高地縁辺部に分布しており、他の地区ではほとんど

と見られなかった。人為的な遺構と思われるのは5-1区で検出された39-40-41号ビット(第73図)で、それぞれ1.8m・1.2mの距離で離れた柱列と思われる。ただし、40号ビットは深さ8cmと浅く、他2者が90cmの深さであるのと相異なる。

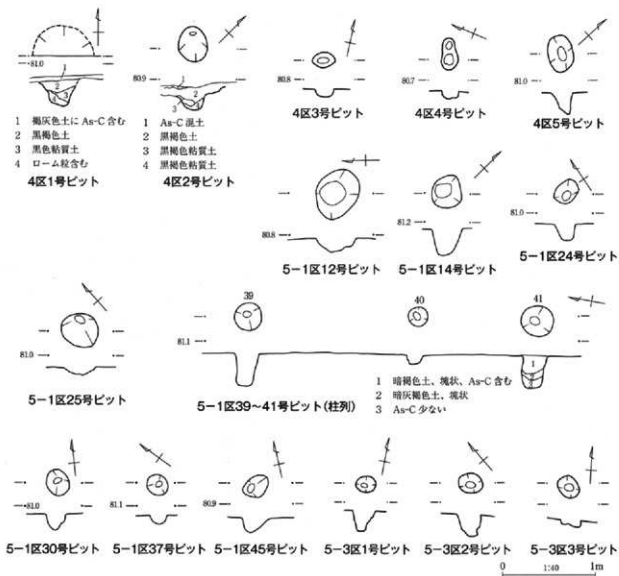
他のビットに関しては性格不明だが、4区3・4号ビットは非人為的なものとも考え得る。

表 13 古墳時代以前のビット一覧表

区	遺構No	グリッド	X軸	Y軸	平面形	径 (cm)	深さ (cm)	走向・主軸方向	備 考
4	1号ビット	005	-	545	円形	(55)	32	E-W	
4	2号ビット	005	-	540・545	円形	37	23	N-44°-W	
4	3号ビット	000	-	540	楕円形	25	7	N-71°-E	
4	4号ビット	000	-	535	不定形	34	9	N-67°-E	
4	5号ビット	040	-	540	楕円形	38	24	N-49°-W	
5-1	12号ビット	040	-	445	楕円形	56	14	N-71°-W	
5-1	14号ビット	065	-	465	四角形	33	28	N-48°-W	

第3章 検出された遺構と遺物

5-1	24号ピット	035 - 420	長方形	25	17	N-70°-E	
5-1	25号ピット	035 - 420	円形	36	8	N-53°-W	
5-1	30号ピット	030 - 420	楕円形	27	16	N-9°-W	
5-1	37号ピット	065 - 460	円形	22	10	N-24°-W	
5-1	39号ピット	070 - 480	円形	28	35	N-8°-W	
5-1	40号ピット	065 - 480	円形	20	10	N-7°-W	
5-1	41号ピット	065 - 480	円形	34	34	N-9°-W	
5-1	45号ピット	050 - 480	楕円形	29	16	N-69°-E	
5-3	1号ピット	105 - 370	円形	22	22	N-78°-E	
5-3	2号ピット	105 - 365	円形	26	23	N-46°-W	
5-3	3号ピット	105 - 366	円形	25	14	N-33°-W	



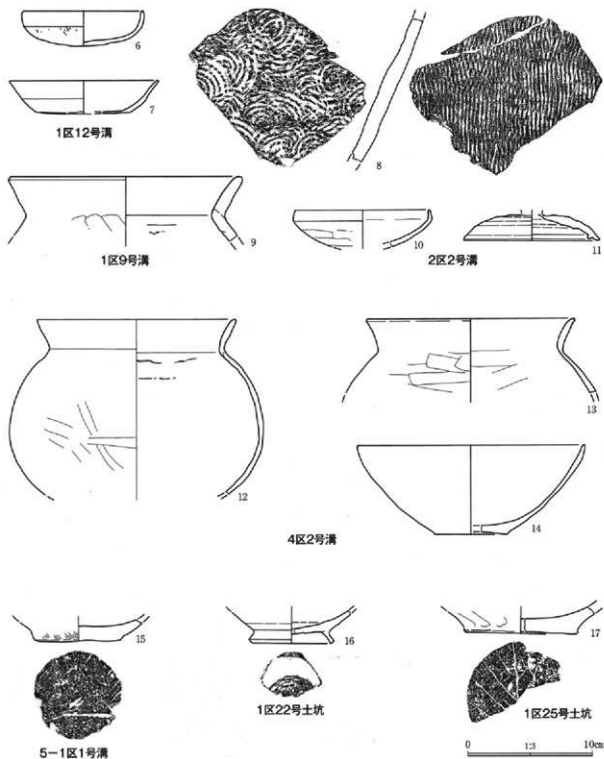
第73図 古墳時代以前のピット

3 弥生時代～古代の遺物

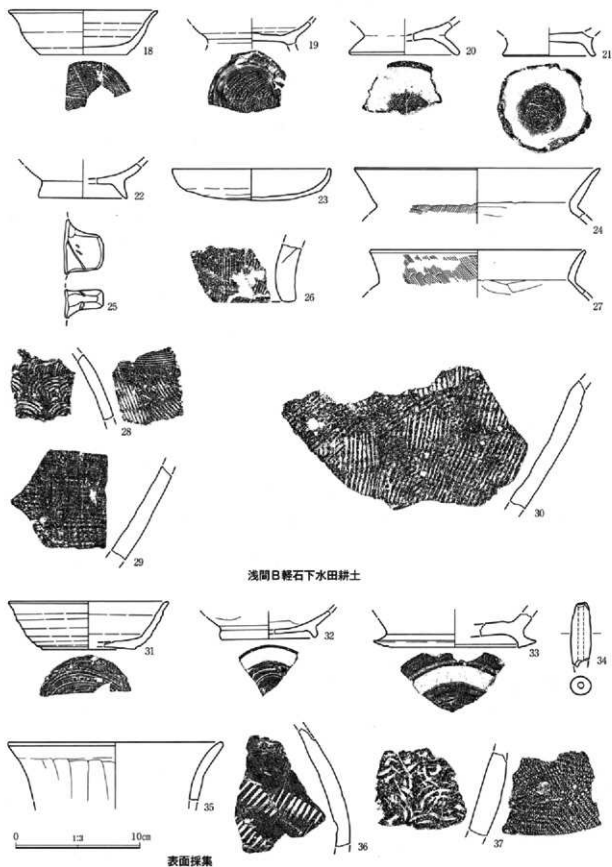
(第74～77図 PL.31・32)

ここでは、遺構の内外を問わず、弥生時代以降で

平安時代以前の出土遺物について記す。弥生土器は主に中期中頃に属し、遺構を伴わない。古墳時代前期のものが4区2号溝と1区25号土坑から、7世紀後半～8世紀代の土器類が1区9・12号溝、2区2



第74図 古墳時代～古代の遺物(1)



浅間日軽石下水田耕土

第75図 古墳時代～古代の遺物 (2)

表14 古墳時代～古代の遺物観察表

墳区番号 図版番号	種別 形状	出土位置	部位 形状	計測値 (cm)	①胎土 ②色調	成・整形技法の特徴	備考
第74区-6 PL31	土師器 杯	1区 12号溝	口～底 1/4	口 (94) 高 27	①輝石の粗砂多い 芝褐色	口縁横ナデ、内面ナデ、底面くぼむ。底外面は削り、腰部に縦しわ残す。	
第74区-7	土師器 杯	1区 12号溝	口～底 1/4	口 (118) 底 27	①白岩片・石英・輝石 の粗砂多い芝褐色	口縁横ナデ、内面ナデ、底面くぼむ。底外面は削り。	
第74区-8 PL31	須恵器 鉢	2区	胴部破片	口・底 高 -	①黒色粒・白色片岩 の粗砂多い芝褐色	外面は浅い平行叩き目、内面は半径約3cmの青海流文。	
第74区-9	土師器 杯	1区 9号溝	口縁部破片	口 (184) 底・高 -	①赤粒・白岩片・輝石 の粗砂多量	口縁横ナデ、内面は粗い磨き。腰部外面は縦削り。	
第74区-10	土師器 杯	1区 2号溝	口縁～底 部片	口 (108) 底・高 -	①片岩粒を含む 芝褐色	口縁～内面横ナデ、底外面は同心円状削り。	
第74区-11 PL31	須恵器 鉢	2区	1/2	口・高 底 10.6	①白岩片の粗～細砂 多い芝褐色	右回転軸轆成。口縁内面のかえりはヘラ沈線による。上面は削り残ナデ。	
第74区-12 PL31	土師器 妻	4区 2号溝	口縁～胴 部1/3	口 15.6 底・高 -	①輝石・赤色粒・白岩 片の粗砂多量	胴外面は狭小口による斜位ナデ、内面は粗い磨きと思われる。	
第74区-13 PL31	土師器 妻	4区 2号溝	口縁～胴 部1/3	口 16.3 底・高 -	①安山岩系の細粒～ 粗砂多い芝褐色	口縁横ナデ、胴内外面は浅い削り。	
第74区-14 PL31	土師器 鉢	4区 2号溝	1/3	口18.0 径5.7 高7.0	①白色のバミス、岩 片を砕いて混入②赤 粒	内面は粗い磨き、外面は剥離しやすい。	在来弥生系
第74区-15 (裏)	土師器 1号溝	5-1区	底部	口・高 底 6.8	①白岩片の細粒、片 岩粒を含む②赤粒	底面削りと板小口ナデ。腰部刷毛目。	
第74区-16	須恵器 高台碗	1区 22号土坑	底部1/3	口・高 脚径 (6.2)	①白岩片・黒色粒の 細粒を含む②赤	底面に糸切り残残す。	
第74区-17	土師器 鉢	1区 25号土坑	底部1/2	口・高 底 (9.0)	①白岩片・石英・赤 粒の粗砂多い②赤	内外面とも削り。	木葉底 古墳前
第75区-18	須恵器 杯	3-1区 B下水田面	口～底部 破片	口11.8径3.5 高5.8	①白岩片・石英の細 粒を含む②赤	右回転。糸切り後周縁の一部削り。	
第75区-19	須恵器 高台碗	1区 B下水田面	底部2/3	口・高 底 (6.9)	①片岩面層目立つ ②赤粒	回転糸切り後付高台。	
第75区-20	土師質 高台碗	1区 B下水田面	底部1/3	口・高 底 (8.4)	①白岩片・石英の粗 粒、輝石粗砂多量	高台接合後全体にナデ。	酸化焙焼成
第75区-21	土師質 高台碗	3-1区 B下水田面	底部	口・高 底 (7.4)	①石英・白岩片の粗 粒～細砂多量	高台接合後全体にナデ。	酸化焙焼成
第75区-22	土師質 高台碗	4区	底部1/2	口・高 脚径 (7.0)	①赤色粒・白岩片・輝 石の粗砂多い②赤	回転糸切り後丁寧なナデ消し。	酸化焙焼成
第75区-23 PL31	土師器 杯	4区000 -525テラッド	1/4	口 (142) 高 2.5	①白岩片・輝石・赤 色粒の粗砂多い②赤	口縁横ナデ、内面に凹凸残す。底外面は一定方向の削り。	
第75区-24	土師器 妻	4区	口縁部片	口 (194) 底・高 -	①バミス・白岩片・輝 石の粗砂多量	口縁横ナデ、胴外面刷毛目、胴内面ナデ。	
第75区-25 (裏)	4区	把手部	口・底 高 -	①輝石・赤色粒の粗 ～細砂多量②赤	浅い刷毛目整形。	先端摩滅	
第75区-26 PL31	埴輪 (内輪)	3-1区	基部破片	口・底 高 -	①白岩片・石英の粗 粒、輝石粗砂多量	外面はやや浅く細かい刷毛目、内面ナデ。基部面は未調整。	
第75区-27	土師器 妻	3-2区	口縁部片	口 (17.0) 底・高 -	①白岩片・石英・輝 石・チャート粗砂 多量	外面は刷毛目、口縁内面横ナデ、胴内面は削り。	古墳前期
第75区-28 (裏)	須恵器 鉢	3-1区	胴部破片	口・底 高 -	①白岩片の粗～細砂 多い②赤	平行叩き目の上へ平行磨目文、内面青海流文。	
第75区-29	須恵器 大甕	5-3区 As-B下	胴部破片	口・底 高 -	①石英・チャート・白 岩片の粗砂多い②赤	外面に格子目叩き、内面は剥離で不明。	酸化焙焼成
第75区-30 PL31	須恵器 大甕	5-3区As-B 下黒色土	胴下半部 破片	口・底 高 -	①白岩片・赤色粒・石 英粗粒～粗砂多量	外面に平行叩き目、内面は剥離で不明。	酸化焙焼成
第75区-31 PL31	須恵器 杯	5-1区	1/4	口12.6径3.7 高7.6	①長石・黒色粒の粗 砂を含む②赤	右回転糸切り後未調整。底部縁がやや突出する。	ややあまい還元 焙焼成
第75区-32	灰輪陶器 碗	1区	底部1/4	口・高 脚径 (7.5)	①残存物少なく、全 室母粒を含む②赤	軸付け削り。輪は薄く不均一。	大甕2期 (10c 前半)
第75区-33	須恵器 短頸甕	1区	底高台部 片	口・高 底 (12.8)	①微細な黒色粒、白 色岩片等を含む②赤	全体に丁寧なナデ仕上げ。	
第75区-34 PL31	土師 鉢	1区	一部欠	長さ (5.1) 径1.6孔径 0.5重量11.8		全体に丁寧なナデのみ。穿孔は轆轤による。	
第75区-35 (裏)	土師器 破片	1区	口縁部片	口 (17.0) 底・高 -	①白岩片・輝石・石英 の粗粒～粗砂多量	口縁横ナデ後、胴外面縦削り。内面ナデ。	
第75区-36	須恵器 妻	1区	胴部破片	口・底 高 -	①黒粒・白岩片の粗 砂を含む②赤	外面は浅い平行叩き目、内面は浅いヘラナデ。	
第75区-37	須恵器 妻	1区	胴部破片	口・底 高 -	①白岩片・黒色粒の 粗砂多量②赤	胴目状刻みによる細かい格子目叩き、内面は青海流文。	

第3章 検出された遺構と遺物

表15 弥生土器観察表(1)

採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値 (cm)	①胎土 ②色調	取・整形技法の特徴	備考	
第76図-38 PL32	細頸壺	1区	口縁部破片	口 底 高	- - -	①白岩片と輝石粗砂 多い ②にぶい暗褐色	内面ナデ、外面は荒れていて整形不明。	
第76図-39	細頸壺	3-1区	口縁部破片	口 底 高	- - -	①白岩片、安山岩片、 黒岩片多い ②にぶい 褐色	幅1cmの粘土帯による折り返し口縁に単筋 斜縄文(RL)を施文。頸部は無文。	
第76図-40 PL32	甕	1区	口縁部破片	口 底 高	- - -	①安山岩片、パミスの 粗～細砂 ②暗褐色	口唇部は角筒状の面取り。口縁下に無筋 (L)の縄文を施す。内面は浅い斜縄割り。	
第76図-41 PL32	甕	1区	口縁部破片	口 底 高	- - -	①白岩片と石英粗砂 目立つ ②暗灰褐色	外反する丸縁にへつ割み、口縁下に1条の 沈線(幅2mm)、その下に5mm間隔の2本 平行沈線で斜線を描く。三角文構成か。	
第76図-42 PL32	鉢	1区	口縁部破片	口 底 高	- - -	①白岩片、輝石、石 英等の中～細砂 ②褐色	口唇のみ内摩。外面に縄文(RL?)施文後、 埴物表状具による曲線的沈線区画文。	
第76図-43 PL32	甕	1区	胴部破片	口 底 高	- - -	①汚れた白岩片、石 英、雲母片を含む ②黒褐色	縄文(RL)を地文として、8mm間隔の2条 沈線で横線、下位に三角文を描く。沈線施 文具は2.5mm幅の繊維質棒状具。内面斜割り。	43と同一の可能 性あり
第76図-44 PL32	甕	1区	胴部破片	口 底 高	- - -	①43と同質 ②黒褐 色	縄文(RL)を地文として、5mm間隔の2条 沈線で三角文状の斜線を描く。沈線施文具 は2.5mm幅の繊維質棒状具。内面斜割り。	
第76図-45 PL32	甕	1区	胴部破片	口 底 高	- - -	①43と同質 ②にぶ い暗褐色	縄文(RL)を地文として、2条沈線で斜線 と横線文を描く。沈線は5～7mm間隔で、 幅2～2.5mm。内面は削り。	
第76図-46 PL32	(甕)	1区	胴部破片	口 底 高	- - -	①白岩片、輝石、石 英等の中～細砂 ②にぶい淡褐色	上位に4条沈線による横線、下位に2条沈線 で三角文を描く。沈線間隔は3mm前後。内 面は斜～横割り。	
第76図-47 PL32	(鉢)	1区	胴部破片	口 底 高	- - -	①43と同質 ②にぶ い褐色～灰褐色	縄文(LR)地文に、幅2mmの1条沈線で花 弁状の文様を描く。埴り消しは行わない。 内面は丁寧なナデ。	
第76図-48 PL32	(甕)	1区 11号溝	胴部破片	口 底 高	- - -	①白岩片、石英、黒 色粗の細砂～粗砂多 い ②暗褐色	幅4mmの半軟竹管状具で縦区画を抜き、そ の間を横位の弧線文で埋める。内外面ナデ。	
第76図-49 PL32	壺か甕	1区 7号溝	胴部破片	口 底 高	- - -	①白岩片、安山岩片 の粗砂 ②灰褐色	2条沈線による斜線あるいは横線を複数施 文。	
第76図-50 PL32	(甕)	1区	胴～胴部 破片	口 底 高	- - -	①白岩片、輝石、石 英等の中～細砂 ②暗褐色	2条平行沈線(4mm間隔)を複数重ねて重 複角文かつの字意文を描く。	
第76図-51 PL32	壺か甕	1区	胴部破片	口 底 高	- - -	①白岩片、安山岩片 の粗砂多い ②暗灰 色	2条平行沈線(4mm間隔)を複数重ねて斜 縄文か羽状文を描く。	
第76図-52 PL32	壺か甕	1区	胴部破片	口 底 高	- - -	①白岩片、安山岩片 の粗砂多い ③暗褐 色	2条沈線による斜線。	
第76図-53 PL32	(甕)	1区	胴部破片	口 底 高	- - -	①安山岩片、輝石の 粗砂 ②にぶい灰褐 色	1条の沈線で斜線を描く。文様構成不明。	
第76図-54 PL32	(甕)	1区	胴部破片	口 底 高	- - -	①雲母片、輝石、白 岩片含む ②暗褐色	2～3条の平行する沈線を描く。内面はナデ。	
第76図-55	(甕)	1区	胴部破片	口 底 高	- - -	①白岩片、石英、チ ャート等 ②暗褐色	放射状に開く複数沈線。沈線は浅く幅2mm 弱。	
第76図-56	(甕)	1区	胴部破片	口 底 高	- - -	①石英粗砂多い ②黒褐色	1条の沈線で横線を描く。	
第76図-57	壺か甕	1区	胴部破片	口 底 高	- - -	①白岩片、安山岩片 多い ②褐色	2条平行沈線で縦位施文。	

表16 弥生土器観察表(2)

標図番号 図版番号	機 類 器 種	出土位置	部 位 残 存	計測値 (cm)	①胎土 ②色調	成・整形技法の特徴	備考
第76図-58	(壺)	1区	胴部破片	口 底 高	①安山岩の中～細砂 ②橙	半截竹管状具による2条平行沈線を描く。	
第76図-59	壺か甕	1区	胴部破片	口 底 高	①白岩片、石英、黒 色粒の細礫～粗砂多 い ②にぶい橙	半截竹管状具による2条平行沈線で斜線を 描く。	
第76図-60 PL32	壺か甕	1区	胴部破片	口 底 高	①白岩片と安山岩片 多い ②暗灰褐色	2条平行沈線(4mm間隔)で条痕文状の複 数斜線を描く。内面削り。	
第76図-61 PL32	壺か甕	1区	胴部破片	口 底 高	①白岩片と安山岩片 多い ②暗灰褐色	2条平行沈線(3mm間隔)で条痕文状の複 数斜線を描く。内面削り。	60と同一個体か
第76図-62	壺か甕	1区	胴部破片	口 底 高	①白岩片多い ②橙	縄文(RL)地文に刺突を施す。	
第76図-63 (裏)	1区	胴部破片	口 底 高	①石英、輝石の粗砂 多い ②灰褐色	無筋縄文(Rか)を施文。	内面剥離	
第76図-64 PL32	壺か甕	1区	胴部破片	口 底 高	①輝石、石英等の粗 砂多い ②灰褐色	無筋縄文(Lか)に曲線的な沈線を描く。	
第76図-65	壺か甕	1区	胴部破片	口 底 高	①石英、チャート等 の細礫と粗砂 ②暗 灰褐色	無筋縄文(Lか)を施す。	
第76図-66	壺か甕	1区	胴部破片	口 底 高	①白岩片、チャート、 雲母、輝石の粗砂 ②明橙	1条の浅い沈線が見られる。	
第76図-67	壺か甕	1区	胴部下位 破片	口 底 高	①白岩片、チャート の細礫～粗砂多い ②灰褐色	内外面ともナデ。	
第76図-68	壺か甕	1区 7号溝	胴下位～ 底部破片	口 底 高	①安山岩片、石英、 輝石の粗砂多い ③黄褐色	内外面ともナデ。	
第76図-69 PL32	高杯か台 付鉢	1区	脚部破片	口 底 高	①白岩片、チャート の細礫～粗砂多い ②黒褐色	縦長楕円形の遺かし。裾外面に斜縄文(RL)、 内面削り。	

号溝から出土している。詳細は表14～表17による。

本遺跡で出土した弥生土器は、いずれも小破片で器形の不明なものが大部分だが、細い沈線による区画と縄文施文によって特徴づけられ、その文様構成や器形の特徴から、弥生時代中期中頃に属するものを主体とする。中期中頃と思われる土器は、調査区の中央に位置する細長い微高地西側の低地部(1区)から出土しており、数個体分が破砕片の状態で散在している。数量が少ないため分布傾向は不明確だが、これらは、東側微高地から廃棄されたものと想定される。

器種は壺・甕・鉢・台付鉢(高杯)が見られ、特に透かしの入った台部をもつ鉢(第76図-69～71)

は中期中葉以前で散見する。42と47にみる沈線区画文と縄文地文の組み合わせは、縦位あるいは器面全体に展開する文様構成から東北地方南部の中期中葉段階の土器に共通する要素であろう。北関東においても、中期前半～中葉にかけて小型器種にしばしば見ることが出来る。また59～61は2条平行沈線ながら条痕文状に施文することから、中期でも中葉ころのものと考えたい。

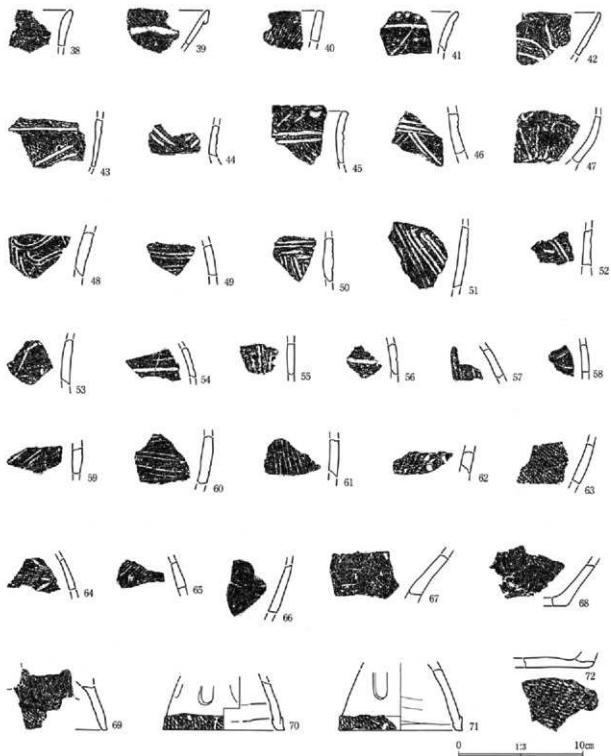
2条平行沈線による文様構成は、中期後半の栃木県の御新田式にも見られるが、本遺跡例では集合する横線文帯や刺突文列がほとんど見られないことから、御新田式とは異なるとみるべきだろう。中期中頃に位置づけるならば、群馬県西部の神保富士塚式

第3章 検出された遺構と遺物

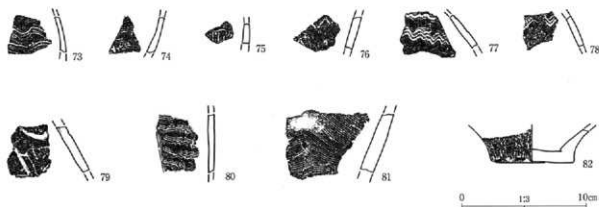
や南東部の阿久津宮内遺跡例に相当する時期のもの
と捉えておく。

また、櫛播波状文(第77図-77・78)も見られる
ので、竜見町式ないしは後期の樽式も少数混在して

いる。なお80は、十王台式か二軒屋式の甕の頭部片
と思われる。81は甕ないしは壺と思われる胴下半部
破片で、浅く細かい条痕が縦羽状に施されており、
中期前半～前期に遡りうる例として注意される。



第76図 弥生土器(1)



第77図 弥生土器(2)

表17 弥生土器観察表(3)

標本番号 図版番号	種類 器種	出土位置	部位 残存	計測値 (cm)	①胎土 ②色調	成・整形技法の特徴	備考
第76図-70 PL32	高杯小台 付鉢	1区	台部1/4	口 - 底(96) 高 -	①白岩片、チャートの細礫～粗砂多い ②灰黄褐色	縦長楕円形の透かしを2孔1組で5～6カ所に穿つ。唇部は薄い粘土帯を巻き、斜縄文(RL)を施す。内面滑り。	
第76図-71 PL32	高杯小台 付鉢	1区	台部1/4	口 - 底(98) 高 -	①白岩片、チャートの細礫～粗砂多い ②灰黄褐色	縦長楕円形の透かしを2孔1組で穿つ。唇部は薄い粘土帯を巻き、斜縄文(RL)を施す。70と同一個体か 内面滑り。	70と同一個体か
第76図-72	壺か爨	1区 9号土坑	底部1/2	口 - 底(156) 高 -	①黒岩片岩粒多い ②暗褐色	底面に細目の刷文。	
第77図-73 PL32	(壺)	5-3区	胴部破片	口 - 底 - 高 -	①白岩片、輝石等の粗砂 ②中～細砂 ③灰褐色	斜縄文(RL)施文後、半截片管状具による波状沈線で区画する。	
第77図-74	壺か爨	5-3区	胴部破片	口 - 底 - 高 -	①白岩片、輝石の粗砂多い ②にぶい橙	単部斜縄文(RL)を施文。内面ナデ。	
第77図-75	壺か爨	5-3区 105-370グリッド	胴部破片	口 - 底 - 高 -	①石英、輝石、白の細砂 ②橙	単部斜縄文(RL)を施文後、細い1条沈線で波状文を描く。	
第77図-76 (壺)		5-3区 105-370グリッド	胴部破片	口 - 底 - 高 -	①安山岩片、石英、輝石、チャートの粗砂 ②にぶい橙	上位にS字状結節文を1条めぐらし、下位に1条沈線による扇面状文を描く。	
第77図-77 PL32	壺か爨	5-3区	胴部破片	口 - 底 - 高 -	①白岩片、輝石、石英の細砂 ②灰褐色	3条単位の柳葉波状文が間隔を開けて2段見られる。内面刷毛目。	
第77図-78	壺か爨	5-3区 105-370グリッド	胴上位破片	口 - 底 - 高 -	①白岩片、輝石、石英の細砂 ②にぶい黄褐色	3条単位の柳葉波状文を施す。内面刷毛目。77と同一個体か	77と同一個体か
第77図-79 PL32	壺か爨	5-3区	胴部破片	口 - 底 - 高 -	①白岩片、石英、長石、輝石等の粗砂 ③暗褐色	やや太い沈線(幅3～4mm)で曲線的な文様を描く。内面は丁寧なナデ。	
第77図-80 PL32	爨	3-2区	胴部破片	口 - 底 - 高 -	①白色鉱物、黒岩片、輝石の粗砂 ②にぶい灰褐色	不揃いな6本単位の櫛状具で、垂下する刷線(スリット)を描き、その間を5段以上の横位波状文で埋める。内面ナデ。	土王台式か二軒型式
第77図-81 PL32	壺か爨	4区	胴下位破片	口 - 底 - 高 -	①白岩片、石英、輝石等の中砂多い ②にぶい灰褐色	口の細かい板小口で板羽状構成の条紋を施す。	
第77図-82	壺か爨	3-1区	底部2/3	口 - 底 6.6 高 -	①白岩片、輝石、チャートの粗～細砂 ②にぶい黄褐色	外面は縦位、内面は横位の刷毛目。底面は滑り。	

4 縄文時代の遺構と遺物

(1) 集石遺構 (第78～81図 PL.30・33)

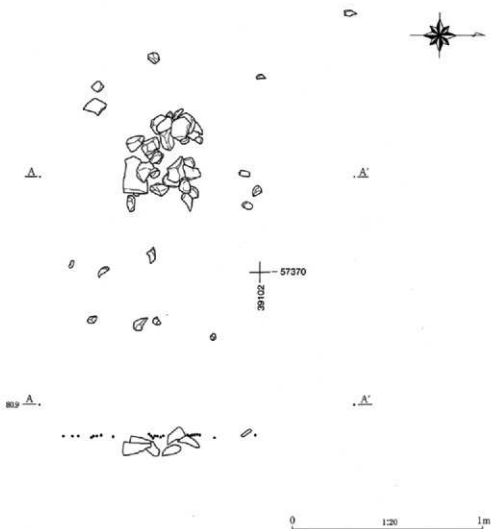
5-3区の黄褐色土面で検出された。20～5cm大の安山岩角礫40点ほどが1カ所に集中している。礫の分布範囲は、南北1m、東西1.5mの範囲に拡がり、大きめの礫30点ほどは中央の40×30cmの範囲でまとまっていた。垂直分布では、15cmの深さのなかに収まっている。このことから、本来直径40cm前後の浅い凹みか、ないしはほとんど平坦な場所に存在したと考えて良さそうだ。

出土した礫はいずれも故意に割られていて、本来は同一の粗粒安山岩による石製品であったと思われる。図示した礫4点は、そのうちの大型破片である。

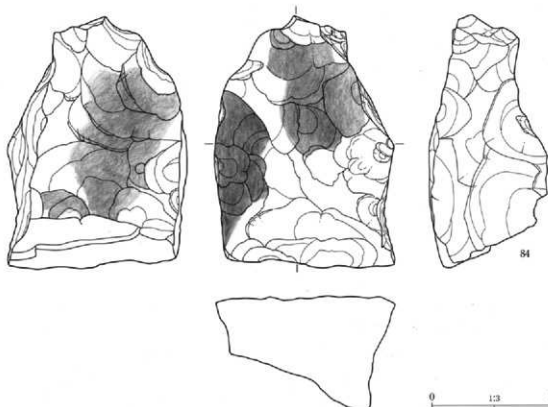
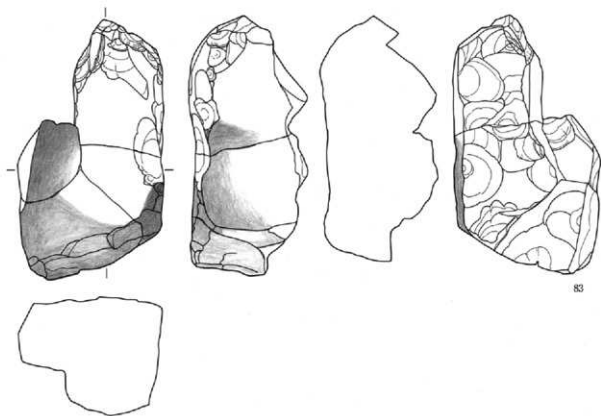
83の右下部が方形に打割整形されていること、84は表裏面に使用痕と思われる炭化物付着が見られることから、本来の形状は、9～10cmの厚さで方形に整形された石製品であったと推測される。完形に復しえないので、大きさについては不明であるが、破片の数量と大きさから一辺50cmを越える可能性が考えられる。

礫表裏面に見られる炭化物は、同面に観察される加熱による色変状況から、炎による被熱をうけた可能性が高い。割れた断面に被熱痕や炭化物付着がほとんど見られないので、火熱に関わる使用が終了して以後、故意に割って廃棄されたと想定できよう。なお、焼土や炭化物等については検出できなかった。

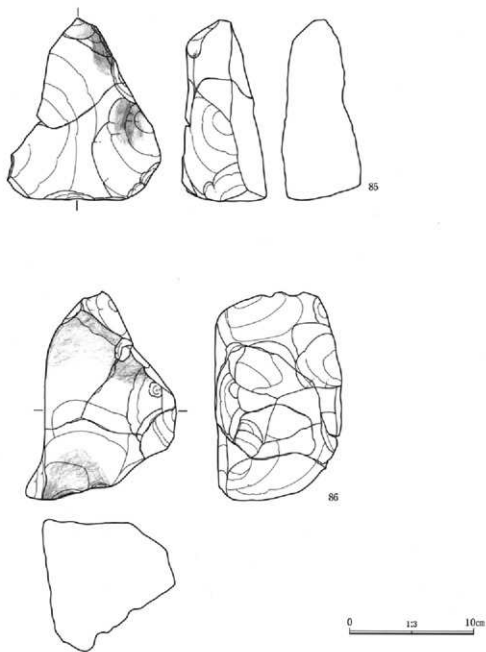
礫とともに出土したのは、羽状縄文系土器片8点



第78図 縄文時代の5-3区1号集石遺構



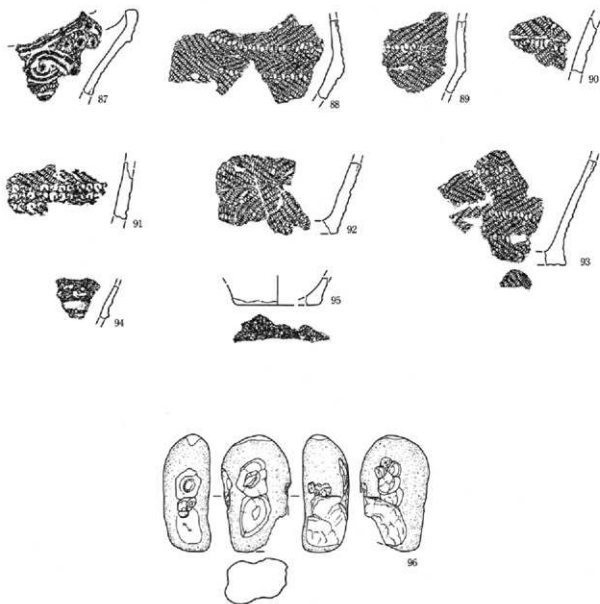
第79回 集石遺構出土破碎岩片(1)



第80図 集石遺構出土破碎岩片(2)

(87～94)と、凹み石1点(96)である。87は波状口縁部片で、地文に前々段多条の単節羽状縄文、半截竹管による3本平行沈線で口縁に沿って、及びその下部にワラビ手状の文様を描く。波頂部はV字状の切り込みを施し、内面には粘土粒の突起を付す。波頂部に1、その下位に3、口縁傾斜部に5、ワ

ラビ手状文に2箇所粘土粒突起を付す。88～90・92・93は体部中位の屈曲部から底部にいたる破片で、撚り方向の異なる2種の縄(前々段3条)を結束(第1種)して羽状縄文を施す。93は底面にも縄文を押捺する。91は3段のループ文を廻らす。94は器壁の薄い体部小破片で、一部に押圧を加えた微隆



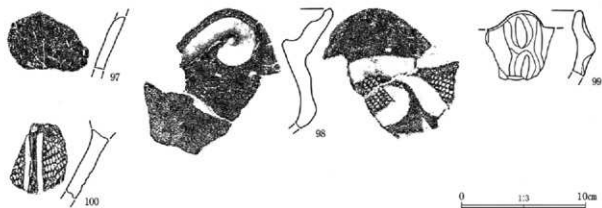
第81図 集石遺構出土縄文土器及び石器

起線を横位に付す。いずれも胎土に繊維を含み、94
 以外は内面を研磨している。88・89・93は胎土と色
 調、文様の近似性から同一個体の可能性が高い。

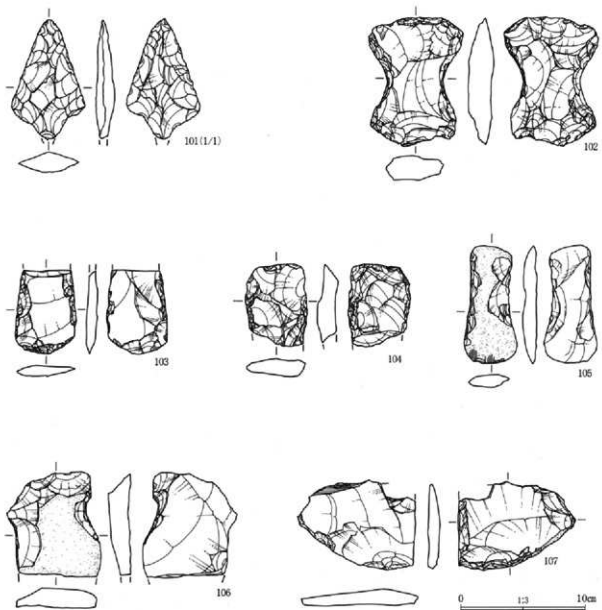
88・89・92・93は羽状縄文帯が狭く、菱形構成が
 不明瞭、体部屈曲が強く外反気味の器形という特徴
 から、花積下層式と捉えたい。94は小片で文様も不
 明瞭だが花積下層式に伴うと考えておきたい。87・

90・91は関山I式である。また、95は古墳時代前期
 の壺底部片で、混入品と思われる。

96は粗粒輝石安山岩の凹み石で、長さ9cm、幅5.5
 cm、厚さ3.5cmを測る。表裏面と両側面に揃り針状
 断面の凹みがあり、敲打痕とともに摩擦痕も残る。
 上面と下面は自然面をそのまま残し、若干摩擦痕が
 見られる。



第82図 遺構外出土縄文土器



第83図 遺構外出土石器

(2) 遺構外出土遺物 (第82・83図 PL33)

97は1区出土、無文の体部片。中期～後期であろう。98は4区出土の口縁部片で、山形で内面に渦巻き文を描く口縁突起をもち、口縁文様帯には太い沈線と隆帯で退化した渦巻き文を描く。地文は斜縄文(LR)を縦回転施文。加曽利E3式であろう。99は2区から出土した口縁片で、小さな突起に8の字状貼付文を付す。堀之内1式。100は縄文地文(LR)に細い隆起線を垂下させ両側を細く深い沈線で区画する。上位には横位隆帯のナデが見られる。加曽利EⅠ～Ⅱ式であろう。

石器は7点を掲載した。詳細は表18に記した。101は灰白色チャート製の凸基有茎タイプで基部を欠損する。両面からの押圧剥離で形状を整えているが、基部整形が左右非対称。102は分銅型打製石斧で縦

断面では片面が反る形態。刃部は端がわずかに摩滅、挟り部には摩耗による光沢が見られる。103・104は撥型か短冊型の打製石斧折損品で、一次剥離で比較的薄い板状剥片を取り出し、周縁への二次剥離で整形、刃部形成を行っている。105は小型の短冊形打製石斧で、自然面を残す剥片に両測縁への簡単な整形剥離をおこなう。刃部は一次剥離のまま、主軸方向の細かい擦痕が認められる。106は片面に自然面を残し、周縁に裏面からの粗い整形剥離を行った打製石斧未製品か欠損品の再加工品と考えられる。両測縁に挟り部整形の細かい剥離。上縁は裏面からの剥離で刃部を作り出す。107は楕円形の横長剥片を利用した2次加工剥片で、測縁に細かい剥離による刃部整形を行う。

表18 石器一覧表

番号	採回番号	種類	出土位置	長さcm	幅cm	厚cm	重さg	石材
96	第81図	凹み石	兼石遺構	9.1	5.6	3.2	178	粗粒輝石安山岩
101	第83図	石 錐	区不明	3.1	1.9	0.4	2.5	チャート
102	第83図	打製石斧	1区	10.2	7.5	1.8	183	黒色頁岩
103	第83図	打製石斧	4区	6.6	4.8	0.8	47	珪質頁岩か
104	第83図	打製石斧	2区	6.6	4.8	1.7	85	珪質頁岩か
105	第83図	打製石斧	4区	9.2	4.2	1.1	62	細粒安山岩
106	第83図	打製石斧未製品?	4区	8.1	6.7	1.5	140	珪質頁岩か
107	第83図	2次加工剥片	4区	9.2	6.7	1.2	98	細粒安山岩か珪質頁岩

第4章 中屋敷東遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

1 中屋敷東遺跡の土層とテフラ

(1) はじめに

群馬県域とその周辺に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、層位や年代が不明な遺構や土層が認められた伊勢崎市の中屋敷東遺跡においても、地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、テフラ検出分析と屈折率測定を行って指標テフラの検出同定を行い、遺構や遺物の層位や年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、3-1区D地点、3-1区A地点、4区A地点、4区1号溝Aラインの4地点である。

(2) 土層の層序

3-1区D地点 (X39215 Y-57535)

3-1区D地点では、下位より暗灰褐色土（層厚8cm以上）、灰白色軽石に富み色調が若干暗い灰色砂質土（層厚5cm、軽石の最大径4mm）、灰白色軽石混じり暗灰褐色土（層厚5cm、軽石の最大径3mm）、白色軽石混じり黄灰色細粒火山灰層（層厚2cm、軽石の最大径19mm）、暗灰色土（層厚5cm）、砂を多く含む若干色調が暗い灰色土（層厚6cm）、黄褐色砂層（層厚6cm）、暗灰褐色土（層厚9cm）、灰色水田作土（層厚18cm）が認められる（第84図）。

3-1区A地点 (X39200 Y-57570)

3-1区A地点では、下位より灰白色砂層（層厚3cm以上）、暗灰色土（層厚14cm）、暗灰褐色土（層厚14cm）、灰白色軽石混じり暗灰色土（層厚6cm、軽石の最大径3mm）、灰色土（層厚7cm）、黒灰褐色土（層厚6cm）、灰色粗粒火山灰層（層厚3cm）、若干黄色がかった褐色砂質土（層厚9cm）、灰色水田作土（層厚15cm）が認められる（第85図）。この地点では、灰色粗粒火山灰層の直下から水田遺構が検出されている。

4区A地点 (X39040 Y-57560)

4区A地点では、下位より灰白色土（層厚6cm以上）、灰色砂層（層厚10cm）、若干色調が暗い灰色土（層厚6cm）、攪乱土（層厚28cm）が認められる（第86図）。

4区1号溝Aライン (X39010 Y-57510)

4区1号溝Aラインでは、下位より暗灰褐色土（層厚1cm以上）、灰白色砂層（層厚2cm）、暗灰褐色土（層厚1cm）、灰白色軽石に富み灰色砂質土（層厚7cm）が認められる（第83図B-B）。

(3) テフラ検出分析

分析試料と分析方法

指標テフラの層位を明らかにするために、上述4地点において土層ごとあるいは厚さ約5cmごとに採取された試料のうち、21点を対象にテフラ検出分析を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で観察し、テフラ粒子の量や特徴を把握。

分析結果

テフラ検出分析の結果を表19に示す。テフラ検出分析の結果、3種類の軽石が検出された。軽石は、下位よりスポンジ状に比較的良く発泡した灰白色軽

石（最大径5.8mm、珪晶：斜方輝石および単斜輝石）、発泡がさほど良くない白色軽石（最大径3.9mm、珪晶：角閃石および斜方輝石）、比較的よく発泡した淡褐色軽石（最大径2.9mm、珪晶：斜方輝石および単斜輝石）である。火山ガラスとしては、軽石の細粒物が認められた。

3-1区D地点では、試料8や試料7に多くの灰白色軽石が認められた。その層相から、ここでは試料8に、灰白色軽石で特徴づけられるテフラの降灰層相があると考えられる。また試料6のテフラ層には、白色軽石が多く含まれている。試料5より上位では、これら2種類の軽石が認められる。

3-1区A地点では、試料4に灰白色軽石が多く含まれている。また試料3には、灰白色軽石のほか白色軽石が比較的多く認められる。さらに試料3のテフラ層には、淡褐色軽石がとくに多く含まれている。

4区A地点では、軽石および火山ガラスは検出されなかった。河川堆積物の可能性が高いと思われる。一方、4区1号溝Aラインでは、いずれの試料からも灰白色軽石が少量ずつ検出された。

(4) 屈折率測定

測定試料と測定方法

土層の観察やテフラ検出分析の結果、特徴的なテフラ粒子が認められた試料のうち、3-1区D地点の試料8と試料6、さらに3-1区A地点の試料1の3点について、テフラ粒子の屈折率測定を行い、指標テフラとの同定精度を向上させることになった。分析には、位相差法（新井1972など）をもとに開発された温度変化型屈折率測定装置（古澤地質調査事務所製作 MAIOT）をもちいた。

測定結果

屈折率測定の結果を表20に示す。3-1区D地点の試料8に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、1.515-1.520である。また試料6に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、1.501-1.504である。さら

に、3-1区A地点の試料1に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、1.524-1.531(mode:1.527)である。

(5) 考察

テフラ検出分析で認められた灰白色、白色、淡褐色の3種類の軽石は、その岩相や軽石が含まれる試料の火山ガラスの屈折率測定の結果を合わせると、順に3世紀終末～4世紀初頭に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C 荒牧1968、新井1979、友廣1988、若狭2000)、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳洪川テフラ(Hr-FA 新井1979、坂口1986、早田1989)、1108(天明元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B 荒牧1968、新井1979)に由来すると考えられる。なお、一次堆積のHr-FAのほかの土層に含まれているHr-FAに由来すると考えられる白色軽石の一部には、6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保軽石(Hr-FP 新井1962、坂口1986)に由来する軽石も含まれているのかも知れない。

以上のことから、3-1区D地点の試料8付近に降灰層相があると考えられるテフラはAs-C、試料6のテフラ層はHr-FAと考えられる。3-1区A地点の試料4および試料3付近に降灰層相があると考えられるテフラは、各々As-CとHr-FAと考えられる。3-1区D地点の試料4に含まれる砂や、試料3が採取された洪水堆積物については、Hr-FAより上位で、As-Bの下位にある可能性が高い。また、3-1区A地点で検出された水田遺構は、As-Bの直下にあると考えられる。さらに4区1号溝Aラインの試料1および試料2に含まれるテフラは、いずれもAs-Cと考えられる。

(6) 小 結

中屋敷東遺跡において、地質調査、テフラ検出分析、屈折率測定を行った。その結果、下位より浅間C軽石(As-C、3世紀終末～4世紀初頭)、榛名二ツ岳洪川テフラ(Hr-FA、6世紀初頭)、浅間Bテ

第4章 自然科学分析

フラ (As-B, 1108年) などのテフラ層やそれらに由来するテフラ粒子を検出できた。本遺跡で検出された水田遺構の層位は、As-Bの直下にあると考えられる。さらに、Hr-FAとAs-Bの間の層準に洪水堆積物があることも明らかになった。

文 献

新井房夫1962「関東盆地北西部の第四紀編年」『群馬大学紀要自然科学編』10, p.1-79.

新井房夫1972「斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定-テフロクロノロジーの基礎的研究」『第四紀研究』11, p.254-269.

新井房夫1979「関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層」『考古学ジャーナル』157, p.41-52.

荒牧重雄1968「浅間火山の地質」地団研専報45,65p.

坂口 一1986「榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団編『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』p.103-119.

早田 勉1989「6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害」『第四紀研究』27, p.297-312.

早田 勉1996「関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴-とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて-」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』7, p.256-267.

友廣哲也1988「古式土師器出現期の様相と浅間山C軽石」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団編『群馬の考古学』p.325-336.

若狭 徹2000「群馬の弥生土器が終わるとき」かみつけの里博物館編『人が動く・土器も動く-古墳が成立する頃の土器の交流』p.41-43.

表19 テフラ検出分析結果

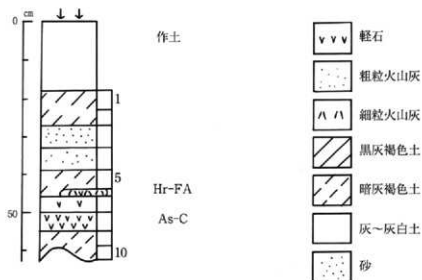
地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス			
		量	色調	最大径	量	形態	色調	
3-1区D地点	1	+	灰白>白	3.8, 1.6	++	pm	灰白,白	
	3	+	灰白>白	2.2, 2.3	++	pm	灰白,白	
	4	++	灰白>白	3.0, 2.7	++	pm	灰白,白	
	5	+++	灰白>白	4.1, 1.8	+++	pm	白>灰白	
	6	+++	白	3.2	+++	pm	白	
	7	+++	灰白	3.3	+++	pm	灰白	
	8	+++	灰白	5.8	+++	pm	灰白	
	9	+	灰白	3.3	+	pm	灰白	
	10	+	灰白	1.8	+	pm	灰白	
	3-1区A地点	1	+++	淡褐	2.9	+++	pm	淡褐
2		++	灰白>白	3.7, 2.6	++	pm	灰白,白	
3		++	白,灰白	3.9, 3.8	++	pm	白,灰白	
4		+++	灰白	3.7	+++	pm	灰白	
5		-	-	-	-	-	-	
7		-	-	-	+	pm	淡褐	
9		-	-	-	+	pm	淡褐	
11		-	-	-	-	-	-	
4区A地点		1	-	-	-	-	-	-
		2	-	-	-	-	-	-
4区1号溝Aライン		1	+	灰白	5.2	+	pm	灰白
	2	+	灰白	2.5	+	pm	灰白	

++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない, -: 認められない, 最大径の単位は, mm, bw: バブル型, pm: 軽石型.

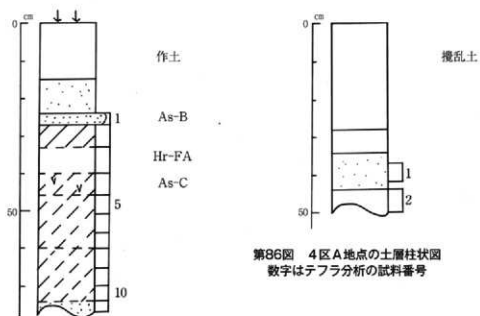
表20 屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス (n)
3-1区D地点	6	1.501-1.504
3-1区D地点	8	1.515-1.520
3-1区A地点	1	1.524-1.531 (1.527)

温度変化型屈折率測定装置(MAIOT)による, (): mode.



第84図 3-1区D地点の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号



第85図 3-1区A地点の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

第86図 4区A地点の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

2 中屋敷東遺跡におけるプラント・オパール分析

(1) はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である (杉山2000)。

(2) 試料

試料は、3-1区D地点および3-1区A地点から採取された計117点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

(3) 分析法

プラント・オパール分析は、ガラスビーズ法 (藤原1976) を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加 (電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレバート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレバート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビ

ーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各種物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10^{-6}g) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ (赤米) の換算係数は2.94 (種実重は1.03)、ヒエ属 (ヒエ) は8.40、ヨシ属 (ヨシ) は6.31、ススキ属 (ススキ) は1.24、タケ亜科 (ネザサ節) は0.48である。

(4) 分析結果

水田跡 (稲作跡) の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な5分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表21および第87図に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

(5) 考察

水田跡の検討

水田跡 (稲作跡) の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している (杉山2000)。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

3-1区D地点 (X39215 Y-57535)

作土直下層 (試料1) からAs-C直下層 (試料6) までの層厚について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、作土直下層 (試料1) とその下位層 (試料2)、およびHr-FA直下層 (試料4) では、密度が3,000~4,500

第4章 自然科学分析

個/gと比較の高い値である。したがって、これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

その他の層準では、密度が800~2,300個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

3-1区A地点 (X39200 Y-57570)

As-B直下層(試料1)からAs-Cの下位層(試料5)までの層準について分析を行った。その結果、As-B直下層(試料1)、Hr-FA混層(試料2)、As-C混層(試料3)からイネが検出された。このうち、As-B直下層(試料1)とHr-FA混層(試料2)では、密度が6,000~6,100個/gと高い値である。したがって、これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。As-C混層(試料3)では、密度が800個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

堆積環境の推定

ヨシ属は湿地的なところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境(乾燥・湿潤)を推定することができる。おもな分類群の推定生産量によると、下位層準を中心にヨシ属が優勢であり、部分的にタケ亜科も多くなっていることが分かる。

以上のことから、稲作が開始される以前の遺跡周辺は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、Hr-FA直下層もしくはAs-C混層の時期にそこを利用して水田稲作が開始されたと推定される。また、調査区周辺にはタケ亜科やススキ属などが生育する草原的なところも分布していたと考え

られる。

(6) まとめ

プラント・オパール分析の結果、水田遺構が検出された浅間Bテフラ(As-B, 1108年)直下層では、イネが多量に検出され、同層で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、榛名二ツ岳決川テフラ(Hr-FA, 6世紀初頭)直下層やHr-FA混層でもイネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。さらに、浅間C軽石(As-C, 3世紀終末~4世紀初頭)混層などでも稲作が行われていた可能性が認められた。

本遺跡周辺は、稲作が開始される以前はヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、Hr-FA直下層もしくはAs-C混層の時期に、そこを利用して水田稲作が開始されたと推定される。

文 献

- 杉山真二2000「植物珪酸体(プラント・オパール)」『考古学と植物学』同成社, p.189-213.
藤原宏志1976「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-」『考古学と自然科学』9, p.15-29.
藤原宏志・杉山真二1984「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析による水田址の探査-」『考古学と自然科学』17, p.73-85.

表21 プラント・オパール分析結果

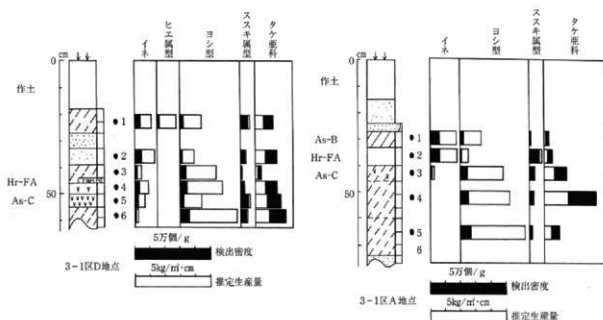
検出密度(単位:×個/g)100

地点・試料 分類群 学名	3-1区D地点						3-1区A地点				
	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5
イネ <i>Oryza sativa</i> (Domestic rice)	38	45	15	30	23	8	60	61	8		
ヒエ属型 <i>Echinochloa</i> type	15										
ヨシ属 <i>Phragmites</i> (reed)	23	15	38	45	23	61	22	8	45	52	68
ススキ属型 <i>Miscanthus</i> type	53	30	8	22	53	38	7	69	30	22	15
タケ亜属 <i>Bambusoideae</i> (Bamboo)	120	142	38	142	167	198	30	53	143	337	98

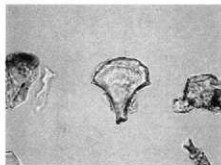
推定生産量(単位:kg/m²・cm)

イネ <i>Oryza sativa</i> (Domestic rice)	1.10	1.32	0.45	0.88	0.67	0.22	1.76	1.80	0.22		
ヒエ属型 <i>Echinochloa</i> type	1.26										
ヨシ属 <i>Phragmites</i> (reed)	1.42	0.94	2.40	2.83	1.43	3.85	1.42	0.48	2.86	3.31	4.29
ススキ属型 <i>Miscanthus</i> type	0.65	0.37	0.09	0.28	0.66	0.47	0.09	0.85	0.37	0.28	0.19
タケ亜属 <i>Bambusoideae</i> (Bamboo)	0.58	0.68	0.18	0.68	0.80	0.95	0.14	0.26	0.69	1.62	0.47

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。



第87図 プラント・オパール分析結果



イネ
3-1区D地点 5



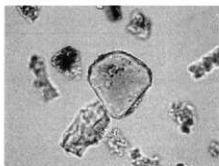
イネ
3-1区D地点 5



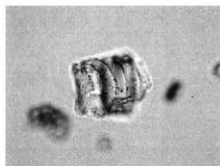
キビ族型
3-1区D地点 1



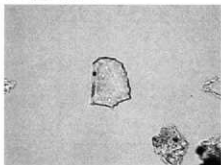
ヨシ属
3-1区D地点 6



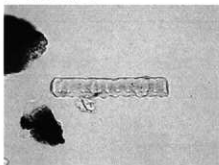
ススキ属型
3-1区D地点 6



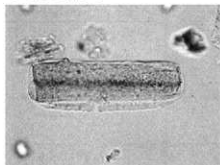
ネザサ節型
3-1区D地点 4



ミヤコザサ節型
3-1区A地点 5



棒状珪体
3-1区D地点 2



イネ科の茎部起源
3-1区D地点 6

植物珪体(プラント・オパール)の顕微鏡写真 ————— 50 μ m

第5章 まとめ

縄文時代 この地域では草創期から晩期まで連続と遺跡形成が続いたことが判明している。広く展開する低湿地に面した微高地上に草創期の遺跡が立地することは、同じ北関東自動車道関連の発掘調査が行われた前橋市徳丸仲田遺跡でも判明している。ヤンガードリアスの寒冷期が終わり、急激な温暖化に向かい始めた気候環境のなかで、低地に面した低木林や草原、湿原において、土器による食物の調理を始めたばかりの草創期縄文集団が、何を主な食料として獲得していたのかは非常に興味ある問題だ。遺構の種少さや出土遺物の少なさは、当時の生活様式が定住ではなく移住を繰り返したことを物語るのだろう。旧石器時代の主な狩猟具だった槍から、弓矢に転換し始めたことを考えれば、草原や湿地に集まる中小型の獣や水鳥などが主な狩猟対象となり、また魚をはじめとする水生動物も対象となったのだろうか。波志江沼の南北には、現在でも蛇行するくぼ地地形が存在することから、本来赤城山麓末端の湧水を谷頭とする侵食谷が形成されていた可能性が高い。それが縄文草創期まで遡るとの確証は得られていないが、一時的なキャンプであったとしても、草創期の縄文人がそこに居を構えるだけの条件を満たす地形環境であったのだろう。波志江沼周辺では、縄文遺跡が早期、前期、中期、後期とその後も断続的に残されており、数少ない晩期例についても、やや離れるが荒砥川左岸の八坂遺跡が知られている。窪穴住居群による定住集落形成が明確化するのは前期からである。遺跡数や出土遺物量もこのころから増大するといつてよい。粕川右岸の五日牛清水田遺跡で発見された前期花積下層式の集落はその典型的な例だ。本遺跡で検出された前期の集石遺構も、そのような定住集落に関連する痕跡の一部と考えてよいだろう。住居跡については検出されなかったが、集石遺構の存在する5区は微高地南端にあたるため、本来の縄文集団の居住域は、北側に広がる微高地のより高く平坦な地形上に立地していたと推定され

る。

弥生時代 遺構はまったく確認できなかったが、調査区北西部の1～3区で出土した中期の弥生土器が注目に値する。これらは、いずれも小破片ながら細い沈線帯で平行線文や曲線のな区画文を描き、縄文を地文や区画内の充填文として施すのが特徴である。器形は壺・甕・台付鉢が見られる。ここに見る器形と文様の特徴から、群馬県西半に主な分布をもつ中期後半の中部高地型柳描文系の竜見町式でないことは明白で、むしろ東北方南部の土器群との関連性が強い。ただし、東毛地域で散見する中期後半の平行沈線文系の南御山Ⅱ式、あるいは後続する段階の二ツ釜式とも異なる特徴をもつ。細い平行沈線文と縄文の組み合わせや、壺口縁の折り返し形状の特徴から、栃木県に分布する「御新田式」や埼玉県北部の「北島式」に関連するものかとも考えられたが、刺突列や多条沈線文帯が見られないことから、これも異なる型式の土器群であると想定した。全て破片資料のため、器形や文様構成の詳細を知り得ず、十分な型式の検討はしていないが、縄文を充填した沈線区画文と胴部における条痕の様相から、資料の一括性になら保証はないが、本報告ではおおむね中期中頃前後に属する土器群と位置づけてみた。中期中頃における群馬県内の土器としては、吉井町神保富士塚遺跡、長根安坪遺跡、太田市（旧尾島町）阿久津宮内遺跡出土品がまとまっている例で、他には単独あるいは遺構に伴わない破片資料として散見されるものがほとんどである。植物茎工具による2本一単位の沈線文様は、柳描文に転換していくとみられる「神保富士塚式」→「長根安坪遺跡例」よりも、むしろ栃木県の「出流原式」→「御新田式」の文様系統に近い要素と理解したい。その意味で、本遺跡例は、この「出流原式」→「御新田式」のある時期に並行する類似型式か、あるいはその中間を埋める型式として位置づけられる見通しをたてようと思う。全形は知り得なかったが、69～71の縄文地文の台付鉢（高杯）脚部が、中期後半にはほとんど見られず、中期前半～中葉の再葬墓群で知られる

栃木県清六Ⅲ遺跡のSK331出土高杯に近似することは、栃木県の中期前半～中葉の土器群との類似性を示す好例であると考えてよいだろう。

「御新田式」は、群馬県内でも竜見町式に伴ってしばしば見られるが、近年では埼玉県北部に分布をもつ「北島式」との強い関連性が話題になっている。「御新田式」も「北島式」も、複数の沈線文や刺突文、縄文を組み合わせた装飾性の高い壺を大きな型式的特徴としているが、宮ノ台式や栗林式土器との共伴例から、中期後半に属するのは間違いない。本遺跡周辺でも、西太田遺跡や荒砥原遺跡などで、竜見町式やそれと東北地方南部との折衷ともいえる特異な中期後半の土器群がよく知られているが、これらとほぼ同時期に、「御新田式」や「北島式」と関わりの深い特徴を持つ土器群の存在が知られる。形骸化したフラスコ文を描く荒砥原遺跡5T3号堅穴例などはその一例だが、本遺跡出土土器は、これよりも先行する中期中頃の土器群が、すでに赤城南麓に存在したことを示す稀少な例として意義を持つ。従来より、伊勢崎周辺～赤城山南麓は、西からの竜見町式と北東からの東北地方南部系、さらに南からの池上式や宮ノ台式が流入・交錯する地域であることが指摘されていたが、これに栃木県南部・埼玉県北部の土器群とその分布がどのようにかわるのかを解明することが、関東地方の弥生地域社会形成過程の研究を進展させる上での重要な検討課題のひとつになっている。このことから、当地域における最古例ともいえる本遺跡の中期弥生土器は、今後の貴重な研究対象となるのは間違いないだろう。

古墳時代 弥生時代中期後半には、数少ないながらも確実に認められる集落の存在が、やがて後期には希薄となり、約200年近くの間、極端な過疎化が進んだのは間違いない。それが一転して新たな水田開発を伴う集落形成が開始されたのは、古墳時代初頭である。本遺跡で検出された浅間C軽石で覆われた水田址は、このことを如実に示す好例といえよう。ところで、浅間C軽石の降下年代について

は、4世紀中ごろ説から4世紀初頭説に移行しつつあるが、近年の科学的年代測定法の成果からは、さらに遡らせて3世紀後半代の可能性がでてきた。浅間C軽石直下の出土土器は、近畿地方における庄内式新段階（浪尾の廻間Ⅱ期新）にあたり、3世紀半ばを超えたところの暦年代観を示す測定例が増えつつあることが、その根拠である。この時期にはすでに、西毛から移入したと想定される樽式土器の集団や、埼玉県北部から移入したとも考えられる「古ヶ谷・赤井戸式」土器の集団によって、水田経営が始められていたが、それらの遺跡分布はより北方の丘陵と谷が連続する赤城山南麓末端に立地している。波志江沼周辺低地での水田開発の証は、浅間C直下水田が検出された本遺跡が嚆矢と考えてよいと思われる。その経営の主体者が残した住居等の発見はなかったが、わずかに出土している該期の土器は、古墳前期はじめ頃の東海地方～南関東の土器と類似性が高い。これだけで彼らが遠隔地からの移住者であると決め付けるのは早計であるが、すくなくとも、在来系弥生土器ではなく外来系土器を主体的に使用する集団が、本地域のような低湿地の卓越する地形のもとで、大規模な水田開発を始めたのは間違いないように思える。そして、継続性の問題はあるにしても、規模を縮小することなく古墳時代を通して水田が作られ続けたことは、その初期の開発が成功したことを物語るとともに、当初から安定的な継続的経営と経営規模の拡大といった長期的展望をもって開発に臨んだのではないかと、との憶測も可能だ。古墳社会の経済基盤は偶然や幸運の賜物で生まれたのではなく、収穫量の長期安定と増大を最初から目的とした開発行為を基礎としていたのである。



古墳時代 (As-C 下) 水田面 4 区 (東上空から)



古代 (As-B 直下) 水田面 1 区 (西上空から) 左上は波志江沼



4区6号溝 (西から)



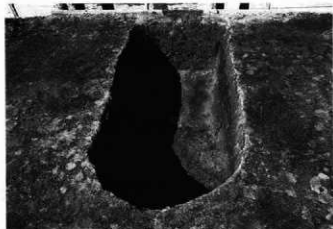
5-1区1号溝 (北から)



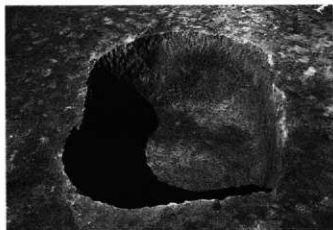
5-3区3号溝 (東から)



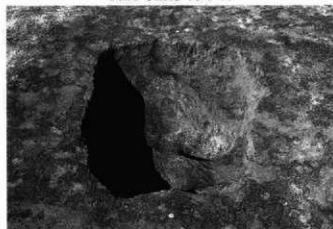
5-3区中・近世溝群 手前から5号溝・2号溝 (西から)



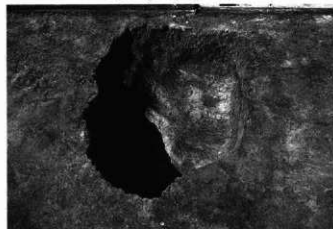
1区1号土坑 (東から)



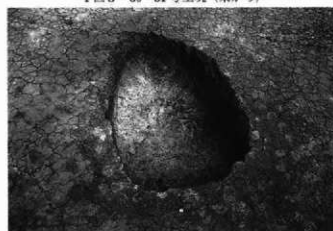
1区2号土坑 (東から)



1区3・30・31号土坑 (東から)



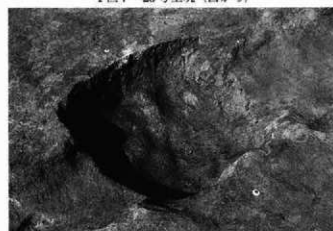
1区5号土坑 (東から)



1区7・23号土坑 (西から)



1区8号土坑 (東から)



1区9号土坑 (東から)



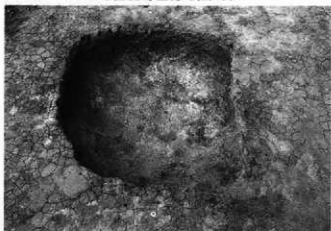
1区10号土坑 (東から)



1区11号土坑(東から)



1区12号土坑(東から)



1区14号土坑(東から)



1区18・32号土坑(東から)



1区19号土坑(東から)



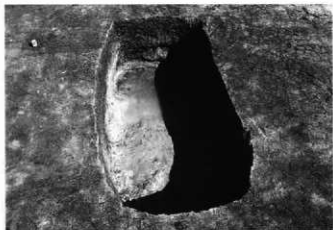
1区22号土坑(東から)



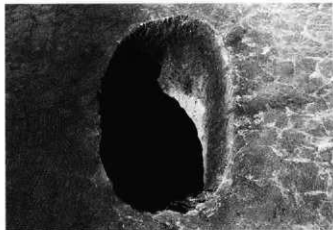
1区24・28号土坑(南から)



1区25号土坑(西から)



1区26号土坑 (東から)



1区27号土坑 (東から)



1区34号土坑 (東から)



1区35号土坑 (北から)



4区3号土坑 (西から)



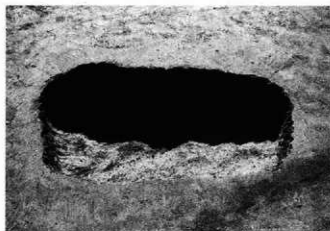
4区8号土坑 (西から)



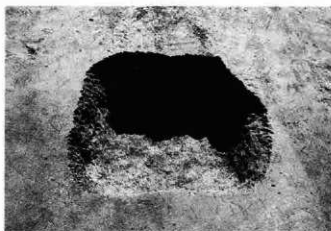
4区11号土坑 (西から)



4区15号土坑 (北から)



4区38号土坑(北から)



4区39号土坑(北から)



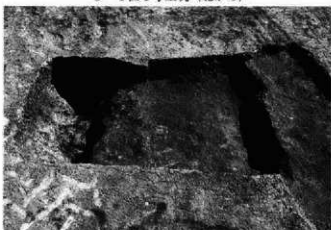
4区44号土坑(南から)



5-1区1号土坑(北から)



5-1区2号土坑(南から)



5-1区3号土坑(西から)



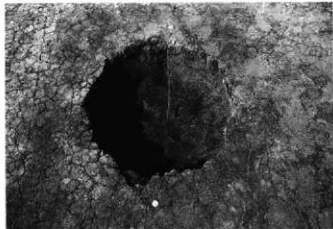
5-1区4号土坑(北から)



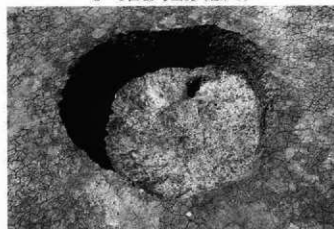
5-1区19号土坑(南から)



5-1区20号土坑(北から)



1区4号土坑(東から)



1区20号土坑(東から)



4区10号土坑(南から)



4区18号土坑(北から)



4区27号土坑(東から)



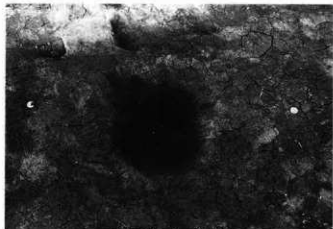
5-1区5号土坑(東から)



1区15号土坑(東から)



4区17号土坑 (南から)



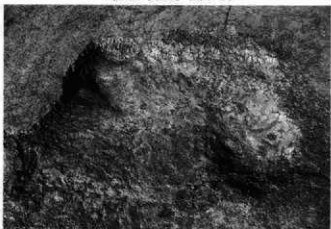
4区19号土坑 (南から)



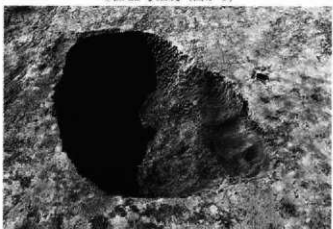
4区21号土坑 (南から)



4区22号土坑 (西から)



4区24号土坑 (南から)



4区28号土坑 (東から)



4区29号土坑 (西から)



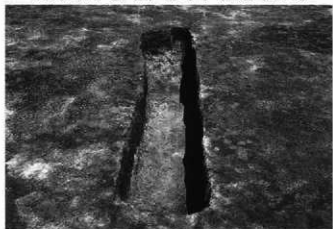
4区31号土坑 (北から)



4区32(下)・33(右)・34(上)号土坑(西から)



4区35・36・37号土坑(北から)



1区13号土坑(南から)



1区16号土坑(東から)



1区21号土坑(東から)



4区1号土坑(西から)



4区2号土坑(西から)



4区12・13号土坑(西から)



4区14号土坑(西から)



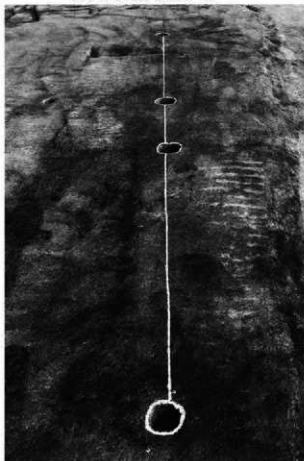
4区30号土坑(西から)



4区40号土坑(北西から)



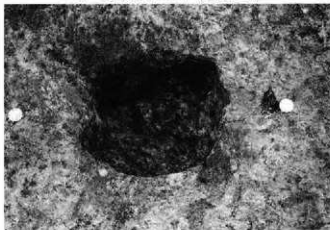
4区23号土坑土層断面(南西から)



5-1区ピット列(西から)



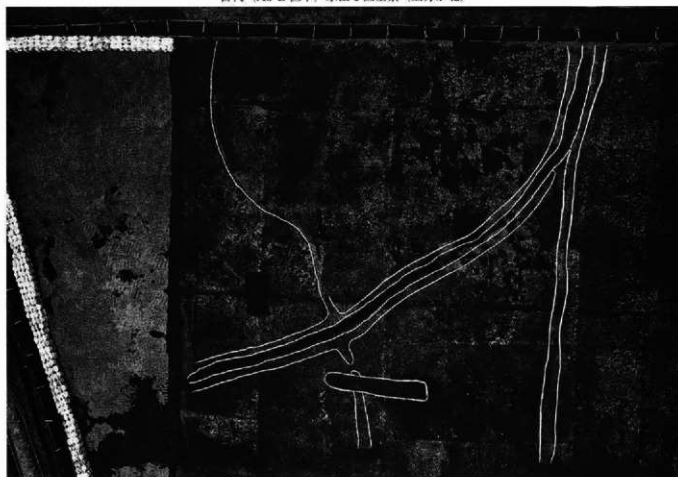
5-1区38号ピット(南西から)



5-1区42号ピット(北から)



古代 (As-B 直下) 水田1区全景 (上方が北)



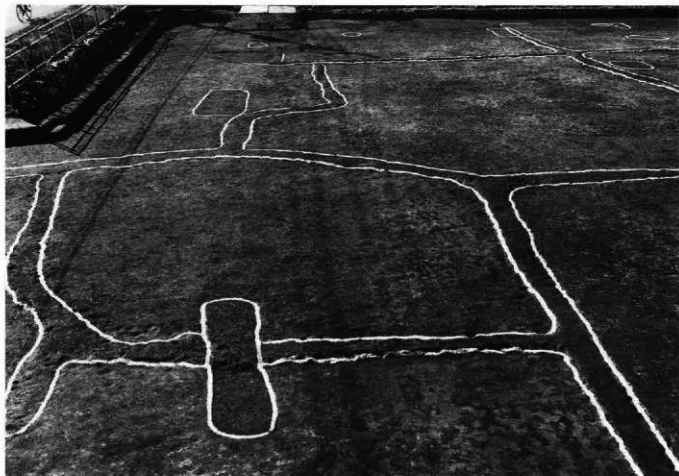
古代 (As-B 直下) 水田1区水路全景 (右方が北)



古代 (As-B 直下) 水田1区畦近景 (西から)



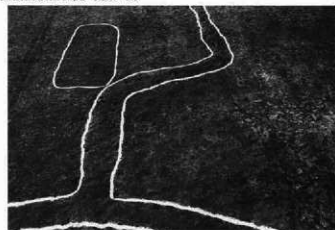
古代 (As-B 直下) 水田1区田面検出状況 (南東から)



古代 (As-B 直下) 水田3区田面検出状況 (東から)



古代 (As-B 直下) 水田3区畦近景 (南から)



古代 (As-B 直下) 水田3区畦近景 (東から)



古代 (As-B 直下) 水田3区畦近景 (南から)



古代 (As-B 直下) 水田3区水口近景 (南から)



古代 (As-B 直下) 水田4区全景 (南から)



古代 (As-B 直下) 水田4区田面検出状況 (南から)



古代 (As-B 直下) 水田5-3区畦検出状況 (南から)



5-3区南壁土層断面、中央灰色層が As-B
下位白色層は Hr-FA



5-3区南壁土層断面



古墳時代1・2期水田4区田面検出状況（南から）



4区畦検出状況（南から）



4区水田面検出状況



古墳時代1・2期水田4区畦検出状況（東から）



古墳時代3期（As-C 混土下）水田3区田面検出状況（南から）



古墳時代3期（As-C 混土下）水田3区田面検出状況（東から）



古墳時代3期 (As-C下) 水田4区全景 (南から)



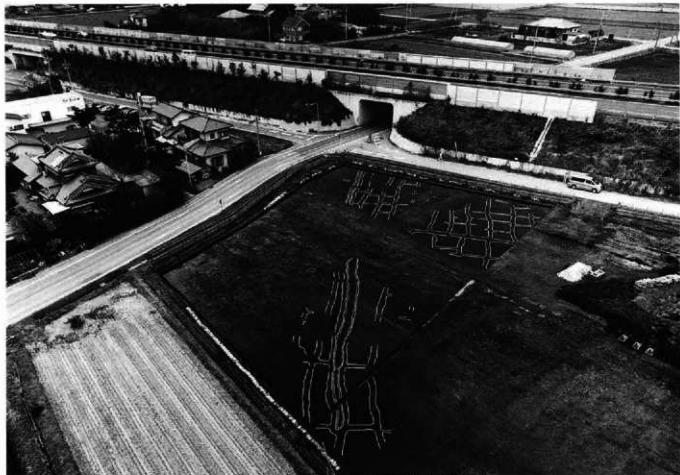
古墳時代3期 (As-C下) 水田4区中央部 (上方が北)



古墳時代3期 (As-C下) 水田4区東半部全景 (南東から)



古墳時代3期 (As-C下) 水田4区畦区画近景 (上方は北)



古墳時代3期 (As-C下) 水田4区西半部 (上方は北西)



古墳時代3期 (As-C下) 水田4区西半部畦区画全景 (東から)



古墳時代3期 (As-C下) 水田4区畦と水路検出状況 (北から)



古墳時代3期 (As-C下) 水田4区畦検出状況 (西から)



古墳時代3期 (As-C下) 水田4区水口検出状況 (南から)



古墳時代3期 (As-C下) 水田4区畦検出状況 (南から)



古墳時代3期 (As-C下) 水田4区畦検出状況 (南西から)



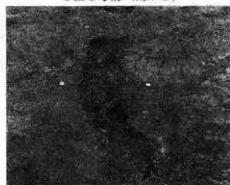
3区古代～古墳時代の耕作溝群（北東から）



1区5号溝（北東から）



1区6号溝（南から）



1区4号溝（北東から）



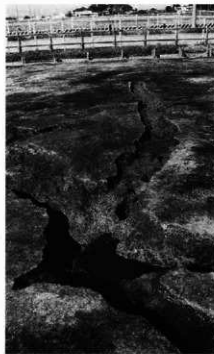
1区古代～古墳時代の溝群（南東から）



1区10号溝 (北から)



1区12号溝 (北から)



1区14号溝 (南から)



1区13号溝 (北西から)



1区16号溝 (北東から)



1区11号溝 (南東から)



1区17号溝 (東から)



1区15号溝 (南から)



1区7号溝合流地点（北から）



1区7号溝東部段差地点（東から）



1区7号溝西部段差地点（東から）



1区7号溝環状部分（東から）



2区1号溝（南から）



2区1号（右）・2号溝（左）（南から）



2区3号溝（南から）



2区1～3号溝遠景 (南から)



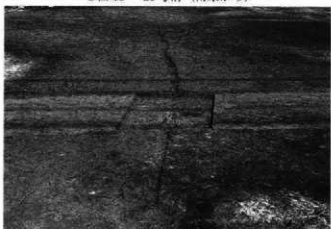
2区2号溝土層断面



3区18～21号溝 (南東から)



3区19・20号溝合流地点土層断面



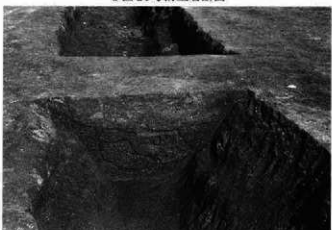
3区23号溝全景 (南から)



3区24号溝土層断面



3区26号溝 (南東から)



3区26号溝土層断面



4区2号溝(右)・3号溝(左)全景(北から)



4区(左より)1号溝・2号溝・3号溝全景(南から)



4区2号溝(左)・3号溝(右)土層断面



4区2号溝遺物出土状況(南から)



4区10号溝(南から)



4区10号溝北壁土層断面



4区10号溝南壁土層断面



4区10号溝中央部土層断面



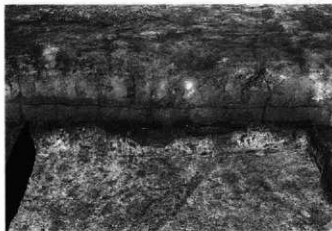
4区4号溝(東から)



4区4号溝土層断面



4区8号溝、左上は1号溝（北から）



4区8号溝土層断面



5-1区2号溝土層断面



5-1区2号溝（南から）



5-1区4号溝（北から）



5-1区4号溝土層断面



5-3区 (手前から) 6号溝・7号溝 (東から)



5-3区5号溝 (南から)



5-3区5号溝土層断面



5-3区6号溝 (右) 7号溝 (左) (南から)



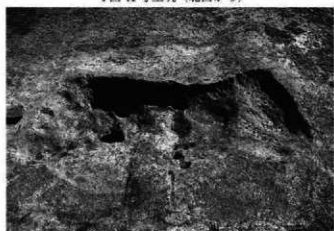
5-3区7号溝土層断面



4区41号土坑 (北西から)



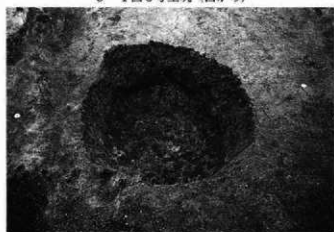
4区43号土坑 (南から)



5-1区6号土坑 (西から)



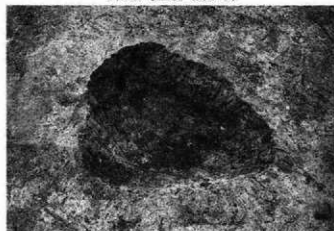
4区5・6号土坑 (西から)



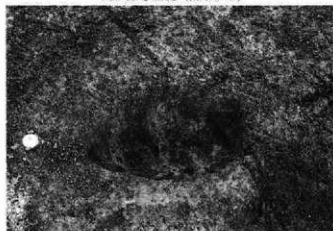
4区20号土坑 (南から)



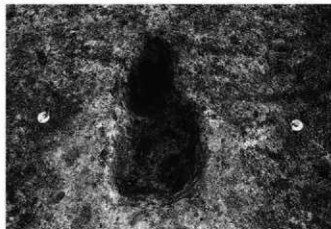
4区45号土坑 (南東から)



4区42号土坑 (北から)



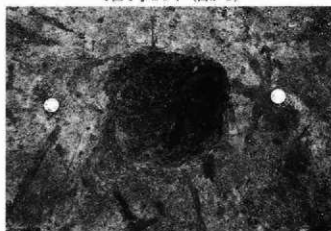
4区3号ピット (南から)



4区4号ピット (西から)



4区5号ピット (南から)



5-1区37号ピット (南西から)



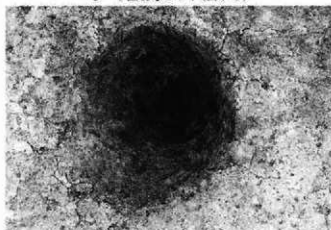
5-1区39号ピット (西から)



5-1区40号ピット (西から)



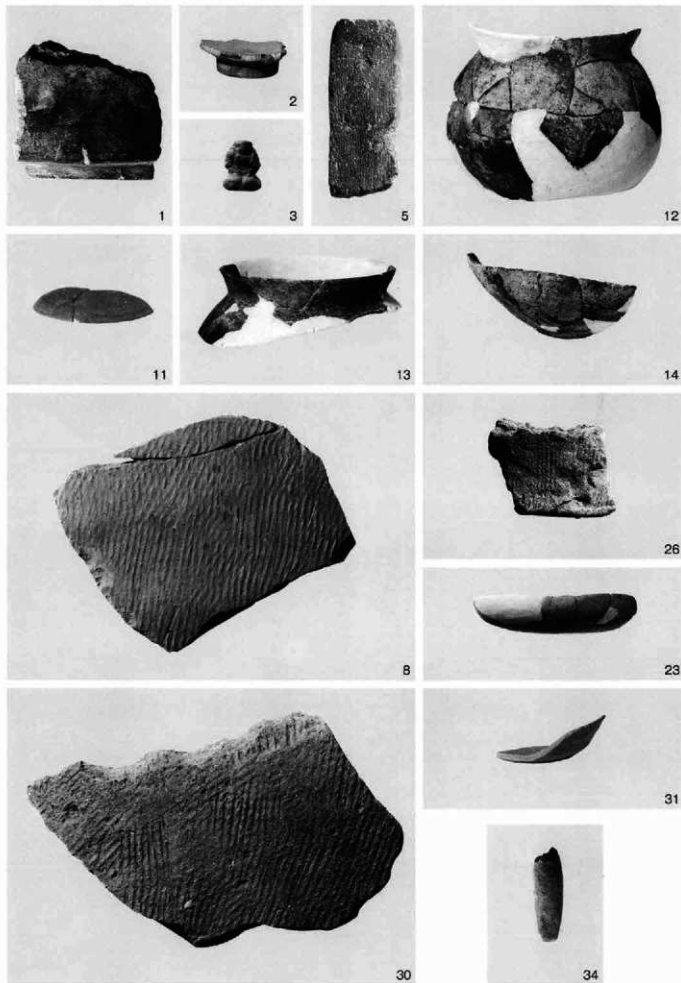
5-1区41号ピット (西から)

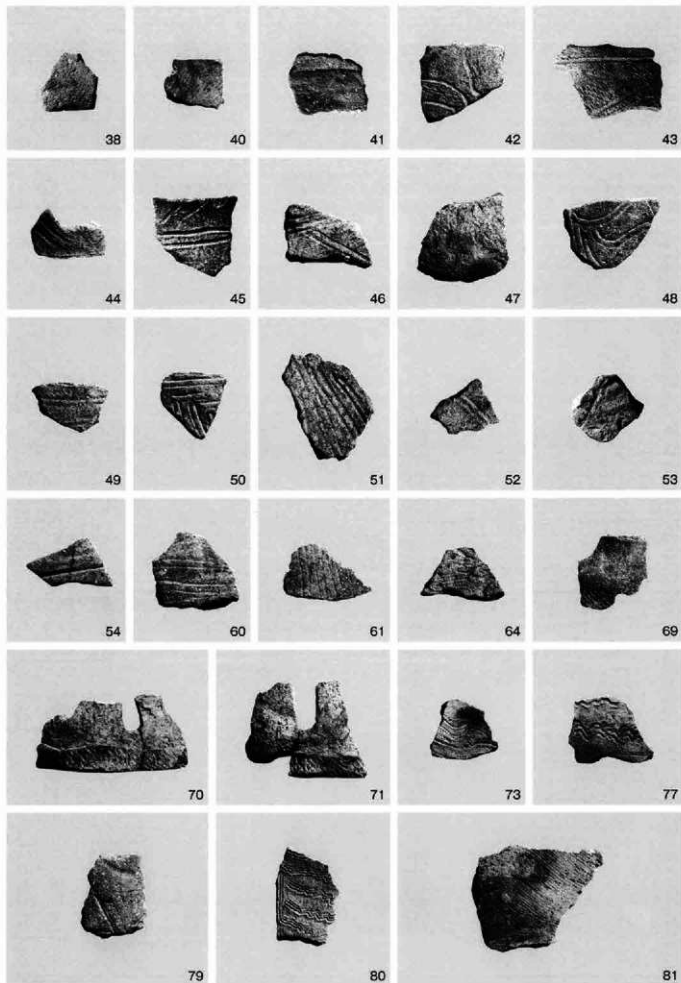


5-1区45号ピット (北から)



5-3区集石遺構検出状況







報告書抄録

ふりがな	なかやしきひがしいせき・たなかだいせき・おおぬましたいせき
書名	中屋敷東遺跡・田中田遺跡・大沼下遺跡
副書名	北関東自動車道（伊勢崎PA(仮称)）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第393集
編著者名	大木紳一郎
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20070130
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8565
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橋町大字下箱田784-2

遺跡名ふりがな	なかやしきひがしいせき・たなかだいせき・おおぬましたいせき
遺跡名	中屋敷東遺跡・田中田遺跡・大沼下遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんいせきしはしえまらおおあざなかやしきひがし・たなかだ・おおぬました
遺跡所在地	群馬県伊勢崎市波志江町大字中屋敷東・田中田・大沼下
市町村コード	10204
遺跡番号	10005-00967、10005-01049、10005-01050
北緯（日本測地系）	
東経（日本測地系）	
北緯（世界測地系）	362117
東経（世界測地系）	1391127
調査期間	20030701-20040331
調査面積	23,425
調査原因	北関東自動車道パーキングエリア建設
種別	生産地（水田）／散布地
主な時代	縄文／弥生／古墳／平安／中世／近世
遺跡概要	生産地-古墳+平安+中世+近世-水田+水路+土坑／縄文-集石遺構-土器+石器 ／散布地-弥生-土器
特記事項	古墳～平安の水田址。弥生中期土器。

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第393集

中屋敷東遺跡・田中田遺跡・大沼下遺跡

北関東自動車道路(伊勢崎PA(仮称))建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 19 年 1 月 2 6 日 印刷

平成 19 年 1 月 2 6 日 発行

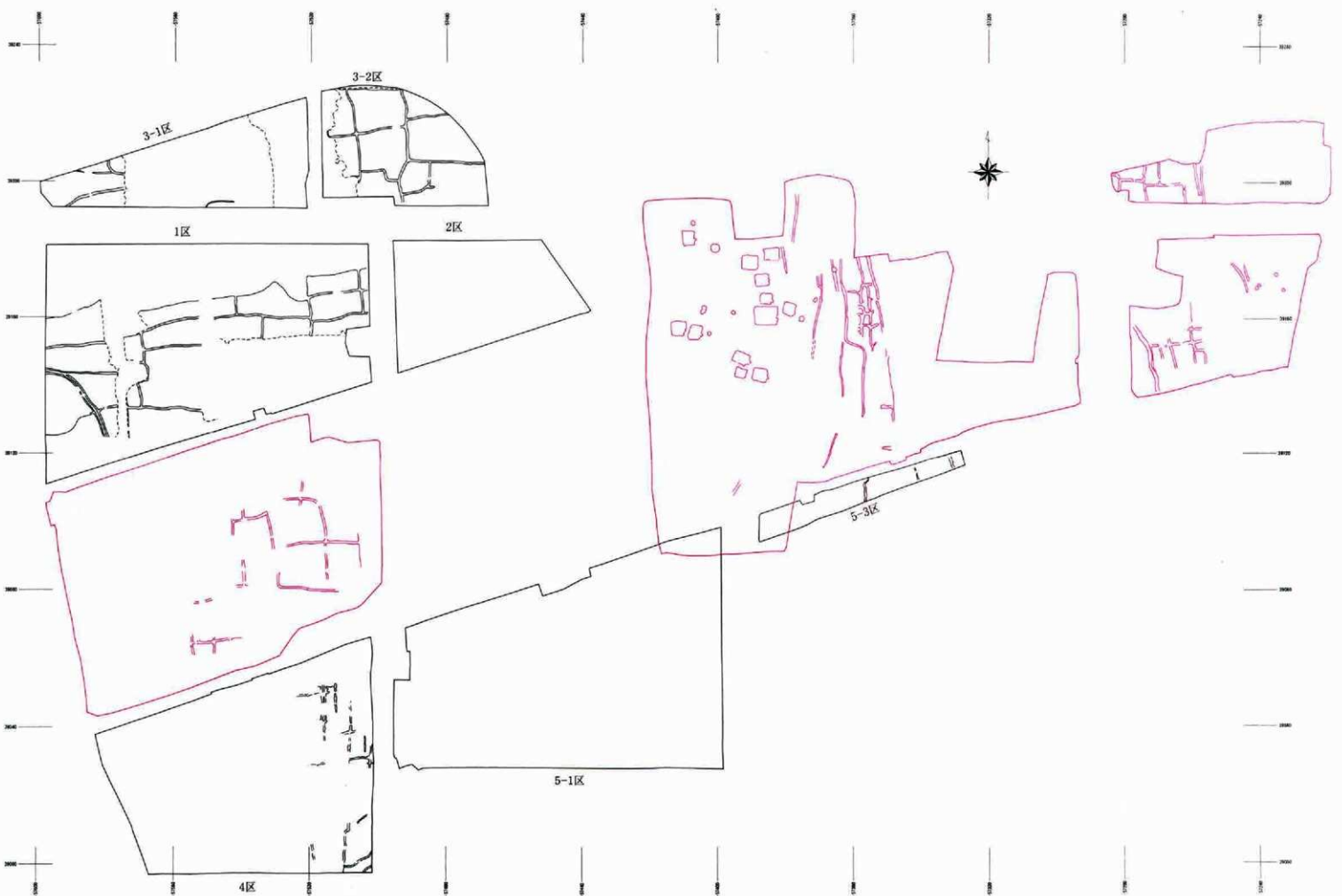
編集／発行 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橋町下箱田784-2

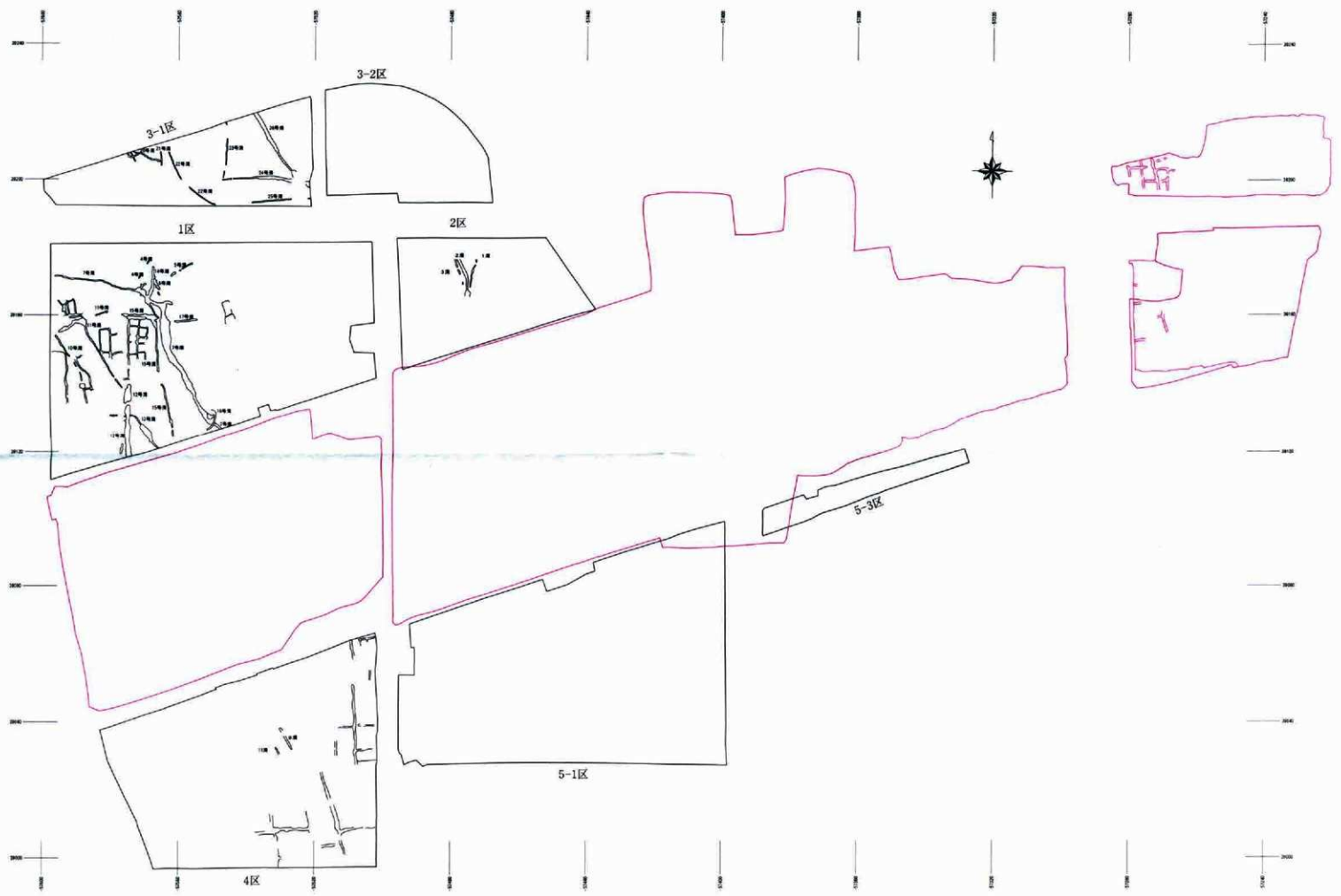
電話 0279-52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org>

印刷 松本印刷工業株式会社



付圖1 中・近世遺構全体圖1/1000
As-B下水田と古代遺構全体圖1/1000



付図2 古墳時代~古代遺構全体図1/1000
As-C混土下遺構全体図1/1000